

院様の御恩を思ひ落涙し 公儀の御恩を思ひて勿躰なくこのこと母上に入御聴もうれし新右衛門はよく知るへし其余この難有さをしるものなし可歎こと也子路負米のことおもひ出ても 行道院様の御事になく也  
○十六日 くもり なら抱の學問侍榮吉至而遊ひすき也一昨日の夕かた庭へ出てみれば三の間の入側にてひるねをして居る也うまねしたる躰に付いたつらなとして驚さむとおもひしまゝにおさと一 同築山へ上りてわすれたり跡にて聞は腹いたむといふ也きのふの朝鍵を遣ひ居たるに起來る故に汝めつらしく早しといひしに昨夜はらいたむといふに付そは大事にせよ藥やらむとて西大寺の芳心丹又は甘草湯など遣したりおさと例の通不便かりて葛湯など遣したりけさ聞は昨夜中くるしみていねすといふ故にいしやを呼に遣し勝南院宮内來り診察の上これは疝氣にてつよく時候にあたり唇上に活へき所なしと云され共附子劑をくれたりこの二三ふくにて療治とゝかねは助からすといふ也さてくゝ人間のしれぬもの

なるを常なから驚たりこの男妹は人のかたへ去々月か嫁し母は阿州は用事ありて去々月行いまた歸らす男子は親ひとり子ひとり也母のこゝろいかならむなとおもひて加賀屋助藏を呼にやり外にも醫師をかけたりこれも同案也けふあすしのけは助かるへしとおもひていろく世話をする也人生如朝露なといふことけにもしかり醫者附切に而藥をのませたるに少々見直したりされ共眼くほみいろ青く小便にも兩人に而連行ねかへりも壹人に而はならぬ也一昨日までは騒き歩行たるわか男也病の所伏可恐々々

○十七日 くもり きのふひる後醫者來りて榮吉は病氣を六ヶ敷又々いひて歸りたり其跡に而砂糖湯をのみ腹よしとて飯少々給たり然ルに熱大に發したれば用人共様子をみむとて手をとればよほと不快に而中々女さわきところにあらずなといふ躰全にねつにうかされたるかとしよつて又醫者の方の人を遣したり其内本性になりたる也俊藏來りていふ左に脈

家來共は長  
屋に居れ共

母之阿州  
行歸るまで  
はわか手も  
榮吉に置し  
榮吉の母も  
たのみにし  
このみは  
たのみにし  
らむか第  
らむか第  
かなる也  
不便

あれ共右はなきかことしといふ我大に驚て曾る醫のはなしを聞に右之脈  
不足になりては無間も死するといふ也今一度醫の方の人をやれなといふ  
うちに醫來りてもはや一夜中もたすと云其ことを聞居うちに表のかた  
かしましく順作走り來りて只今以之外也とてはや死せし也其速なること  
いふへからす榮吉は墮弱にはあれ共よほとの子にて詩文にもよく得手  
たれはおしくおもふ也この頃も出精せよとて段々異見の詩六十韻余の古  
詩をつくりて見せたるにはや如此舉家一同驚て血色あるものなしかゝる  
とき江戸と違ひて遠國はよほと人々のおもひ込ちかふ也夫故に看病も行  
届なれ共氣をうつこと格段也

洒淚少年俊才子。今朝忽弔北山靈。可憐曾示戒言什。空換法華一部經。

去月十七日は鳴物停止中に付參拜をせず今日は中院屋東大寺西照寺に參  
拜いたす死穢一日踏合行水次第とありて其上式居を隔つれば構なしされ  
共こゝろして家來其外へ行水なとさせたり

○十八日 くもり 榮吉か母のさとは相應なるものにて榮吉か様子次第  
にては金をも出す積故に母は去々月阿波へ行たりけふかあすは歸るつも  
り也と也母の驚て狂氣やせむとてかゝやより番頭一人大坂まで出したり  
我おさとすらも榮吉の死せしはまことかいかにとおもひ迷ふ位なれば榮  
吉か母のことおもひやらるゝ也榮吉か人にいはるゝことあれは常にいふ  
は我は汝一人の成長の見届たさに世に長らへて居る也しかるにもし人か  
ましくならずは生て詮なし汝を殺して死と常にいひき今其ことをおもへ  
は世にもあはれなることゝとておさとと涙を流す也よほと才あるもの  
に何事もよく出來別而詩作文章などは往々相應なる人になるへしと常  
にわれのいふ故におさとと不便かりて其上に近頃の者なれ共書物さす  
ること或は書籍のくりものなと申付る故に日々にはわか側へ出居たる故に  
妬まるゝ氣味もあるとておさとか考にてわさと詞をかくることを少くし  
たりし也さて死してみれば不自由也夫に付るも彌吉かことなとまでおさ

高サ二尺壹寸三分  
フタ 二寸五分  
足 三寸八分  
深サ壹尺六寸六分



足のうち左  
右一ヶ所つ  
穴ありひも  
夫よりひも  
を通して今  
の長持其外  
のクハンに  
かえたり

とかおもひ出てかなしかる也われも一兩日又々心動きてこまる也よつて  
こゝろを養ひてとり直す積り也父子の情あやしむへき事也榮吉か學問と  
才は賣買のなるものならば百兩は捨うり也市三郎に買てやりたしと常に  
いひしこと也自由にならぬもの也  
○十九日 くもり 大塔宮のかくれて賊を欺き給ひたるといふ大般若經  
のはこ今にならの般若寺にありと云取よせてみるにくろ漆にて塗たり書  
面の寸尺よりみればすかたは大きなものにて二人もかくれられるほと  
のもの也圖は上に出せり關東にてからひつといふもの也圖にあることく  
そこに木をわたしあればそこぬけす地との間三寸八分もあきあればシツ  
ケあからす今のものよりは手間かゝれとも必保ちかたにはよし足は三ケ  
所ツ、くきを打て其上をくしかへしのかなものを打たり今の紙といふも  
の、頭にいろ／＼の細工あるかことしされ共かなものは今一ツもなしみ  
なはかれたるあとあり人のとりしなるへしならにては東大寺春日など常

の雜長持といふものもみなこのからひつ也春日にて御かりやの大工辨當  
をもちほふといふもの迄もこのからひつ也古風なること也今も少々つ  
ゝのこり居也古言又しかり乍去高市郡これはかし原に 神武の御宮を立  
給ひて天下をしらしめしたる所なれば名高き所也タケチとよみて高市は  
假字也され共みなタカイチといひ神南村といふはいにしへかみなひ山と  
いふ所ありて近く古今にもやかてしくるゝかみなひの森とよみある所也  
今はジンナンといふ也契沖か大和へ古の詞ありやとて尋來りし時に淡菜  
はジュンサイはから名和名チヌナハといふもの也夫を大和のもの今は土  
百姓といふよし夫は樂器のトヒヤウシをとる器に似たればかたちにつけ  
て呼名なるにかゝるあさましき名をいふとて歎たると同じことにて古言  
大に失たり春日山に貌カホとりといふ鳥あり名高きものなれと今しる人なし  
千蔭はカツホウ鳥なるへしといへり呼子鳥又しかり常にみる鳥なるへけ  
れとしる人なし鶉はヌエなるを笛とりといひ今はよたかと呼也万葉のう

たに多きものにて常に居るとり也いにしへのこと日々に變りて知る人少  
大に可笑ことのみ多き也ならの地にて和學をなし眞淵契冲らのこときも  
の一人あらは大なる益あるへきに二百年來學者あることをきかす故に宣  
長か神武のみさゝきを大にあやまりしにいたれり神武御陵考といふもの  
をわれこの頃書たり

○廿日 くもり 此ほとおさと大にこゝろよしならにて薬師寺の佛足石  
をみしときの記行なと書かゝりたりきのふ迄に出來たり細字にて三拾枚  
はかりのもの也朝よりよるまでつゝ書居る也追々に紀行をかくつもり也  
夫にて少もつかれすといふ盲人のあんま來りて奥さまの御聲よくならせ  
られたりといふ也左もあるへきか持病もひさく起らぬ也この躰ならば  
よかるへしわか日記の書躰昨日の所より少々わるしこれは右之指の筋を  
昨朝市三郎と鍵を遣ひてあやまりてあたり筋の上なればはれて執筆六ヶ  
敷故也少も病にてはなしきのふ糟にてたでよくもみたるに今朝は大によ

し市三郎のやり大にあかりたり劍術もあかりしなるへけれ共なか／＼切  
かみの藝なしはや四年になり日々のことく遣へとも田舎は可歎こと也わ  
かきもの田舎に居れば無藝になる也

○廿一日 雨時候あしゝ 病人多しといふ左もあるへし乍去前記之通に  
付奥には病人なしこの頃榮吉か病死其上に先達而之四郎の卒中彼是にて  
下女など少々はらいたみても大に驚く也乍去何もことなし○わか手のい  
たみ所按摩にもませて其上に焼酎にてたでたれば二日にて本復せりうち  
みくしきの類早くもむへき事也され共其日にいたむ所をもむはあしゝよ  
くいためたる筋をたゝしみるとたとへは手先なるにおもひもかけぬ肩其  
外にこりていたむ所出來居る也その所といためたる近所をもむへしさて  
又うちたる所は熱集る故にひやすものを塗へし人々黄わたの粉をつける  
といふも熱をとる法也われは常に半夏と石膏との油くすりをつくり置て  
打たる所へつける也この薬指をいためたるに遣ひみるによくきく也指の

いたみは熱の集より起れば也

○廿二日 雨 此ほとならははや木うり下直也一本四文ツ、也江戸はい  
また高直なるへしみな京近所よりくるといふ也都初物の類江戸よりは  
みな早し南地の故なるへし○南地といふに大笑ひありこゝの醫をする勝  
南院といふ衆徒は格別之肥満にてあつかり也夫故なるよしなれ共四月は  
しめよりかたひらにカンシャの羽織也春風吹と裕也此節かたひらにて汗  
をふきながらはなす也寒中火にあたらすして手あつしおさと笑ふいしや  
の手は冬つめたきものなるに其ことなしと土屋大膳などの甚しきもの也  
此節老人はわた入下女などのわかきは單物といふ位のこと也江戸とから  
たにとりては相違なし勝南院一人に限れり此男ならにての上手醫也榮吉  
か病氣など一見して死するよしをいひ段々との成行を申したりはしめは  
疑たるにいふ通になりたり下手にはあらぬ也

○廿三日 くもり大に暑を催す單衣にてみな汗也藤堂家より先例に而竹

の子をくるゝ也眞竹にて大サ可驚三本の竹子貞助漸持といふにて可知烹  
てみるに味絶美也みなく家來共いも遣す父上の御好みの品なるにせめ  
て此一本にても入御覽度ものとおもひてなみたを流す也○けふ白洲に四  
十々三十九迄の女四人にて三十女には二才の子あり番非人召捕來るい  
つれも再犯もの也京大坂にて四人申合て吳服やにて盗したる也度々御仕  
置になりしもの也女上かたもの故に相應也女郎になりてもくらさるへき  
に盗をなし覺ゆればおもしろき事とみゆ

○廿四日 雨冷氣也 かくある故に人々あたるとみえたり○おさと、父  
上日々の將基也一枚落也氣根つよくさす也これにておさとの快なりたる  
しらるゝ也將基を見ながら對句をしてついに詩となれり

一局戰爭蠻觸風これは莊子にある蝸牛の角に堂々整々小元戎字也元戎の字は兵  
車の斜飛ニテクルシムツラナリセル敵聯攻謀フケイマの古事也驀突キツカカリテ驚王進闘功香車の八陣孔明六花李奇  
と也  
正術二龍飛飛車雙馬角獲獲奪奪雄雄ここるるすすのの類類也也金銀互奪清閑事天下惟看此戲中の

中にて金錢を奪合ことにて風流なることはこればかり也

この位のこと夜分燈心二筋にて眼少もこまらす母上御よろこひのためし  
るす

○廿五日 くもり 白洲多し○この頃は梅雨にて所々山崩等あり木津川も留りたる故にたよりも來らすたよりも出さへりしにけふ石河土佐守より印狀來る紀州御用途金之義如何之義も候は、可申聞と之事也右之趣に而は御勘定奉行の遠國奉行所は夫々御達に相成候事とみゆ左もあるへし熊野三山一同みな法外之事共也この御達しに而少々は懲可申御仁慮之至也○夜に入宅狀來る母上様殊に御機嫌克所々御佛參等被成候由恐悅之至に御座候其外之御無事目出度候○撫子のこと前の日記へも追々記し候通之事に御座候なてしこはふる根もよろしく候此ほとさかりに御座候居間の庭は麥畑のことくにまき有之候處みなさき候而さなからにしきのことし菊と違ひ少も手をいれ不申候得共よく咲申候大なるはなはくじらさし

三寸六七分位なるも相見候土地によく合候とみえ申候○新右衛門書狀之内豊藤轉役之由驚歎々々同人は小生見出し之人に付別而歎息いたし申候右に付新右衛門を案事候義可譬もの無之候先達而馬之義に付申進候趣等此ほと御心附きと奉存候要路に罷在候ものは貧乏より怖敷とは御尤之御事に御座候聖人も貧にして諂ふことなきはいたしやすく候得共富貴に相成驕候事無之候方いたしかたきものと仰られ候而氣之ゆるみ尤可恐かきりに御座候千里之海上をのり候ふねにて死したる人よりも富貴にて人の傷候義は夥事に御座候抑寺社方調役の筆頭に相成奉行にアキイヤカラレヌものは無之候可恐のかきりに御座候星野久須美などの節も實は奉行に而説も有之候事之由夫は奉行にて朝夕之取計よすき其上に權威有之候故高慢と奢侈と一同に相成候而攻來り候而落城いたし候も有之幸にまぬかれ候義も御座候小生なと筆頭ははつかに三年にて其上未曾有之中書公御勤故にコハキ事と存居候事故に幸にしてあまりあかれ不申候内に轉役い

たし申候新右衛門など日々夜々にこゝろの敵いろ／＼に姿をかへ候而落城させ可申と考候而幸に落城はいたし不申候ともアキイヤカラレ候道へ悪魔の引こみ候株に相成新右衛門之此節之圖を繪かき候は、たとへは平日くるしみ貧乏に而夜具にもこまり候と申候節追々出来候良心大將にて助には先祖之隱徳など附添少々よみたる書物など申さは大なる城に至而弱き武士のこもりたる躰に有之然るに豊藤の轉役に付所々の御用たのみより評定所は出候而も持あけられ候故敵は手をつくし法を替目にふれ身にあたるもの馬術弓術之内にまでかくれ來りて雲霞のことくに攻ること也これ故に人々落城する也この籠城を長くするものなし豪傑は早く落城せぬといふ迄也○唐太宗のとき四百余州に敵なき御人にもこれには落城されたれ共崩御前にまた取返し玉ひし也十七日の御神はかりは御一生御落城すかたなし御かくれの前に台徳院様へ天下はいかにおもふと御意ありけるにほともなく亂亡と御答ありければ殊之外御悦ありしと

いふ一事にても知らるゝ也○おうは殿といふ御年寄女中御成の御くはりの辨當こしらへをなし居るを本多佐渡守見られそれは若き女中へ被仰付候而可然と申たるを聞て本多に向ひ貴様近頃奢の氣出たると人のいふなれ共貴様程の人に決而あらぬことゝおもひ居たるにこの躰に而は無覺束と申右之佐渡守わか身上五万石以上になれば潰れると被申て一生涯五万石にて終られ上野介代に十八万石になりて直に潰れたる様子などおもへは其頃は上も下も例の心のおそろしき敵に攻落されぬ人のある世とみえたり何事も其人ならてはと申さるゝは世界の人其人を來り攻る也夏蔭は歌のかたき來り攻佐藤捨藏は學問のかたき來り攻今新右衛門の身をは寺社奉行所不殘來り攻難有うれしきといふことに半分ツ、敵身をやつして伏勢をくはり置也この圖をおもへは兄弟のわれ新右衛門を案事おもふこといかほとなるへしと御考あるへし戰場ならば百三十里にても乗出し加勢せねはならぬわけ也可恐々々乍去新右衛門よく恐るゝ故に落城に

遠かるへしオレハノといふうちに敵せめいる也昔呂東萊申されしにい  
ろノのこと譬は敵のことし禮は城郭也禮を失ふは敵に向ひてわか手つ  
から城郭を破るかことしと申されし也この敵禮より外にたのむべきもの  
なし禮の節目多端なれ共大意は曲禮のはしめにある教不可長欲不可從志  
不可滿樂不可極この四句にとまるかことしこの四句は小學敬身篇にも  
文公あけられたり禮記は漢儒の手になれるものとはいへ共聖人を去こと  
不遠古言のこり嘉言善行の標的たる書也大學中庸の禮記の中にあるを宋  
儒のとり出して四書とせしにてもおもふへし前の四句など必聖語なるへ  
し○新右衛門など先例通常年永々になり夫を三四年に布衣になり候は  
早く御納戸頭にててもよろし轉役あるへし久須美は西丸を御納戸頭にな  
られたり天授さへあれば其身より破りさへいたし不申候得は必天授丈は  
來る也井上備前守のとき天授はありしをみつから無理にひらかせたる  
故に實を不結してしほみたりこの類至多し此上は調役によき人を見貫

候も追々と揃られ新右衛門はあかれることをすれは一日もたまらぬとい  
ふころにてつとめられたらほこれそその身の第一なるへしむかしもこ  
ゝに心つかす氣の置かれぬものをあつめ置て一人して取計ひ御用辨の至  
あわるくなりし人あり其人は夫故に昇進も遅かりし也留帳にて御考ある  
へし○新右衛門の弓大に上達とみえたり○撫子のはなを母上の御覽なさ  
れし躰日記にみゆこゝにいたり涙數行くなり候も讀こと不能也右に付お  
さとへみせたるになきになきて更にことはなし○母上殊に御健とのこと  
恐悅也○わか揮毫上達せしよしの義に付段々を御論尤也○西洋書物之義  
例の諸國要典之内禁書目錄之末へ御記し置可被下候邪蘇といふに不及不  
二孝にてこと足へしわか懸り之不二孝は初之ものに付科書に奉行所  
は問合之上落着之つもり也

○廿六日 晴 大に暑を催すせみに似たる松虫とかいふもの庭にてかしましくなく也○けふは終日奏樂の聲近く聞ゆる也近邊の二條宰相といふ



一門の坊官の所のみやの御成とみえたり御門主は御保養のため御忍ひ歩行なさるゝ也坊官儒者醫者の宅までにかきる事之由也儒生は店かりの貧乏生也至るべきたなきせまき宅にゐられゝか用人の小屋のことし夫は御成とは勿躰なきこと也宮は近頃御かむ鬱の御症にて御勞症の御發病か或は甚敷は御發狂となければよしとて醫の御案し申上るよし也夫には御外出ならては御身の御養ひかたなしとて寶藏院の鍵など御覽なさるゝとて寶藏院などへ御成あると也宮さまならすはいか様にも御保養のあるへけれ共いたしかたなし容儀よろしき若衆などは御近習之内に一人もなししかるに御才發なる御方之御としては二十五と申此かた有もくはすにいらせらるゝ故に痼鬱の御症となるなるへし御氣之とくのこと也三十を御越しあらは少々は御よろしかるへし去々年か以前宮の御近習つとめたりし才子ありて御暇になりて直に奉行所にて召捕吟味之上にて謀判めきたることにて重追放に申付たりそのときは宮もよほと御恐れなされしといふ

こと也さてゝ御氣之とくのもの也其頃參殿の時など兵庫かことをいひ出して左衛門尉かこまる故に其ことは口外せぬ故に奏樂を聞に參れとの御事なりき參りて拜顔の時兵庫かことにて世話になると御意ありしに二條宰相御側を兼る御意也少も無御貧着御正法に御吟味ありたしといひき夫らは御門主御別段の御事に御座候と申たる故に夫はゝといひて外の御はなしになりし也法親王ならすはいか様にも可成事なりおしき御事也

○廿七日 雨 ならに淇園といふ書かきあり鹿をよくかく也このものゝかくところ世の書と大にこと也日々辨當をもちて鹿の圖をとり歩行しといふ也春夏秋冬によりことゝくにことなりはしめは疑ひしによくみるになるほとしかりこれのみは外の人より所の名物故上手なるへし以前鷹のとりをとる圖畫いかにも拙とて 文恭院様度々書工共を被召て御鷹野に被召連大に畫師共發明せしことあるといふ也虎といふものは存生のう

ちは鼠いろなるものに皮を剥て金いろになり象はシハのあまりに多くなきを日本人は虎を生たるも黄に書かき象にシハ多過るといふ也まことにや

○廿八日 雨 月並之禮受ること例の如し○榮吉母一昨夜阿州より歸りたり歸るとき當月十六日海上にて難風に逢いのちから／＼也と也夫々大坂に着いたしたるに兼而助藏のかたより人を出し置て榮吉は病氣也といひ遣したるに驚てうらなひをなしみたるに其人はもとの所とは住居を變て居らぬうらかた也といふ故に遊女にはまり欠落等のことかとおもひしと也夫々歸り來りても狂氣などの事を恐れてあらはにはいはず其翌日に段々といひ聞せしに驚迷て一日は只ねてのみ居たりしかあるべきにもあらねはけふは禮に來れりとして用人給人らか宅を歩行たるといふ也され共元來たしかなる女故におもひし程にもあらねと旅つかれにやけしからすやせたとといふ也當年三十七にてよき容儀のちやせむなるか目の當らぬ

躰となりしと民藏等のかたりし也榮吉か父も四月十六日に死して母の難船も榮吉か死も同日也といふ母は海上うち荷して阿州よりもち來れるものをもみな失ひしといふ也馬琴等かよみ本に似たることもあるもの也可憐

○廿九日 くもり又雨 けふは四郎か娘別當の悴へゆかたなとこしらへ遣したり四郎か娘は四歳也ちと才はしけ也いろ／＼のことゆひておかしき奴もおさとことに不便かりてさま／＼にする也父の病死したるもしらす京都へ御用にて行たるとおもひ居也夫等の躰にて江戸の孫共をおもひていつもなく也別當の兒は二歳の男子にてこれも齋のたか也おもしろき兒もおさと不便かる也四郎か兒は實にわれより外たよるものなきことなればいかにとかなしやらすはなるまじき也

○五月朔日 晴 御目付の旅宿へ訴狀箱立合として參る○このほと尾張

殿去月七日頃御大病也或は紀伊殿并御同所一位殿ともよほどの御病氣也といふ也まことにや大かたはいつはりなるへしまことなれば尾州は水戸の御子さまかたか或は庶流にて御世つきかいつれ御六ヶ敷ことなるへし紀州は必いつはりなるへし万々一のことあらはいかにかあるらむ恐入のかきり也何卒虚説にいたし度こと也

○二日 くもり 御目付出立也○去月十三日異國船うら賀へ來り亂妨せしなど風聞す例の山中のことなれはいつはりなるへけれとおもへともあさ野中書のいかゝやと頻におもふ也○けふ儒者に酒給させたるにかの墨一挺くれたり万曆中の銘ありいかゝあるへき古梅園は後のものなるへしといひよし二挺あれば一ツは奉るとの事也けしからぬ大墨也大かた田舎大人のかたにて何もしらすなら墨と同じことにおもひてくれたるなるへし善惡はしらすいつれ宮之躰五六十年前のものにはまきれなしかし遣ふは不益也人にやるものなるへし

○三日 雨 かしはもち也榮吉かことおもひ出てさふらひ共に遣すことくにしてかれか母へ遣したりよくおもへは却而涙をそふるなるへしされ共いかにあはれにおもへは遣したる也○大坂御城内百日目付之御小屋の次之間は夜雨戸を建ることならず建れば妖怪いつるといひつとふと也御目付はなしに大松ありて時により深夜にとまりからす俄にさわき立ことありと也不審なること也

○四日 晴 穢多へ申付置たりし革くら出來たりこのたひはきしもの、所など横革にならす勿論釘の氣なく至るよく出來たり穴のあけかたなどもよしこのたひは織田所持のくら柳澤家所藏のくらを正うつしにいたしたれば穴其外共に十分に出來たり何分にも已前のくらは引變にせねはならず至る上出來也われ家來を以申遣したり我をふみ臺にしてかゝるくらすつくり出せり然る上はわか分は不殘引かへてくれよといひしに穢多も承知也甲冑皆出來也其直段を聞にもとよりわか教によりて職を覺たれば

いつれにてもよろしといふ故に大にこまる也牛の皮のうちにて最上の所は尻革也襟革は厚けれ共力なしよつて尻革の精品なる所をみな集めて甲冑をつくりたれば牛革三十枚かゝりしといふ也並々なれば牛革三枚にて出来るといふ也

○五日 晴 昨日並たよりとく筆など来る眞書ふて三十二文也といふ至而よろし然るにこのたよりにて聞は京大坂よりの仕込もの也といふ也かゝるものもとにて買は遙に江戸におとる也 公儀の御威光江戸をはなれてしるへし○けふは例之通與力の禮を受て夕かたより御双親様は御酒奉るわれものめり夫より書などを書たり遠國はかゝるときさひしき也江戸と違ひ顔あたらしからされは也この顔のふるきといふこと遠國を勤めねはくるしさわからぬ也

佳辰俄新霽暑到覺炎暉既識宣葛布猶恒着絮衣存霖池水漲映日蘇苔晞  
嬾竹東風靡如何也雨幾

これ今日のけしき也

○六日 くもり雨 わた入にてよろしおさとけろくも也七十日め位也この時候にては人あたる筈也乍去外に病人なし

○七日 くもり よほと暑となりたり○けふは御役所を仕來にて太かくら来る半日はかり舞ふ也いとくかしまし出入のものなど来る例のいしや娘をつれて来る夫へ酒などを出す也市三郎去年まではみしかことしはいやかりて寶藏院へ鍵に行たり夫たけ市三郎のよろしくなりし所なるへし○おさとのけろくもはつかに半日にてこゝろよしめつらしきこと也○前の墨をかゝやに見てもらひしに方程氏といふは明の古梅園のことき墨やされ共この墨偽物なるへしといふ也去々年井上にて古墨を多く見たるに墨色大にこと也といふ也其上に上かたは勿論江戸までも近衛殿の御このみにて古墨を去年尋しになかりし也其頃は三十兩もすへしといひしかなかりしに今あれはかたくもにせもの也眞物ならば三十兩以上のもの

崇か妾の縁  
珠と□の  
高臺より飛  
きて節□全  
したるとい  
ふ詩な  
勢□然花  
勢□然花  
全□能死  
烈士思  
界何時□美  
人。百年威  
作北□莖。  
誰知殘折是  
花。香賞□  
春。

也といふ也からにていにしへ偽物を作りて日本へわたせしなるへしといふ也

○八日 くもり 大に暑を催す○きのふ例の醫何かな父上の御機嫌をとらむといろくといひしあまりに御隠居さまは御頭大キク其上に百會の邊よほと御低き也これ至而の貴相にてよく親につかふるものにある相にて必御わかゝりし時に親孝行にておはしましゝなるへしなといひしに父上は御幼年のときより父母にはなれ給ひていふこと一向不當よつて大に御機嫌を損して六ヶ敷なりし也いしやいらぬ事をいひ出してこまりし躰也いしや御酒を被下候而大に酔たりとて歸りたり其跡にて御機嫌直しに御踏舞などよかるへしとておさといろくすゝめ奉りて漸に例の通の御機嫌にて相濟し也かゝる所に居れば江戸とは大にこと也こゝろすへし父上も御いきとほりはかりにて何事も仰られたるにもあらず只御けしき損たるはかり也いしやいらぬこと也父上の御つむりのへこみたる或は大き

しなと御はむきすぎていらぬことをいひし也○うら賀へ異國船渡來之風聞追々ありて手紙のうつしなとみるまことにや海のなき國は仕合也孫吳といふは本因坊か弟子の下手碁打のことなるへしといふ位にてもすむ也難有事也しかし武士はかゝる所に居ては御爲はならぬ也

○九日 雨 團扇之呈書出すけふ書經の周官をよみてさてもく敬伏したり其内を記す恭儉惟德恭とはかたちのうやつくすことなるへし和言に禮をうやと訓す其ことなるへしうやくしとはさも禮儀を守ることとくにみゆること也儉は節儉なといひてもものにふしのあるごとく其度を過ぎぬことなるへし酒色より御役威等にわたることなるへし作徳心逸日休作僞心勞日拙これは徳は得也こゝろに得てこれはよしとおもふこと也こゝろにうしろくらきことなければ十分のこと出来る也休の字よしとよむ即やすむといふこと也こゝろせはしなからす寐さめよく平氣なることなるへし則安泰の意なるへし作僞はそのうらはら也居寵思危これは新

右衛門かこの頃の書状をみてわか安心せしといふもこれ也寵愛せらるゝ  
 ときに深き淵うすき氷をふむこゝろなるへし其次に岡不<sup>オモハ</sup>惟<sup>レ</sup>畏<sup>ハ</sup>弗<sup>レ</sup>畏<sup>ル</sup>入<sup>ル</sup>畏<sup>ル</sup>畏<sup>ル</sup>  
 をおもはさるなしとは事々物々に敬を存する也敬は畏の字これに近しと  
 朱文公の晩年定論也それをなさされは畏るゝことにいたる也いはゆる君  
 子終身のうれひありて一朝のうれひなしとはこれ也居寵思危此節新右衛  
 門三復の語なるへし元來書經といふもの粗日本書紀に似てあやしむべき  
 こと多けれ共其書を捨て外に書なし故に書經のうち周書のうち讀かぬ  
 るものにはおもしろきこと別多き也古の大禹を稽ふるにとあればいつ  
 れ夏の世に出來たるものなるへし故に左傳に多書經を引て夏書に云々と  
 あり<sup>以上</sup>の<sup>説</sup>が<sup>徠</sup>翁<sup>翁</sup>されはふるきものゝ上なし也薛文正なとふるきもの也とい  
 はれし也乍去すらくとよめる所には偽書ましりしなるへし日のもとの  
 日本書紀古事記又同じ其内古事記よしされ共 朝廷にて御書改になりし  
 ものなれば日本書紀と區なるは古事記はとらすこのことに付本居宣長ら

三謨のうち  
 阜陶謨にみ  
 ち多し

かことみなひかこと也さて又

八雲たついつも八重垣つまこめに八垣かきつくる其八重かきを  
 といふツサノヲの命の御歌をはしめとしてみな後人のつくれるものなる  
 へし日本書紀のうた古事記のうた實ならば万葉にもあけあるへきはつ也  
 其上に万葉のはしめのうたの口に溢々したるをおもへは古事記のうた万  
 葉よりもよみにくきはつなるにさもなきをもてるへし其上謀を以宇  
 治川へ陥りうせ給ひし御人の長うた或は同じ類のうたもあり殊にうたか  
 ふへきもの也詩經は周よりのものに而字といふもの出來て遙にのちのも  
 の也万葉は 應神天皇の御世に書物わたり夫を二百年か末よりのうたあ  
 りしと覺へし也されは詩經とくらへみても其割合にかけて古く尊きをし  
 るへし日のもとに万葉ほとものはなし其外のは佛書ににせて作れ  
 るものかと疑はるゝものある也

○十日 くもり 前のことく記し置たるところ壬四月廿六日附之書狀相

届く先以母上様御機嫌よくとの御事恐悦之至其外之御無事目出度候書狀  
 之内いろく慎方之義御申越候前記し候趣と符合いたし候亦いか計  
 歟目出度候○元魏の人かと覺申候韓麒麟とか申候人の詞に衰來りて即奢  
 と申候こと有之候千古之格言と覺候まづく新右衛門も恐るゝこゝろあ  
 るうちは少々安心也され共しるし候迄には參り兼候ものに付得と御いま  
 しめ可被成候○日記之内無宿ものゝ利害おもしろし○十六日家來申渡  
 し其外みつからいましむるのケ條最よし○銃炮はらを切し無宿可惜よき  
 人になるものなるへし○なてしこのはなならははまたかなりにみらるゝ  
 也江戸は早くひらきしなるへし不審也うつろひても又折々さきて十月下  
 旬までさく也○万葉に住吉のうらの蜆を例の四時見と六ヶ敷かなにて書  
 たるを定家卿なてしことよまれたる千古のわらひあり契沖よく辨したり  
 畢竟なてしこは四季にさくもの故かゝるわらひも出來たる也これにてな  
 てしこのさかり久しきをおもふへし母上より之御書狀難有夫々かしこま

り候このほとは御書牒もよろしく候而恐悦之至に御座候新右衛門の日の  
 出に結構なるにても兄弟うちより居候は母上の御爲いかと思召候而  
 あまり十分之義なきやうに御題目御唱へ御座候様奉存候天意あれば不招  
 し來り申候天意あるを人作を加へたるは花を無理にひらかせ粟を落して  
 食ふと同じ大に損をする也

○十一日 晴 ならの町人西國に參り歸りたるものゝはなし之由薩州に  
 異國船渡來に付打拂候積にて大に手當有之右に付海上之漁船廻船等まで  
 通路さしとめ候而既に戦争之一段に相成候處異船にて其機を察し候而速  
 に逃參り候由さてくよきみなるはなし也實事なるやいかに其詳なる  
 ことはしらす風聞なから見て來りたることくにいふとなりまことにや元  
 來近頃は乍浦廣東厦門等に出はり出來日本へはつか一帯海の隔となりた  
 れはますく來るとみえたり 御威光なくは追々來るへし兵に名を先に  
 して實を後にすることあり薩州之取計いさゝか其意あり

○十二日 晴 此ほと無宿にかたりに逢たるといふ訴ありよつて番人に申付置たるに召捕來れり無宿の申候にはかたられし人のはは五十余之後家にて續きは從弟也密通之上夫をいつはりて衣類をかりたる也といふ也よつて段々吟味之上右之婆々も呼出たるに一向に申争のみにて外に某の男と密通いたし居よしなといふ也その男は立派なる百姓にて一向に覺なしといふあまりの申争に付扱人立入いろく聞たるにはか方にたしかなる證據ありといふ夫はいかにといふに婆々申候にはわれかの男のへノコをよく知れり上へソリて皮むくれイホのこときもの三ツありといふよつて扱人立合之上にて改たりしに越前家にてイホもなしと也其書物を順作わらひなからもち出て與力の吟味のなりかたきよしをいふ故にわれ直白洲をなしたり庭より廻りかけ聞夥しく與力同心等も白洲之次之間へ出たり白洲の出候てみれば二段目以上之相撲のときはは也兼而之風聞糾に尼寺をかり無宿と出會をせしよしなと分明也夫をきけは錢のかしか

りにて度々尼寺に行て無宿と逢しなといふ也其はは無宿に向ひ大聲にて江戸ならば卷舌にてたみかけてといふ聲なれと一向に鳥の囀するかことくにて不分腰の廻り十圍といふ姿にてしまだのことくにみゆる大茶せむ也あまりのおかしさに利害におよひ候處差添人の村役人慈悲を願ふ故に下け遣したりよほと奇談也上へソリイホありなといふこと立派に書面にみゆ尤珍事也其はは白洲にて袖を顔へ當さめくと泣たり其とき笑はぬものなしおさとはならへ來り庭のつきより一度白洲をのそきみたり其後一度ものそかす女のみへきものにあらすとて也のそくところは馬場の脇にある掃除口也いにしへよりあけし穴夥し

○十三日 雨 けふきのふのはを村役人と忤と召連て來れり無宿とかしかりは無相違密通のことは御慈悲を願ふと也與力へ申立るところにては宿やへ忤并よめの里より來りていろくにはを異見したるに無宿と密通はなしといふよしされ共村役人も忤も風聞はたしかに聞たりとて異



見するよし也實は無宿もはゝにあきて例のイホの三ツあるといふ男也といつはりて余人をくらやみにて出逢をさせて其男よりのたのみ也とて衣類をかりたるにて實はかたりの類ときこゆる也大笑也

○十四日 くもり又雨 おさとけるくも也このほと時候あしきによるなるへし○所々に病人多ときけとおさとの持病のみ外に病人なし○けふ儒者のかたの課題をつくり遣したり蚊といふ題にてわか至るきらいのものなれば小人にたとへて暫寄濁流作汝身オナチこれは蚊のトブよりわくことをいふ也君子を清流といひ小人を濁流といふ也逢時羽化一朝伸これは蚊のホウフラをなりしをいふ小人の俄立身かくの如し類簷雷鼓來ノリこれは蚊を蚊雷といふ故にやかましく人を攻ることをいへり小室雲烟拒防臻ツしかやにて蚊遣火をしてふせく躰也縦欲變緋仿塑重仿は似たるといふこと塑は木像などの類也欲をほしひまゝにしてあかくなりて動かれぬ事也緋の裝束をする様になると木像のことくにて居る小人から人などにはある

也貪婪待暗毒人類貪婪は物をとること也ものをとる上にくらやみにて人を害すること蚊と小人よく似たり竹窓タケマド僅學我皇睡驚覺伸吟ノボ抓滿身これは竹のあるまゝにてこゝろよくひる寐を少ししたるうちに所々蚊にくはれたるものかうなりてくるしかりなからから中をかく也少も油斷すると君子へ害を加ふることかくの如し

○十五日 晴 月並之禮受ること例の如し○此ほと例之通潔齋也何も不食故におさときのとくかりて茄子の香のものをわれにのみ附たりわれいふいま小茄子十に付廿文也なら酒一合之代也われ茄子十よりも奢をする也貢幣一枚之醉墨は四分につく故になす二十之代也され共いまた初ものうちなる茄子をものいみ中われのみくひてはすまぬ也禮記にも禮はもとを忘れすといふならずやあまり高運故に慎に食して初もの香の物をくひては一向につまらずとて大に笑ひて兩御隠居様の御酒のときさし上たりかゝることよの中に多し禮は本を不忘とはよきこと也

○十六日 晴 死罪三人火罪壹人あり火罪は坊主也奇瑞をあらはし可申と度々附火いたし終に本堂等を焼失させたるもの也其もの死にのそみうた二首詩一首をつくりたりうたも歌もおさくたかへることもなし只不出來といふ迄也かゝることも出來なから火あふりとはなさけなしいたしかたなきこと也○きのふ助藏方の家來參り宅を躰其外を躰に目をおとろかし歸りたりされ共入口ははつか三尺也これみなならの家づくり也

○十七日 くもり あさは人く裕也○けふは人に被頼て書うちに武篇と云は云々のことをかく也これは今日の 御神の御詞故に七日の潔齋麻上下にてかく也其序に豪家のものかゝや助藏也かれは額字申出たり夫は可相成はかなにて身の守になることいふ故にうたか悪詩ならはなかなかによけれとかな書といふ故にいろく考て「驕らす人をめくむこれ家繁昌をみなもと也」と認遣したりなるほとつまらぬ詩歌よりは却るかゝることのかた考六ヶ敷きは犬ねこのこときものをかくと人のしらぬ化物を

かくとのたかひにて心の眞面目故に却る六ヶ敷也○今夜四時尾張殿中納言殿御逝去を御奉書來る

○十八日 くもり 大坂へたよりある故に大坂にて唐帡半切位へかく筆のよきを一本買來れといひやりたるに一本拾壹匁にて中字書を買來れりその筆に菊園公云々を銘あり商家にていふ水野越前殿高島四郎大夫に被仰付唐人の御詔也といふこの筆よりよき筆大坂にあらは價はとらぬといひしと也菊園は越前守殿は菊圃とか申されしと覺たり其上に園公清賞とあるからはまことかもしるへからすよき筆也

○十九日 くもり 過日助藏方を墨を義を詩に作り賀し遣したる詩を懸物にいたし唐人の助藏か方を筆を稱したると二幅懸物にいたし日々燈明をあけ候る人にも爲見候由也大笑也しかし大にかゝることにては恐入ることある也○この頃反古の内々七年はかり前に夏かけか水府へ講釋に出候義を賀したる書の書損出たりいかなることならむとおもふはかり惡筆

也これによりておもへはこれを七年立たらば今一段此節を書惡筆となることなるへし人間は藝をするものは長く健にして稽古すれば末たのもしき事也一年々々に以前之義見られぬといふそよき○此ほと朝夕みな裕也晝後やうく單物也夕かたは羽織也

○廿日 はれ 市三郎通俗三國志をよみて孔明五丈原へ出たるよしを司馬仲達を聞てはなはた悦ひかくなれば孔明の壽長きことなしといひしと也仲達を考奇也さて夫を孔明のしらぬ不審也といふ也われいふ其ごと本史にもありしと覺たり古人説かと覺しは孔明に五條原へ出られては仲達を爲ならねとも乍去何分にも防とむることのならぬ故に仲達か奸智にてかく云し也しかるにたましく孔明卒たれば仲達の先見のことくになり其上に仲達か孫は晋の武帝なればことく敷いひ傳へしを陳壽か曲筆にてかきのこせしなるへしと答へし也かゝることよの中に多き也陳壽は孔明はいくさは下手也とまていひし也仲達は軍の上手也孔明は名人也仲達

なればこそ孔明をくひとめたれ今一段下の人なれば孔明を食ひとむることとはならぬ也

○廿一日 くもり冷氣也 昨夜中表にて人のあし音屢也これは用へやを奥へかよふみちに劔術を遣ふやうに板のまあり夫を通ふ音也御用向なれば起さるゝに其事なければ下に急病人出來しなるへしとおもひ拂曉みつから出て尋たるに水くみの中間少々不快に而四日ほとくすりをのみきふ下駄をはきて遊び居私の不快もしや御奉公はつとまらず明日は下宿する也なと角まにはなしたるよし右之中間九ツ時分よりくるしみて明かたには死したりこれも榮吉同様脚氣昇進也かく急に死するものあるに一同大に恐るゝ也ならの風土脚氣には至而あしき土地とみゆる也牢内に傷寒はし十人に九人までは脚氣也可恐われなと脚氣の症あれば下劑は一日もやすまれぬ也夫故か脚氣とおもふこともなき也この中間もよく遊ひたるやつ榮吉も才子なからなまけもの也遊ひて長いきするならば銘々百年は

受合の人間也よく遊ひたる人の死したるは人いはず出精人の死したるはあれは學問なりあれは勤向故也などいふ也大に笑ふへきこと也これ出精する人の少より起ること也

○廿二日 くもり 冷氣甚しみな裕也○脚氣大に流行すると云誠一少々氣味合あり其外病人なし○ならに玄碩といふ醫あり元來はならの醫の悴にて遣ひ果して終にころひ乞人となりて大坂の橋の上にて居たりしに長崎の旅人急病に而倒たるを世話をして八百屋にて生姜をもらひ其汁をのませ彼是して回生したり其人よろこひて長崎へつれ行て醫者をさせ夫を取附て今はならへ來り一二を争ふ醫となれるとなむ人はみな行末のしねぬもの也

○廿三日 くもり又晴少々暑也 豊後より寶藏院に他流仕合來るよく出來るよし也市三郎なども出たりもとより遣ひもらふこと也しかしこのほとは夫かれにて稽古日々あり其來る人は二万石はかりの勝手をもつ士に

而師範役也といふ六十余也といふ也劔術は直心かけに而酒井先生など、仕合をもしたりと也子供二人は一昨年藤川に出て免許になりといふと也金談の事に而ならへ來り逗留中槍を遣ふとはこれもわかるいのいらぬことをする男とみゆ

○廿四日 くもり 道中十日限之宅狀來る十一日附也九日出にて十九日には着之積にて待居なれ共遠國狀は宅狀に限り而は來らぬかたに苦勞なしとておさとゝも笑ひし也○先以母上様御機嫌克殊に所々御佛參御眼力もよろしく御根氣別段なりとの御事さて、恐悦之至也この所我と新右衛門幸三郎別而難有おもひ候而養生せねはならぬ所也兄弟の養生こゝにありこゝろすへし幸三郎へよく此こと御申聞あるへし新家も留役に相成候由扱々目出度候これも新右衛門之御骨折也其外一同之無事目出度候○おしけの縁談整不申候由却而よろしく候小人之遠大のこゝろなきいたしかたなく候○小人といひ大人といふ名あれ共智も勇も才も小人大人共

に同じしこと也。只大なること正しきことに用ゆると小なること私に用ゆるとの差別也。人の才力に少もかはりなし。○其外之人々みなく無事との事目出度候。太郎之手習はしめ有之候。由目出度候。過日放魚といふ題の詩に

移居曾放小鯉。鱒々既數寸鯉尺余。日看遊泳有餘裕。飛梭はたなを飛梭はたなを裘葛カサ頻改装。  
四年長於百年。長兒孫如魚復長大。欲忘不忘屢斷腸。

此詩長篇なれば孫の所のみ記す。儒者これをみてかゝることからたの毒也。詩にも御無用といひし也。○異國船之事驚入たる事。江川之取計大出來也。國躰を不失いつはりを不言絶妙也。布衣の御代官江川太郎左衛門にては不分明也。十五万人の支配とは至極の大出來也。異國人に對するものこのこゝろなくてはわけもなき事にはつかしめらるゝ也。昔高田屋嘉兵衛は魯西亞人に被擒候節。船主にて五里四方之地所を支配するもの也といひしかは彼かたにてよく取扱ひし也。間宮林藏咄に彼國にてくれたる砂糖に少々塵あ

りたればかゝるものは食はれずといひて捨日々水主共に三拜ぐわいをさせしといふ也。被召捕て居なからひる寐致し居たる間へカムサスカの人無斷來りしを一問なり共城郭も同前也。無斷踏込し上はゆるさすとて嚴敷打擲せし故にかの國の人大に恐れてうやまひしと也。船長日記に異國の人戯にわれは嘉兵衛のマ子をせむといへは嘉兵衛は歸るさまの憎ければ植本金五郎にわれならむとて日本と魯西亞對話の躰かく也。なといひしことみえたれば林藏の話いつはりはあらしとおもふ也。○異國船のこと防禦の術いくらもあるへしされ共みな空談に而とるにたらずよつて其眼目の意をしるす尤これは日本のことにはあらず。唐土歴代の説おもひ合せて書く也。この意孫子國字解などにもみゆる也。今外寇に出逢ふときにかやうくくにせよといふこと第一わるし其人を撰ひて仕損したらは其時に嚴敷する積にてはしめによく人を撰ひて其人のいふ通り十に四ツはわるしとおもふ事は不  
及申十に六ツまであしからむとおもふ事は其人のいふに隨ひて他所のも

のいふをきかぬ事に却あまかせ切にすること第一也夫は宰相の人に  
て人に相談せず必とおもふ事は斷然として其人を擧て遣ふこと也明に張  
居正といふ宰相あり少々水野越州に似たることある大造なる豪傑也夫は  
中々越前守殿の類にはあらぬ也この人衆人のうちより李正梁朝鮮に來りし  
李如松等の父  
也を撰ひて韃靼を防かせ又衆人のうちより戚繼光を撰ひて倭寇をみな殺  
にしたりこのときの書即  
今の紀効新書也其時に正梁も繼光も繼光即戚  
南塘也隨分と人のわるくい  
ひて少々は軍の入用なと盜たること相違なしされ共其かはりに居正宰相  
中に外寇のこと安泰也き居正没して居正の評判あしくなるに隨ひて李戚  
の兩將もこと不被行して外寇又そうく敷なりたり外寇を防くは大將の  
業也其わざは人の評議をうけてなす様になりては一ツも出來ぬ事也しか  
るに衆評のこゝろをすする様になりて明の名將みな打死したること熊廷弼其  
外の人の出來る人ほと難義したるにて知るへし夫を衆評にて働かむとお  
もふことき人は外寇をふせくことはならぬ也名將には私なくてはならぬ

也其私といふものは聖人のみちの權といふものにて私にはあらねとも至  
極私に似たるもの也夫はいかにとなれはいろくにして人を遣ふには不  
時の褒美其外に衆人にせず壹人にすることなど多くある也其外不時之取  
計に錢を費すこと多し命を捨るものなれば平日御法度の背たる位は常の  
法は曲りたるもゆるす也夫を治世の人はわきよりいろくといふ故に百  
人もよりて一本の筆をもち大造に六ヶ敷細字をかくかことし朝鮮の返翰  
を川上かかくとうらはら也これふせくことのならぬわけ也漢の文帝外寇  
にくるしまれ何卒李牧ことき名將を得て外寇のうれひなき様に被成度と  
御意ありしとき陛下は李牧かことき名將を御遣ひなさるゝことはならず  
といひし故其子細を御尋ありしに其以前外寇を防きて功ある大將首の數  
に偽を申たるとて御咎なされし也かゝる小事にて人をとかめては人は遣  
はれすと申上たると也夫と同じこと也外寇を防は軍令也治世のうちたり  
とも軍令となりては別段にして更に外事にせねはならず夫は酒宴の坐敷

と火事場ほととの相違にせねはならぬ也これ外寇をふせくの本根也其本根立ときは其人よりいろ／＼のこと整てくみ出しくる也夫をわきのいれ智恵を用ゆると大なる相違を生ずる也さて又其入用の出かたといふものは小吏のしるべきことにあらず宰相の任也宰相より改て出さざる時は必入用かたのものに相談する也入用かたのものに大躰を論ずるもの少ければ少も減の立ことをする也減の立こと必害ありて以て外也軍役の入費これほといふことを積らせて吝なることをゆふを破りて宰相の目かねて取計てやること也論語にも出納のやふさかなるこれを有司と云とていなくそしりたれば孔子の頃より御入用かたのものはひとく吝なることをするとみえたりしかるに其説用られては軍令はすこしもたぬ也これ了簡を出す人うらはらなれば也宋の世に种世衡といふ人あり青礪城といふを戎地へ築たる事ありこれ大功也しかるに其城水なし井戸を穿し時數十丈の底にいたりて大なる岩へ掘當たり井戸掘涙をこほしてとても水はな

しといひし時もつこう一ツの石を錢と引替にして水を得たりかゝるときに入用積りは出来ぬ也果して後日に其入用其外に世衡の無理露顯したるとき御詮議になる所を龐藉といふ宰相器量人にてゆるし遣したることあり其こと漢の高祖の二十四万斤の黄金を陳平に遣はせて其費をとほさりしにて知るへし陳平欲深き人なれば何程も盗みしなるへしこの所にこゝろなければ大成害を生ずる也○諸入用之ことはいつれ官府より出すこと也夫を國役のことと割懸ることあり乍去存外のことある也夫は封縣の政度は諸侯を遣ひ郡縣は國役となる也明はこの割懸に民大にいたみて亡ひの基をなしたる也實に千兩かゝり夫へ官府よりたして御用をするによけれ共そこか算盤をもつものは損をせぬ了簡になる故に名と實とたかふことありて後弊意外のこと生ずる也聖人の世封縣の時は今の日本今のこととく大名を遣はれたるもの也これ古法也其こと欽定四經詩經江漢八章に殷氏昌武の説をあげたれば諸侯を遣ふことゝみゆ其次第に寄日本の鍋

嶋有馬等のことく御用をも減次第に寄るは御手當をも下さるゝなるへし  
○當今のことは不思議なるは以前は薪水の不足あるへきこと尤也今は日  
本の近所乍浦厦門廣東等みな夷の出はりあり今の紅夷のシヤカタラの如  
ししかるに薪水を乞ふとて來るのみならず測量などをするといふは不屈  
也これは紅夷などゝ段々穩和に相談をなしたらは文政の令條に復する仕  
かたあるへしこれにて國の弊大かたならぬ事也柔を以制する可也され共  
剛にして恐るゝ所なき時ははてゝは頭にのほることあるましきにもあ  
らすこの所の味なくてはならぬ也いつれに長くはかるにしかぬ也○戎を  
制する撃と和の二ツ也撃は人にあらされは不能和はやすしされ共とき  
とりて和によきことあり乍去和は士君子のいやかること也夫はみな宋朝  
と契丹元金などの躰をみて夫か腹にあれば也宋朝は一旦徽宗皇帝欽宗皇  
帝の擒となりし上は戎は國家の大なる敵也例にならすされ共夫をとかく  
に引用ひ其上に弱くみゆることなれば後世の書生風の人にいはるゝをお

もひて人口外せぬ也この論わか名臣言行録余論のうちに記し置たり御一  
覽あるへし畢竟は助言と岡目八目のことにこゝろを動しては決ることな  
らす其任にあたるもの其役にいのちをかけて踏込引受てするにとゝまる  
也○新右衛門慎の氣書狀中にみゆ其内はよろし○豊藤と交り方よろし我  
よりも綸子の時服を遣しこまゝと文通したり

○廿五日 くもり又雨 牛革甲冑製作之事追々研究するに付其あらまし  
を記す○牛は大牛の十一月十二月の革を用ゆへし牛の革の毛をとるとき  
にみな水へ漬ること暫してふやけたる所にてとる也これはよろしからず  
水へ漬すして毛をとるへし少々ひまかゝる也さて牛皮の内精品の所は尻  
にありエリ革は厚けれ共力大に薄し尻革之内にてよき所の鼈甲のことく  
なる所をうらをすきて三枚合にする也合するには鹿ニへの宜を用ゆ並の  
ニへよろしからすきて又合する前に石の上へ置て大なる鏡槌にて多た  
ゝきて薄くする也ためしみるに多たゝきたる革の鏝はきれすよつて多



くたゝきて薄くするをよしとすさて小さねにても何にても威に用ゆる革もまた牛革よろし並々は鹿を用ゆる也至而弱して不宜也牛革をすきて巾をひろくたちて釘貫にて力をきはめて引通位にする也さすれば扎の穴少もすかぬ也並々の甲冑といふものは手間をいとふ故に鹿皮の至而わるき所を巾に至而せまくたちて右にておとす也これ至而よろしからぬ事也右之通にすればまづよし並々の甲冑は牛皮三枚あれば出来あかる也江戸の革小さねといふものはふる道具やにて革のつゝらの古きを買て夫をきりてつくる也われよく明珍らかはなしにて聞し也治世二百年武士甲冑のこどをしらすよきところにて書物を當にいたしとくとしらへもせず甲冑師に申付ると甲冑師不實に不實をきはめうそに／＼をかさねて錢をとること也われ屢甲冑をつくり其偽にあひて大に損をせし故にこゝに記すこの度の甲冑をつくりたるに穢多之方にて控をつくりたり夫は十五兩にてうるへしといふわれか甲冑は段々と吟味して前のことくになしたるに革夥

敷いりて五拾兩はかりかゝりし也され共夫は穢多の方にも不行届等ありて漸三十兩にて出来て驚歎せりわか甲冑などをなみ／＼のものと同じ様にされては可歎のかきり也みる人のあらむためにこさね一ツ塗らぬを甲冑にそへ置也素人の函人にいつはりをされぬ様には牛の銀革はかりにてうまく鍛へさすれば先よし銀かはとは革の上かはにて透通る至而丈夫なる所也乍去直段は高し

○廿六日 大雨 きのふも夕かたより大雨なりき寒暖計は七十七度位よりのほりしことなしけふは時候のあしきとてにうめんの至而あつきを給夫にてはしめて汗はむといふ位也この躰にて十日もあらは米は至而六ヶ敷かるへし乍去昨年もこの躰にて土用よりあつくなりたれはいまたしれぬ也

○廿七日 雨 米價九拾五匁に引上たり○昨夜亥過るころよりはらいたみ出して段々と甚敷九過には手足結冷して困いふへからすかるき臙亂か

とおもへとも臍傍の壞物より胸へかけ引はりて堪へからず甘草汁又は熊膽をのみて漸に凌つもりなれ共効なしおさとも鍼法なとしたれ共きかす此ほと四郎榮吉水くみなとのことよりみな急病をおそるゝなれは當番の用人を呼出して醫を迎へたり用人共一同に出御隠宅にても御世話下女共驚歎してさわく其内に醫來りてこれは輕き雁亂にて此ほと不時候故にならに甚敷多しとてくすりをくれかれこれするうちに痛懈りて醫并用人共も夜あけて引取たり朝になりてみれば本復して常のことく目など少々くほみたるはかり也おもふに甘草と熊膽効をあらはしたることし吐瀉屢也きよつて病之根本をたゝしみるにきのふ再ひもちを作りあづきをつけて食せりこれわか好める所なれば十くひたり夫にあたりたるなるへし今朝もいまた玉子くさきオクヒ出る也用人共へ申譯なしいつも七ツ八ツ位は食ふ也しかるに十に成たると時候のあしきとにて病を生したる也よつておもへははつかにあつきもち差引二ツの差ひにて終夜呻吟して一ツは親

へ不孝となり一ツは敬身を忘れたり残念至極也今日以後は何にても慎て過食すましと定たりもち酒にしかす酒色にしかす酒色などのこと別々慎へき事也當月も四五度の外酒なし房事二度也こゝにいたりておもふは老妻の饅頭かみなり干のことくなれ共角と雷鼓をうつ勢ひは昔より甚しこれ老人の第一のつゝしみと成て閨門の肅然たるわけ也かゝもとしわかきは有害也頭の角なきも有害也酒色なかゝもちの類にあらねはいとゝつゝしむへしいにしへの人飲食男女をもて切要とせしといふ小學の教をつゝしみて守りていましめとしてしるす昨夜と違ひけふはこの日記をもしるす故に本復の義御安心可被下候以後ますゝ整々嚴肅たらむとけふことにいましめたり人は微をつゝしまねはならぬこと也あつきもち二ツのことにて大に人をさわかせたり可畏可戒○昨日市三郎介抱よくしたりこの男按摩などをなし兩便所へつれ行手まで洗はせたりとしをともし故なるへし

○廿八日 くもり けふは甲子と廿八日と落合たるに天氣合かくの如し  
米相場あかるへし○きのふは一日保養をしたり時候のあしきによるとはい  
へ共食物過て疾となりしとおもへはかへすくも残念にて恐入る也伯牛  
の病に孔夫子命なるかなと仰られ顔回のことをも短命と仰られたりこれ  
天のするところにて一毫の人欲に溺たる所なき也不時候にて病は天命也  
いさゝかにても食物等より起るは人事也○昨日佐久間修理方書狀來る  
夫をもち來りし人のはなしにて聞に修理信州にて海運の理をいひ甘草を  
大に製して來りし人も其事に而大坂へ來りしよし八百兩はかりの國益を  
得といふ也學問の師は斷を主人に申立てなすす銃炮の師になりて西洋の  
火銃を武士に教水脈地理のことを開きて金山を見出し温泉を開きしよし  
など聞ゆる也甘草のことは大坂へ直組之事に而信州より大坂まで人來り  
といふ上は甘草のことの利を開たるは相違もあるましき也手蹟の上達夥  
し文藻には得手たる男也徠翁などのことし書狀中異國船伊豆へ上り測量

したる風聞をきゝたりとて大に憤おもふよしなり○異國船のこと世  
上の蘭學者といさゝかこゝろあるものとは却あいろくのことをいひて  
わかおもふ所とは異也學者の類は官醫の藥法の趣書面の理義をやかまし  
くいひて病人の生死にかゝはらさると同じこと也政にあるものこゝろす  
へき也淺野梅堂か異國のことをいふ書にかな書にはとり用ふへき所あれ  
共文章めきたるものには少しといひし也梅堂か人に過たる一等なること  
をみるへし○昨日保養中修理より借たる醫書をみしに其内に西洋醫者の  
醫戒を書し翻釋ありいろくいふ所少も江戸にかはらす江戸の醫の穴さ  
かしと題するも可ならむかとおもふはかり也衣類のはやりを着用しめつ  
らしきことをいひて人を欺こといましめあり日本の醫に露たかはぬ也其  
内に奈端ネイトンといふ西洋人の星のこと明なる人に君何を以非常の大發明を得  
しやと問ければ答へて我常にこれを思ふのみと答へしと也このことなと  
は大儒の語のことし忘るゝ故にあやまる也常におもふはゝ何のあやまり

かあらむこの書によるときは血をとるとアヘンを用ゆるとのこと専ら也  
尤名人わさのことしこれにて當分蘭醫に血をとられて死するものあるへ  
し大笑也醫は三世ならされは其くすりをこゝろみすと聖人の仰られしこ  
とよくわかる也決而めつらしきことをいふ醫にかゝるへからす命を以手  
習双帯にさるゝ也可恐のかきり也元來元祖といふものみな名人也紀州の  
花岡京都の桃洞の類にて三代目の醫は大かたは愚也しかるに三代目以上  
之ものにかゝれとは禮記の説いかゝのこくなれ共いたく奇をこのむ今  
の手習双帯に逢さるとの意也其意分明なれば必一代の名人にかゝるなる  
へし右に付一ツのはなしあり世の中の一わたりを書をよみ文をかゝるもの  
みなめつらしき人のしらぬことをいはむとすることこれ常也いさゝかも  
ふるき事をいへははや陳腐せりなといふ也よつて今海防策を書くと必人  
のいはさることをかく也上手ほと其くせあり其間をおもしろく書廻して  
全々味は少き也只の文章山水のけしきをいふはよし天下濟世のこと文章

のためならむやかゝる愚なるこゝろあるものゝこと露用ゆへからさる也  
人を驚かすを以よろこひとするもの共もとよりとるにたらぬ也

○廿九日 雨 前のいまたつくさす故に其大本を再ひいふ也西洋の人た  
りとも天地人に別なし書は懈行辭は缺舌也とも圓頭方趾天地に表しこと  
なることなししかれば天の性を受ることもど同じよつて聖賢同様のこと  
をいふ也元來學問并字の濫觴といふものは八卦なるへし其八卦を書しは  
伏羲氏ならずや其伏羲氏の天下に王として八卦をかきたる時は文字もな  
く今の蝦夷に變りなかるへしされ共神智を以八卦といふものを初書れ  
たり其八卦といふものは何より出しといふに仰て天を觀ふして地を察其  
外人物鳥獸によりて考たるといふこと孔子の御ときなされたれば易と  
いふものも伏羲のこゝろよりみればめつらしき奇談新説にはあらし天地の  
あるへかゝりのめつらしきことならぬものを集てかく也と人に教玉ひし  
也夫に千万世の人よりて新奇の説次第に起り天下後世をあやまるにより

て代々の聖人出られて其本元に背ての説けつらるゝこと也孔夫子の聖人たるも述て作らずと仰られ詩書執禮みな雅言也ともみえたりしかればめつらしき人のいはぬ説といふをこのみてあけ誇るといふ儒者書生等かこゝろは聖人の大罪人也され共儒者書生らかいふ文章といふものは役人の構はぬもの故に日本にては天下に大害なし然るに海防のことはおのつから書物によらぬはならぬ様になりてある故にいろ／＼の辯論の書出て人を害する也御役にあるもの決り油断すへからす其もとを論してみればみな落はなし或はよみ本のなどの類也決りとるにたらぬ也され共こゝに可歎は豊臣殿下の世界未曾有の豪傑にてあらせなから明朝鮮の人情を御存知あらせられす數千万人を殺して大明國王になるといふ僞言にて一旦朝鮮の和議を結へるといふかこときことありこれをもておもへは豊臣の殿下にても如斯其余の人軍旅のはなしをも常に講せす異國のことをも更にしらすしてことにのそみて人に一寸聞て夫にて天下万世へかゝることを

取計といふ様なること万々一ある様にては大事也天下の士といふものは三日逢されは大にちかふといふ故にわか弟等既に四年を経たれはことごと四年前よりは明なるへし外國の情其外も詳なるへしまして其筋の人々は豪傑林にみちたれば夫に對して夢々論するにはあらず只世のいにしへの有さまをおもひ出るまゝに例の茶話に記す也○うら賀下田といふ所即今の事はしらす天明の頃海國兵談といふものに論してめつらしき所をいひしことくなれ共左にあらずいにしへより大切の所也日本武尊東夷御征伐の時もうら賀よりわたり給ひしかとおもふ也走水の觀音はいなたひめを祭るといふ説ありしかと覺たり其外 將軍家御上洛の御時は必うら賀へ兵船をとり揃て警固することかと承る夫故に下田或はうら賀にいにしへより奉行をも置き當時のことく日本第一の大切の地とはなりし也いにしへより新城を立しといふあれともよき城といふものは多くみないにしへの豪傑のみ出し置たる地にて新城といふはまれの事也

○晦日 曇 前にかくいろくのことはいへ共みな兄弟限のこと也われ近頃只詩歌のことのみを樂て兵書等のことは更にみすまして外國のことなどは第一の禁物として人に對して露いはねとも弟らかはなしはかりに記す也其心得にて御覽あるへし○このころ輕き腫亂をしたるによりて力衰しかとおもひしに鍵のすき等をなしみるにいさゝかも相違なし外傷のことにて一日位のことにてはうちは傷まぬものとみゆうちより出たることにてはよくはあらぬ也○一昨夜父御手いたみ朝にいたり指少しも御きゝなされすこれは此節流行之中風也とおもひて大に驚たり乍去御うちみとの事故にあむまにもませる積にみせたるに手の筋肉をはなれて違ひたりとて少々御いたみ被成へしといひながら十はかりもみたりよほと御いたみ也き忽によしといひてそこにあるものを爲御持試たるにいたみ所洗たるかことく平癒して一同其上手なるにおとろくなか／＼になぐらならばよほとの手間かもしらすとみな感服せり黄わたの粉をぬりたる

にひる頃には御全快御よろこひ大かたならず候いなかにはいなかにて又することあるものあり不思議なるもの也されはさしてこまるところもなきもの也

○六月朔日 晴八十五度の暑也 兩御門主は暑中として參る大乘院殿は御附弟内々御引移昨日あり右之御祝義をも申上る御九ツ也といふ九條殿の御子也今曉六ツに京都より御引移也風聞にははしめはならへ行ことをいやとも不思議出家をもよしと思召たるに僧になるといふこと御引移の前に得と御承知にてそれならはいや也とてよほとむつからせられて夫故に御家來なとこまりたるといふ也幼年の御事ことさもあるへき御尤の御事也

○二日 晴 あさはすゝしされ共ひる後は八十七度にいたることしはゆるやかなる暑故にみなあつかる也あさは七十九度位にてひやく／＼するこ

と秋のことし

○三日 晴 大にあつし九十度に及ぶ例年の暑に少もかはらすされ共米は又二匁あけたり○此ほとなまの魚といふはなししかるにめつらしく鮮鯛をもち來れり大なる魚にて六匁也とてもあすよりは來らしとおもひたれは買てさしみにつくり父上に奉りわれもくひたり母上一同大に御怡ひ也父上はよほと御醉にてならへ來りて例年庭の井よりみつからくみて水を御打なさるゝ也井戸は御隠居所にあり御酒後は其井戸の邊へ御出なさるゝことを御とめ申上ありしかるに御聞入なしとて人々いひ來る故われ書居たる筆を投て行みたるに女共腰を押へて居て水を御くみなさるゝ也其躰御足もと昨今に歩行ならひしものゝ如し御とめ申上たるに御承知にてさて酒を呑ときはかく足のきかぬといふは不審也いかなることか左衛門尉往々理を究むるといふかこの理究たりやいかになとよき御きけむなりし也御酒料大に減したり三合位のことなるへし

○四日 晴九十二度にいたる 一乗院宮の坊官二條宰相のもとより詩十五首來るまたわれよりもいかゝなるかことし上をみても下をみてもといふこと眞也七言絶句并律也即日みな和韻したりこのほと御用向なくなりてかゝることなくては筆とることなし

○五日 晴九十二度の暑也 父上少々暑氣御當り母上同しおさとけるゝ也われと市三郎下女共は先ッ無事也此ほと不時候にてはみなさもあるへし母上はきのふ多く水をあかりしといふ故にそれなるへしみな五苓散也○けさ馬にのりみるに老馬なれとも至るよく歩行もおしき馬也わか方へ來りてもはや十一年也去年わつらひて片目を失ひし故にことしは四月のころより豆をとめて麥のみ食させて日々塩湯を遣かはする故歎大に丈夫になりたりこれにても老人も養生の次第にてたしかなるをしるへし借馬十邊のうち十三篇以上必あるく也

おのか身のかさぬるとしは忘れつゝ馬の老行こと歎かな

所司代公用人々御參府之義 姫宮御引移御用に付御延引被成候積被仰上候旨申來る

○六日 晴九十二度にいたる 米二匁下る○人のもとより來山陽の詩文集をかしたり山陽至る行跡のよからぬ人にて遊女あかりの妾に酌をとらせなから講釋をして一部の講畢れば弟子共に女郎を買するなといふ説ある人也よつて好みてもみさりける歎けさす風見かゝりたるに例の三蘇の文章のことく縦横家の説にておもしろさいふへからす食事をも忘れて文章のかたは悉によみたりされ共まことの文章は少し多くはおもしろき落しはなしのことくにてよみなから獨わらひをするかことしこゝに一の説あり馬琴かよみ本の類忠臣孝子の其みちを述べて落涙するかことくなるにみ合すれば却るこゝろには益なき也われおもふ山陽は日本 神武帝已來の文章家なるへしそれにてまかくの如しよつて夢く詩文章の書はよむましき也其内に詩は歌のことくなれば毒も薬もなし文章は人情を人動す

きみありて人をのゝしることなとおもふのみにて一向に益なしこれはめつらしこれはおもしろしといふはかりにて最上乘の文章をみてもいはゝ初ものをくひなからおとしはなしを聞かことし身にとりて益なし武士のよむべきは小學近思錄其外宋明大儒の語録にかきることなるへし武士の學問は孝經論語左傳名臣言行錄等の大義に通したらはこと足へしひまあらは武を講すへしわかこの節詩作又はかゝる不用の書をみるは琴瑟をもてこゝろを慰ると同じ格也これにふけるにはあらぬ也

○七日 晴 昨夜御用狀來る○母上様被爲初候而一同御機嫌克と之御事殊に母上の御健恐悦之至也新右衛門御用多と之義左もあるへし○友野先生子息より草稿來る詩作大にあかりたり陸放翁風を學とみゆる也かくはかりには出來申間敷とおもひしにけしからぬ進み也先生は大に安心のこと也これにて往々儒者の見習にはなるへし○ある布衣以上なからひまの御役人の若き人より海防策のこと申來る小學に邊防のことをいはすとあ



れは近頃はやめたりとて

休尋千鏡揮蕪筆。忘却孫吳樂癖詩。山國閑眠一狂叟。夢中未識海城旗。

と記し遣したり

○八日 くもり 昨夜微雨今曉よりあつさ甚し五時より俄八十二度の暑に下る至る冷氣也不時候いふへからす乍去宅に病者なし○御老中方聖堂へ御廻りあり海防の策御尋ありしなと風聞する也まことにや○山陽は群書に明にして専兵書をこのみたるといふ也この男の論通議之内にみゆ新右衛門など一覽あるへし○凡儒者といふものゝ論には大儒先生は格別一通り人には先ッ人にわるくいはれぬ様に逃げ場をつくり置て夫々筆をたてゝ文章をかく也昔中嶋三卿のはなしを聞に衆評之上もる薬に効なし夫は此病はたとへは脚氣也夫は何々と書物にあるとて引當たるもの也よつて容躰書と醫案とにくるしみて實効はなし元來くすりにこれは脚氣門のくすりこれは傷寒と門をたてゝみするは下學の人のために凡をいふこ

先例といふ古法  
かことし列  
子の語かと  
覺たりた  
へは川柳の  
句に通は細見  
大には細見  
をかつて見  
ずといふか

と也夫へ符合する様にするといふは愚至也よつて病者に効少したとへは方極三十六法なれ共變化きはまりなきかことし只執ヒの醫の方寸のうちにありて書物もいはゝ反古也といひきおもしろき事也海防策などこれに類することはあらされ共万々一のことありては大變也其事を取行ものより割出す時は命かけにてする故に十人にすぐれたる人ならば深切より事實になる也これは身のかれをする所事實になりて効を立る也われよりの論は人にいはれまし譽を得へしといふか第一故に千人にすぐれたるもの効少しこれ深切と不深切より出る也

の九日 晴 朝七十五度にて暑に一度たらすこれにて十日つゝかは大變也○この頃醫の來りて字をかきくれよといひし時前の三卿の意にて良劑通神驅二堅これは病氣秘方起死活千人誰知積累勒辛後袷去筌蹄得此

仁

と記し遣したり○軍旅のこと衆人の上策といふはみな下策也これはとて

も敵は來るましと衆人のおもふところは元來不利なる所也其不利なる所より切てかゝる故に敵は不慮になり味かたは必死となる故にこのとき必勝也義經のいくさ楠のいくさみなしかり爲朝か策を少納言信政か不用しより敗軍となり唐太宗の聖人に近き神智を以十六才の御時より軍に必勝給ひて朝鮮攻はかりは大に御損給ひしといふもあまり十分の御考のみなりければ敵にて知りてみな謀不被行さしし也尤太平の時守りふせくことはこれと異なれ共此意なくてはならぬこと也衆評といふものは上にある人了簡を決着してありなから異見を聞故によくわかる也一の決着なきときはみな迷ひの道具となる也

○十日 晴 和州の法隆寺といふ所に百姓あり一子相傳にて中風の灸をすうるといふこと也和州にては名高きもの也其人先脈をみて手の絡の躰をみていかに大酒いかに大ふとりなりとも中風の筋の有無を察して灸をすうるとすへぬとあり順作は行てみもらひたるに筋ありとて所々すへ

たりわれ其灸點をみるにみな人のしる所にて手足は多喜の急濟法などにもある也下女その近頃筋いたむ也いは、中風の數年の末に起るへくともいふへしけむも少しく手いたむとて二人なから灸點を願ふ故に五里はかりなる所なるを呼迎へたり第一に父上母上をみ奉りて中風の氣更になし灸事に不及といふおさとは少々あるとて手足へ點せりそのけむにはなしとて點をせすまさうたにはありとて點せり家中みな見もらひたり我もと人のいふなれとも元來母上は阮は御中風症あることは三卿なともいひ我も御腹をみ奉りおりくもみあくる也しかるになしといふ不審也うたなど廿三歳の女也後年の中氣の有無を決斷していふ可疑ところ也かゝるものに我かゝりて點をもらふといふはいやなれはさせす却而一度見て其病の後年までを受合といふはならぬこと也われ母上に中氣の御症更になしといひしを大に案し奉りて決而御用ひあるましと申上たり灸點はみな害なき所にて疖症にもよければ構はねともみたり後年迄をいふ實に可怪

こと也乍去從來のことにて錢とりにもあらねは吟味するにも不及され共  
かゝることに決而構はれぬ也いかなる名醫にても三十日の末をみて無病  
を受合人あらは不届也人間はあすしらぬといふことをしらぬ愚也  
○十一日 晴 八十七度の暑也御用日白洲に出る○昨夜並便にて鴈皮番  
来る○順右衛門悴之才氣よほと也且書物をみることに甚敷すき也此ほと日  
々来る書あるもの必おさと并女共にゑときをきく也解せぬものは必これ  
はとうもわからぬといひていくたひも聞てわか前へもち来る也せむへい  
などやりてもみたりに不食半は金魚にやりてたのしむ躰となか／＼三  
ツ子のとり廻しにあらす夫故にいろ／＼のことを知りてかれこれと辨別  
をする也不思議也このことくにて書物好にて才子ならばよほと順右衛門  
は仕合もの也○此ほと興福寺へうははみ出て鹿を追たるといふこと大な  
る評判也みないつはりなるへしこれ大鱗なれば虚實ともに害なし人にも  
しかゝるいつはりありて江戸の風聞とならば大なる難義也孫子の神智に

あらされは間を用ゆること不能といひしは確論也衆人のいふことを聞と  
いふこといと／＼かたしあまりに衆人のことをきくと詩經にいふ道はた  
に家をつくりて往來の人に相談しては普請を直す三年立ても出来すとい  
ふと同じことにて風聞を聞こと大切也このほとの大鱗の説など實らしく  
いふもの十人にして六七人也され共真にみてわつらひしといふは大臆病  
の馬鹿と聞は更にとるにたらぬ也春日山の奥とならばしらす興福寺の  
境内などに大うははみのすむへき理なき也因にいふ凡人のいふことを聞  
といふものは其ことはかくすへしといひて先己かこゝろによく穿鑿して  
己か天理を明にして此上は仕かたなきといふにいたりて扱衆評をきゝて  
己かひつみたるみを直す也たとへは己にもものさしありてのち人のものさ  
しの善悪も己かものさしの善悪もわかる也己か一點のひかりなくしてあ  
まりに人言を集むるときは不決斷又は大變なる買かふりをする也常山樓  
餘話に都那のはかり事は不決斷なるときは中なるに従ふへし上策の上々

も上策とおもふ故に下々策に陥といふことありと覺たり確論也

○十二日 晴 朝は八十二度なれ共夕には九十度に相成暑甚し○この頃中風の灸店いふ中風の筋あるものはなまくさにて蛸からす貝を類野菜にて唐なすほうれんそうこんにやくをいむ唐なすをいむこと尤甚しかなけのいつる銅鍋にて唐なすを煮食するときは三年のものは一年にていつる也某の寺院去月のこと也灸をすへてやりしに中風大にきさせり其ことをいひしにわれはをしくもなきからた也とて唐なすを縁しやうのことくなる鍋にて煮て夥食したりしかるに無間も中風出て即今終に半身不隨になりたりと也これに付唐なすを止たり

○十三日 晴 暑同じきのふ夕かたに

なか／＼にたのみし峯のくもはれて夕日にあすのあつさをそしるとよみたり上かたは夕かた露の降ること夥し日くれ足袋をはきて庭の芝原を歩行するに足袋露にてよこるゝ也夕露のことうたの如し關東にはな

きこと也其夕露なければ翌朝くもること必定也夕かたより風なきて日くれを五ツ頃迄は江戸の日中のことし八十八度位也其くるしきこといふへからす

○十四日 晴 きのふ夕かた泉水をみておもふには水の魚を生すること勿論也とはいひなから一盃の水には入ホクリたに生せず庭の池のことにいたりては放たすして鮒までは生する也夫々大成の極にいたりて淡海のこときはめつらしく目なれぬ魚をも生する也大海にいたりては鳥獸迄も生する也これに似たること諸藝の妙人へ之深切神ほとけへのいのりの類みな人のするところ一盃の水に鮫を生せむことを欲し一尺の堀に鯉の生せむことを望む也しかるに望のことくならねは却ち道を以いつはり也といふ也ものことかくの如し聖人の久しくしてまことあり仰られたることおもふへき也前の日記に記す西洋人か妙は不絶石に生するといふも同じき也

○十五日 晴 月並なし寶藏院覺定房印懷法印來る例のことなれば坐敷  
口通槍のはなしなとするよつて戯にいふ先生といふへしや方丈といふへ  
しや御院主といふへしやといへはいつれにてもよろし或は上人或は御師  
匠つめて和尚といふかことく呼<sup>ヨ</sup>人もある也はしめて逢は帶劔すると也け  
ふは白き衣に水晶の數珠つまくり中啓なともちたりひや素麵を出す戯  
にいふ我南都の奉行ならすは魚類をもまいらすへし奉行中は三衣に對し  
魚類は出さぬ也元來出家戒行の内人を殺すこと程の重きはあらしじかる  
を少も多く殺し少も多く害することを教ゆるをもて第一の行とするは大  
笑也といひしに大に笑ひて常に其ことを申候先祖二三代ころ迄は稽古場  
に精進はなし稽古はしめも眞の狸汁を出したり近頃は狸しるもときとい  
ふものになしたり人を殺すは大惡也僧侶中にては大惡中の大惡也しかる  
に神君以來 上覽ありて今にしかりされは寶藏院は日本隨一之御免の大  
惡僧といふへしとて笑ひし也今の院主至るよき僧也鍵の柄のふとさ手本

壹寸二分鍵の先きにて七分二りの鍵を元組<sup>祖カ</sup>は用ひしといふ也今の寶藏院  
流のやりは夫より先細き也鍵の柄末細きは捨物也と後藤又兵衛もいひし  
と覺<sup>ア</sup>へし也

○十六日 晴 嘉祥なれ共ならは平日也○市三郎順作同道にて鶯の瀧と  
いふ所へいたる御役所より十七八町もあるへし春日山の松柏鬱茂のうち  
を分行也瀧は四五間もあるへしといふ也水は大人のひさ位もあるよし也  
こゝへ行てすゝめは更に暑なしといふ也こゝと春日の日月の岩といふ所  
すゝしと也行もの單物之外に袷なともち行といふ也酒のみても冷氣にて  
酔はすと人々いふ也乍去躰弱きものなどは勘辨あるへきこと也市三郎當  
夏ことの外に丈夫に成たり壯健なる大男也鍵は出精也文藻はなしこのほ  
と漸馬琴本などを人によりみ聞する位也可歎

○十七日 晴あつし きのふより雨氣のことにて一沾の潤なしこのほと  
病人又は死するもの多し御役宅には壹人もなしこのほとは醫者の上手の

勝南院も中暑と痲積にて大病也といふ也かゝるとき大に煩はぬは常に手當するものに多し炎暑に水をまくに常は同じことなれ共雨ふれはそこより大にしめるかことし手當は常にみえす人の實意は難義に逢てしるゝと  
同じ

○十八日 晴 昨夜雷雨雷は甚し雨は少し團扇献上濟之御奉書來る○けふは落着物十一口あり其内十八才之女のしゞみ貝かくさめしたることき貌はせにて尤臭氣甚しかるへき女を酒狂之上相撲取其外七人にて強姪をして御仕置になりたり上かたにては強姪は酒代位之事に濟よしよつて風俗あらし右故吟味を誥たり其内にわつらひて死せぬとするもある也可歎こと也いかなることか落着を申渡たるに頻に難有かる也大笑也

○十九日 くもり又雨 八十三度の暑也○順右衛門忰筆をとることを好めり蚯蚓のうちに趣ありかれ三歳也我三歳の時に竹と云字を書たりとて行道院様のことの外の御悦のよし也其こと順右衛門に申聞せてすゝしく

なりたらは字を教さするつもり也日々に来り筆とることゝ本をみたかる也この勢にて成長せはよかるへしされ共幼年のときのこと更にあてにならぬ也

○廿日 くもり 七十六度の暑也○市三郎此ほと軍記をよみていろゝのこを聞也われいふ 東照宮の御生涯中の六ヶ敷御軍を知れりやといひしに豊臣殿下へ對せられたる小牧か或は人の知たる味方か原かなといふ也われいふ味方原の御軍は御難戦もとより也小牧は義を以不義を御討被遊たるなれば論なし可恐ことの多は大坂二度の御陣也よき御家來共は多く卒せられて百戦の人々は數人に不過其上御味かたの人々一人にても負へきとおもふものなしみな多くは賞られて大名にてもなる積也しかるに城内之人々は必死之豪傑にて既に首帳の万數に及ひたるにても其多きことしるへしこのとき一たび御けつまつきあると大變にいたる也故に神慮を以再ひまで御和議になりて秀頼の薩州に落たるまでに御味ひあり

し也治世の軍は賞のみをおもふて死する氣のもの少しよつて至る六ヶ敷也大坂御軍の手もなく濟たる様に市三郎等か目よりみゆるといふか神智といふものなるへしとかたりし也新右衛門等かつとめ向にも大小こそかはれ泰山と丘埜にていさゝか相似たることある也つれ／＼草に木のほりの上手か高き木へのほりし時に木より下りはつか地をはなるゝこと一二間になりてやれあふなし／＼といひしといふことありしと覺へし同じ意なるへし

至多刀劍  
土浦侯も  
な物集り  
の頃川と  
家小川と  
大郎と  
服たてり  
望かたり  
見し御所  
へ拜

○廿一日 晴大にあつし 昨夜六日限にて御團扇獻上濟之御奉書來る○  
新右衛門を暑中と狀忝候御同前に無事に而大慶也○日記之内に土浦侯の庭へ御出之由右は先代之節われも行たり土浦は甲斐の武田の忠臣土屋惣藏のみなしこの家筋にてわかれ也本家は三万石にて潰たり分家なれ共  
有徳院様之御代はしめ之御老中にて 有徳院様を御上段へ御案内申上たる人も右に付度々御加増にて當時之高になられたり其人之下屋敷故に至

此々條得と  
御熱讀ある  
へし恐可懼  
れ可

あよきけしきと覺たりくら屋敷と覺し也水門より舟にて行たりさて雨中も引半てんにて茶はかり同前にては大魚の得ものなくては大難澁なるへし乍去新右衛門之取計甚よしかくてこそ取締はあるへし後々へ傳へたし寺社奉行調役已來はしめての事なるへし歎服せり○御用向出精よし一くら星數五五六とは何事そや必古物もあるへし世話尤也五五六ありて生星はかりにてはととも勤まらぬ也其内必沈物あるへし世話なくてはならぬわけ也しかし末之様子にてはよく抄取よし夫に而出ものも多きよしいさゝか不解○廿一日落馬之事可恐之かきり也わか甚敷恐るゝところ也兼る日記へ詳に記し置しも夫かため也馬の怪我のみは癡人にもなる也決る手にかちたる馬をのるへからす驚歎せり已後決る手にかちたる馬御無用也馬は武用之修行也身の圍也なくさみにあらずといふこと御勘辨あるへし藤左衛門等か駈來て世話したるとき迄は必ばつとせしなるへし今一段にて氣絶也高きより落たる落馬したるなど必心けいにひゝきある也

夫にて後々愚になり又は病を生ずるもの多し既に太田備後守殿之寺社役之内にありと覺たり早速に醫者にかゝりて厚手當あるへし可恐々々○朔日に敬次郎参りたるとの事に付御申越之趣御尤也かゝる歎息實に多し○日蓮宗本法寺の僧熊谷いなりの偽事を以人を欺たる尤可惡之至也遊女之艷書等絶倒也昔延命院日道は艷書長持にいく棹とか有しと也なせかゝるものを貯置くやと中書の御尋ありしにあまりに艷書多ければ長持に七棹にいたし塚を可築つもり也といひしと也いにしへより女犯の惡僧常に日蓮宗に多し寺社奉行所にて御仕置になるもの八宗不殘と日蓮一宗つり合へしよく人を欺よりみな起る也いにしへは一心安録をしるしたる岩本實相寺深草の日通なとよき僧もありし也當時深草源清派はつふれ同前也日蓮の僧侶共にはなか／＼出來さる故なるへし○立野侯より墨の御挨拶推黒之ふての軸二被下之恐入候立派なるもの也乍去蕪詩などはしたゝめかね申候宜御禮被仰上可被下候右之墨と同事に刀革相廻し候ひしか届候

新右衛門の禮おとへたれ共の例とす  
 世話を大にのさへたれ共の例とす  
 彌吉母よめ道に参り御意にありし  
 かあるとき意にありし  
 この女死せさ家は必汝  
 らすは仰居れすは年果  
 御見はかりしれき後か  
 なる御こと明也今の母上  
 御養父母の御こと通  
 少も不達也

哉いかゝ試られ候哉考共に承たし○雷之事恐へしならばよく夕立のあるところなるに當年は絶無なしこの頃一度あり山國に雷なきはよからぬこと也必稻作にあしといふ也○十一日に大越貞五郎支配勘定出役いたし評定所衆人に可相成よしさて／＼目出度候都筑佐々木の骨折左もあるへしおさとの歎大かたならす例の落つき顔なれ共よほとうれしとみえて其事を聞てよろこひのあまりに發熱したりとてわれにかたりき左もあるへしわれ十三歳のときかはしめて肩衣を着ていなりへ詣たるすかたを 行道院様の御覽ありて汝運あらは評定所の留役などになるへししかし危相なる男にて腕はかなりにあるへしと仰られき其御識鑿之通也き夫を御縁にて兄弟四人みな評定所へ出貞五郎までも評定所へ行とは不審なること也貞五郎は詩も文章も出來元來文藻はある男にて且温順也末たのもしき事也大越の家興らぬとして不興みな外へ出し人のみよし大越孫兵衛之弟信解院は大僧正までになり其外忠四郎おさと共によしこの度は貞五郎によ



りて興るへき也新右衛門方へ参り候は、よく御教可被下候この人先ッあふなくしくしることときことはすましとおもはるゝ也四年不逢いかになりけむわれを送る文などは筆のたてところ至るよく出来よかりきあの様子にて二十一歳より評定所へ行もまれたらばよき筆とりになるへし人には時あり四十になると學者臭なりて留役には品によりあしき也

○廿二日 雨雷 當年は畑へまくわ瓜西瓜之類をつくりたり奥の畑は茄子之外みな不相替不出來也家來共之方はよし順作方々西瓜の初なりをくれたりけしからす大きし人々みなめつらしかる也土地にあふしつよき故なるへし

○廿三日 雨 漸少々しめりたれ共年去暑は同じこと也病人多けれ共奥にはなし女共迄丈夫也時太郎御作事方之同心になりし由大慶也

○廿四日 くもり この頃儒員のもとより苦熱といふ題を出したりたゝ夏のあつきことをいふもおもしろからすと少しも偽なしにわか身の上にな

に一首の古詩をつくりたり母上新右衛門か親しくみるところなれば御なぐさみに記し申候

少年苦刀筆わかきとき留常愛夏日長御用多故日隨師學ウシユツ劍伎酒井先生之弟子に

と晨往登其場毎日あさ踊躍困軀殼飛はれし折ること卒業歸來忙稽古ある故

あはて、炎暉漸欲午歸るとひる前に汗流拭不遑汗をのこふひま改服往尹府替

歸ること炎暉漸欲午近くなること汗流拭不遑もなき程あつし改服往尹府替

行宅へ行急走不選涼あつし故になかくすしの我今尹此地行となら奉九夏

下堂稀夏外出とい官邸如蕭寺御役宅は大きく庭中松林多庭中松林多庭にまつ高簷臨荷

菱のきか高くはすなと四望風路彭かせ入かよく所々か遙比疇昔事むかしの事

はみれ隔絶如天壤雲泥のち何事炎暑至困苦唱吁嗟何の事たそれたにあつくなる

るいろい暑威非有異なにもあつさにかは全是寄侈心まつたくおごりの豈只苦熱

累それは何もあつさない百事亦如斯りの氣がついて廻る也即今題數字の今こ

りなつく自誠勵素志みつからいましめてとのこふ

○廿五日 晴 七十五度也當年第一之冷氣也きのふある人の文をみるに

古事記  
若雷神  
三代實錄  
若雷神  
右之類は別  
のかり字也

としわかきといふ所へ若といふ字を遣ひあり弱か稚ならてはワカキ意に  
ならず例の俗習なるへしとおもひたれ共乍去より所あるかとおもひて見  
たれ共手もとはは字典と活法の外なしいつれにもわかきといふ意みえす  
され共若狭若草をはしめ若年寄など若をワカとよむこと多しよつておも  
ふにワカクサを萬葉に若草稚草と書たり日本書紀には弱草とあり元來稚  
草弱草のうちなるへし然るを若草と書たるは説文に若は擇菜也とあり例  
の万葉のくせにて十六自物猪といふ義二王二王といふ夫よりうつりて手の師といふ  
ことよむのこときなそくのこことわけにあわか菜わかさを擇みつみと  
るの意にてわか草に若の字を書たるなるへししかるに稚の字のかたは少  
く若の字かた多く書來りたるよりわか水わかきの梅なとにうつりたるな  
るへし夫より若の擇といふ訓は心つかすみな幼弱のことに書しなるへし  
日のもとのなかむかしよりの謬傳かゝること多し奥の土間のことき所を  
つほといふ桐壺梨壺のことし今も老女をつほ根といふ類也夫は詩經にあ

る宮中のみちとかいふ字に壺といふ字あり夫をみあやまりしかもとなる  
へししかるを古躰のうたよみはたゝの壺にて壺にはあらず借字也といふ  
也よの中に古躰のうたよみしほと強こといふものはなし眞淵にはしまり  
宣長にいたりてきはまりたる也宣長か日本書紀をあまりに悪敷いひたる  
故に恐入たることゝおもひていとまに宣長かあやまりを糾して辨蒙をか  
ゝむとおもふ也若狭をワカサとよむとて大和の例にて大をヤマ和をとと  
よみては不通山城のシロ又しかり山背とかきたるよみを用ひて四方にや  
まありて打圍たるより城といふ字を國号の字改正の御時に御改ありしか  
城は和訓キなれ共山城の例にて城を都而シロとよむ也若のワカとよむも  
この類にてしるへし

○廿六日 くもり 四郎の在所を金十兩來る右に付四郎家内之もの共蘇  
生したり四郎の家内も江戸へ歸り度由也さらは歸るかたよかるへしかに  
かく江戸の否を待也○庭の眞桑瓜此ほと熟せり味よし大にして甘し江戸

におとらす至るよし○けさ馬にのりみるに老馬なれ共足至るよしなひらは麥と塩湯にてとまりたり可惜馬もはや七八十の人のことし乍去よく歩行ことは希代也わかきときに少も差別なし可惜事也

○廿七日 晴 あつし九十度にいたる○順右衛門忤おもしろきことをいふ也先頃順右衛門不快にてしはく打臥たりそはに居る故にわれ死したらはいかにといひしにしはし考居たるかやかて馬鹿をいふとて笑ひしと也夫等のことよくわかれるとみゆ才はある兒也三才にはめつらし

○廿八日 微雨 夜八十八度朝八十五度也ひる九十三度以上なるへき所雨にて減○けふなら般若寺に所藏の 神功皇后三韓御征討の御時の弓矢をとりよせてみる其頃のものはいかならむいつれふるきもの也弓は虫はみて二ツに折たれいにしへの丸木弓也矢は二羽三羽四羽とありしことし羽はとくに失て其あとかすかにみゆいにしへは日本の矢二羽にて今の蝦夷の矢の如し古を守りて今も上さしは二羽也といふ也古事記にいふ天の

ハッ矢なと二羽也といふ也この矢は其後のものか二羽とみゆるは上さしともみえず四羽なるは二羽は大にして二羽は小なるかことしえひらは猪籠のことし藤を以うつくしくあみたるもの也乍去とし經しものにてみなはらくになり居也古事記天は、やの躰にてはいにしへ日本と余國との矢は製ことなるかことし余國とはかの天つ國のこと也からの矢百濟の矢なといかにかありけむ

○廿九日 晴 すゝしあさ七十九度也○藝州の梅梢院よりおさともとへのふみをみるにこま／＼との事に而去年の出火のことをしるしてくよくよといろといひたるさま少も下さまの人々にかはらすいろ／＼とうち歎きあり身こそ輕けれ四十二万石の當主をうみ其奥さまは 公儀より來りいかにあるとも火事くらひにて少もこまることはなく日々にやけても新敷なるかうれしといふへき位なるにいろ／＼歎きあり右に而おもへは母上など少も御歎きの意はわき目にてはなけれ共いろ／＼と思召も御尤か

とおもふ也世の中のこととはかきりもなきもの也ほとしることいとくか  
たしほとをしりてはしめて楽しみある也

○六月朔日 晴 八十六度の暑也江戸は常に暑中九十度少しならば九十  
二度三度にいたること多しこれは南による故なるへし○おさと此ほとは  
ころよしうたをもよむ也人々より被頼たるたにさくなと記すに書躰よ  
し記行なと追々に出来る也○ならの興福寺の南大門のすゝみ又はきつち  
町の遊女やなとことしはさひしと也これは博奕嚴重なれば錢廻りあしと  
いふ也二ツなからよきことはなきもの也○昨日都筑金三郎より書狀來る  
其うちに奥方大病中より五才の娘を抱寐をしたるに其娘江戸へ歸りしる  
人なければ唯々金三郎を慕ひて登城退出ともに附まとひ居たるよしし  
かるに奥方病死後其小兒も死せしよしさを金三郎のさひしさはいかなら  
むおもひやる也順作いふ妻死してのこりし小兒は至而不便ますもの也順

作も覺ありとていたみいふもおさとと其外聞人々みな涙を流す也金三  
郎も結構は十分なれとも引つゝきたる不幸はいかにも氣のとく也誰もみ  
なしかり大小輕重遲速はあれ共禍福は麻なへる繩のことく也とはいやな  
ること也

○二日 晴 朝は七十五度ひる後は九十度也いかなることによつてく  
ほうしといふかことき蟬なく秋のけしきはみゆされ共かくあつきはいか  
に○都筑之書狀にては大越の聲羽田之某も支配勘定へ出役したりと也大  
越は悴聲ともに大出来也怡ひおもひやる也○人に被頼て六枚折の屏風一  
双をかく也酒氣なきときとあるときにては出来方大に違ふ也三四寸まで  
の字はともかくも唐帯へ十字位の大字は別而酒のよきやうにおもふ也き  
のふは十二日メにて酒をのみたり

○三日 晴 きのふ四郎後家之迎之もの來る旨之書狀江戸より來る○ひ  
る後に別當之兒四郎の兒順右衛門の兒來るさわくこと夥し別當の兒至

よし四郎の兒は女なれ共豪傑風也妙達に似たり生たる泥鰯を首よりかみ或は立小便などをする其勢ひ傾城水滸傳之内の一人なるへしならにて出來たる兒ともみなよし閑暇にて入念あかるき所の細工なるへしわれなら奉行中一子をまうけさることをうらむ也

○四日 晴 御用日此節御用少し公事三ツ也あさはすし馬場にて馬をのりみるに土手上より吹おろす松風すし

調埒沙平七十弓松墩遮日碧葱々俱兒蚤起常奔馬清蔭涼來洗耳風。

七十間の馬場前後と南は高三間はかりの土手にて松さくらの並木あり古は五十間はかりは練塀二十間はかりは三尺はかりの土手にて其外はふけ地也なら奉行この馬場はかりは江戸へみやけにいたしたし上屋敷には十万石にてもなし

○五日 晴 九十二度の暑にいたる○父上夏中の御なくさみに庭の井より水を御くみ候て御隠居之御庭へ御そゝき被成市三郎いふ父上の水とわ

かやりのすこきはなくてもかならむといふ故にわれ教けるは庭へ水を御うち被成は陶侃の百甕の古意也よしや御隠居の御事故に力を中原へ用ゆとの深き思食にはあらずとも一ツは身の御こなれ一ツは御すこし一ツは人しらす中間等のつかれをもおいとひ被成三益ありわか槍のすこきは身のこなれ武士役の二ツにて人のつかれをやすむるの仁はなしそれより不益也とおもふは詩歌也歌のかたはおもひ出るまゝをいふまでの事也詩の長篇などにかゝりては趣向を附て夫よりいろ／＼に穴さかしをする故に全の落しはなし也詩の結句と落句といふも落しはなしに暗合する也われこの頃言語概略二冊をしるして又其二篇を書かゝりたり夫らの類はうたの種本にておとしはなしの覺書のことし凡によく出來たるところ歌よみ也詩人も詩人歌よみの當時國家に益あること露なしわれらのする詩歌は小兒輩のおとしはなし或は素人狂言の下手なるにてみてもきゝてもなし夫にひまを潰すは水を御そゝき被成に見合ては筆墨に災するの害却多

ししかるをなせするといふにいにしへの人琴瑟をたのしむこれこゝろをして  
して娛することなければいやしき事にうつり行をふせく也われひそかに  
夫に習ひて遠國中は詩歌をたのしむ也是寸陰の教には背く也され共聖人  
もみななさる事なれば也都而文武の事此二ツにてみるへし武には一寸の  
ことにても益なきことなし文には無益なるか多也故に文を好みて國を弱  
することある也武にけかるゝの害多けれ共夫は大閣殿下の高麗の御いく  
さのとき事にて治世又は並々の士にはなき事也武程尊きことはなし  
にしへ無筆文旨にて國を治むる人まれにはあれと武をしらすして國を治  
めしことなし治世に別而專にすへきは武事也と申たり治世のこと武事な  
らては風俗救ふへからす文事にのみ流るゝと遂にはから人のことくに成  
て書にしるしたるより大ににわろき也故に遂に夷に天下を奪はれたり可  
恐事也うたのみらなと眞淵已來千年不傳流をひらきて眞淵宣長かことき  
ものいにしへにもなしされ共武のさかりなるころ行れし芭蕉其角などか

する卑俗の俳偕といふことのはしめにくらふればこゝろさしはおとりて  
からめきたり芭蕉其角らかことき氣韻の高きうたよみはすくなきかこと  
し可歎

○六日 晴 松平時之介家來に松平某といふものあり貸金出入之相手方  
也滯は蒲團二帖と損料を滯したる也凡松平を名乗る藩士に蒲團二帖の損  
料をかりて滯るといふこと苗字へ對し恐入たる也已前松平肥前守之旅宿  
札をふみ破りたる一橋の家來松平之御稱号をかるしめたるとの事にて死  
刑に所せられたり其人にあらずして御稱号によるるときはこの松平にても  
死刑になるへきやいかに其高を聞かせみるに表高四十石にてかり米其外  
にて拾五石はかり也といふ也されはふとんの二帖も滯るはつ也續日本紀  
天平八年五月己酉多治比連眞國等十人姓を賜りて周敷連といひたるなど  
今の松平をひら松といふ類にやたとへは朝臣といふは戸カヘキといふものにて  
姓に連續したるもの故に源平藤橘等の姓の人ならば從五位下ならずとも

朝臣と書てよろしきことなるには、かりて朝臣とはいはぬと申し松平の号など主人にてこゝろあるへきこと也。公儀にて松平と徳川の御号御差別あることきをもてもしるへし宣長は平朝臣宣長と書たるもみゆれと彼は法外ものなれば別也。

○七日 晴 八十九度の暑也七夕の禮を受ること例のことし○御兩所様へ御酒奉ること例のことしわれもけふは酒たへたり父上例の御機嫌にて庭中へ水を御洒なさる御醉故御あふなし女共うちよりてとりく御世話を申上る水をくむこと也われは例の筆をとりたるにいかなることか氣分すゝます詩一首を賦して早くよりいねし也。

二星相集ヒルノツク、オモフ夜轉憶故郷チホ深腸斷千餘里。魂飛万壘山ハカリハカレニ。揣量慈母意ノノヲルハイスルヲイタマシムニ。知倍側吾心ヲ。嗟嘆看雲漢サヒシク。悄然獨醉吟。

○八日 晴 一昨日與力羽田半之助か娘驚風にて引附忽に死す此娘驚風症元來ありて一昨年已來屢起る也醫師いふ少々にても物驚しては不叶と

よつて臺所までへ蒲團をしきつめて下女共のあし音少もきこえず舉家人なきかことくなし居るといふにて其寵愛も手のとくこともしるへしこのたひは七日醫つめ切也或は十日といふ類也され共不叶醫の説を聞にこの症ある小兒一度は治すとも再ひ三たひに及ひ必死すと也万一生たりとも癡人となるよし也。

○九日 微雨 八十四度の暑也○われこの頃おもふは我も新右衛門も家の中興之祖と少々なる家なれ共いふへしされは開祖の人に准すへしさてわれと新右衛門とをしてかく中興なさしめ給ひしは 行道院様の御骨折によること也され共千載の後其ことをしるものいかゝあるへき其時御龜末のことありては恐入たる事也何卒其事を永く傳ふために御位牌へ其ことを彫附て川路と井上の家につたへ度もの也はや盆前の魂祭のことするによりておもひ出てかくいふ也新右衛門了管承り度いかゝ幸三郎の家はもとよりなれ共氣遣ひなしものかはり星移によりていろくのことある

もの也おのふの親類書にて大に怒り其上ならにて十二日にうなきを買ふといふ論にてひそかに後世をおもひて記す也

○十日 微雨風 此ほとは將棊大に行るゝ也奥にてはおさとゝ父上母上もおさとゝ父上對マのたゝかひ或は一枚落也父上少々御つよし母上はおさとゝは二枚かた弱し表之ものゝはなしを聞に俊藏は初段なるへし與力に壹人俊藏位のものあり其外なら市中に夫より強きものはなしといふ也ならの諸藝みなこの類也

○十一日 風雨 昨夜去月廿四日附之書狀來る先以 母上様倍御機嫌克恐悦之至其外一同之御無事目出度候○太郎手習はしめいたし候由きらひには無之候由案外之事也 行道院様は手習御好にて書は自由に一夕のうちには御變被成たる也夫に新右衛門は似られたり予も彌吉も至之の手習きらひなるに且愚筆也太郎万一手跡の出來るならは必同居之故にて新右衛門に似たるなるへし夫に付るも人々の御厄介也○養生のこと被仰下候也

難有候三度の食事三はいと定め可申候由奉畏候朝は斷盥にて二はいにかきり申候毎朝目くすり齒藥の類を用ひ玉子湯をのみさてめし二はいに御座候○ひるめしは三はい一菜也夜食も同斷に御座候さかなは少々宛は給候得共七日の大精進廿九日夕々卅日の夜四ツ迄之精進等にて凡十日はかりはかつほふしも給不申候ならへ參り候也は七日ツ、泥鰯を給申候此ほとは別而魚類は無御座候菓子類はたちものも同様給候義は至而まれに御座候酒は中猪口にて九ツ位給候義月に四度位之義に御座候其外父上の御相手にて三ツ四ツ位之義月に三度位も可有御座候勿論十七日前後に魚類其外菜の物は七日酒は十四日の間斷居申候御武術の義骨を折申度候も出來不申候いまた市三郎位のもの六七人の相手に劍術は相成候間壹人にては市三郎の息きれ候計に御座候やりのすこきも減し候也毎朝千七百本すふり棒と居合刀に而都合千本曲尺二百ふみ申候右は近頃考候也三割はと減申候右より少候也は二十年來の事に付からだなれ候也汗もろくく



出不申候右之通いたし候得は晝飯はがつと申候而給申候休候得ははらへり不申候其外に臍下へ力をいれ候義十篇つゝいたし申候右故か腹はよく相成くすりは日々例の大せいに桂枝木附一ふくツ、このくすりよくからたにあひ申候醫の申候薬よりはいろく試候得共よろしく候○書物之義も御沙汰に付夜學は四ツ前までと仕候是をやめ候は、大病必起り可申と奉存候且たのしみに御座候私義ころの保養無之候は、一昨年頃はよほと煩ひ候筈に御座候余人に御引くらへ健にて御察可被下候灸事之義月々七日宛灸のケ所三十四ヶ所はしめ終りは八百五十てう中五日は三百四十七てうツ、居申候右に付此上之病氣は天命と奉存候七日の間あづきをも給申候以上は月々少もかはり無御座候○友野先生六月廿四日午刻御大病之由即日之書狀にて淺野中書より申參候廿日中書被參候處弟子のうち可相頼は中書と左衛門に付今一段わるく相成候は、遺言いたし可申候間參り吳可申と之事され共病に當り可申と存候間其内快方なるへしとて歸り被

申扱々残念と之事に御座候と申來り候先生は五十八九に可被成候をしき事に御座候宅に先生自筆唐明其外の詩選有之候右之序文は先生十二歳とかの御文とかうけ給はり候文化元年と有之候と覺申候先生より我らへくれられ候品に御座候この度淺野の文通之内先生に感服のことあれば左に記す也先生はわか十二歳歟の時大學より教をうけたる御人故に今に十分之異見等被申さて事をもらすなといふこと露なき御人なれば相談することも多かりしに其ことにこまり且かなしき也先生のことを聞て大にかなしみていふへくもあらずけふも相談する詩なとしるしたるに見はてぬ夢となりて歌も詩も出ぬ也さしあたり相談する人なしこれも大歎息也淺野書狀之内此間參り候節も病中の吟出來候とて朗誦被致候を傍にてしるし申候

性命託<sub>カ</sub>天<sub>カ</sub>身託<sub>カ</sub>醫<sub>カ</sub>體雖羸疾意安怡耻<sub>カ</sub>無勳業半張紙徒有間言萬首詩  
禱<sub>カ</sub>福<sub>カ</sub>神<sub>カ</sub>祇<sub>カ</sub>果<sub>カ</sub>何益乞<sub>カ</sub>靈草木未<sub>カ</sub>全瘉可<sub>カ</sub>憐<sub>カ</sub>簸弄英雄勳造化真成是小兒

勃々の氣紙に溢候事に御座候この節の義など案し只今にいたりては明哲保身など申候事は却るよろしからず且左様いたし候には眼前に引受候事にこまり申候ゆへ至忠を盡し少も忌諱を不顧方可然乍側容子を承り候に上にも足下に御傾注の氣色に相見申候只々何事かならさらむ何言か聽かれさらむと申候圖にのりて少も私術を挾候事有之候は以の外の事前軌の覆尤可誠この處しかたき所に處するは只誠の一字のみと被申候云々この所にいたり我も落涙いたし申候詩作と申弟子へ之教と申立派なる先生にて我らか幼年よりうけし教の程もわかり行道院様の師を御たらみ被遊たる事までおもひ出候る只々落涙と歎息のみ也先生の詩之豪氣なるかゝるへきをははしめてみたと申候位之事也先生温厚眞實にて幼年より大儒となるへしと被申たるは相違なき御人なれとも死前までもかゝるへしとはわれすらも知り不申候これらも淺野の深切にてわかり候人卒してのち碑文に溢美を書ちらしたるはとるにたらずこのケ條などは先生の

一生みるにたりて事實まきれなき事なれば詳にしるす也○都筑参り候る菓子なとくれ候由禮可申遣候○さかもと大越へ被遣候もの承知仕候大越之義は先便にも申上候○母上の御食事三はいにては御たり不被成候得共御こらへの由恐悦也母上よりはまたくわたくし事食事養生はよろしとて大に笑ひ申候庭のむた歩行いたし候様奉畏候まつ日ことに夕かたは池の魚へせいへいを私遣しおさとは築山の向へ行をし鳥にゑを遣し夫はたけを廻り池の廻りを廻り候得は三丁余に相成申候馬場へ参り候得は都合にて五丁はかりに相成申候夫婦市三郎にて庭を歩行候は日々のこと也雷鳴度々のよしならば雷鳴今日までに一度也乍去かやへ入るほとにはあらすはるかに聞しは二度はかりも可有之歎當年雷は至る少く候

○十二日 曇 新右衛門之書狀一覽候に母上壯年之ものも及び不申候程之御勢にて御佛参之由何より之恐悦也○新右衛門御用多之由目出度候右に付一之存寄申述候御用多之節万事落合候節山之上へ山をかさねたる

かことく攻來り申候其節右之御用にかゝり切にいたし候義以之外也其時は病氣ならはいかにせむと一步さかりて先ツ一時か半日も弓馬なとすへし右は躰の保養と思ふへからす御用向之養ひ也夫に而心にくつろき附候故に御用多之内ながら御用向に間違なく行也いそかしき時又は夕かたなと押あなすことに倉忽多しこれ小學の教の緩の字にて上手ならては出來さること也こゝを押あする故にこゝろの躰火ならば焦つき水ならば氷のことくにて用をなさぬ也度を過すより起ることにて畢竟器の小にして御用向を荷厄介にして眼くらむより事起る也火消人足の火の中にて遊ひをする位故にケガも少く火もけさるゝ也これは露等閑にするにあらずこゝろにくつろきを附る也くつろきとは甘といふ字にてくすりならば甘草のことし功なきかこときものにて大功をなす也其くろき一リン一毛のことにて行はるゝ也ゆるすきたるは功なし易に藉白茅を用ゆといふことありこれは人にたとへは物をやるにジカに地に置へきを白茅を敷てやるとい

ふ意也其躰今の御普請所のやはら蒲團のことき意也夫を以堅をも強をも自由に取廻すこと也これ一ツもおさとと氣のつきさる様にじり／＼とつめてすへき所を世話をやき茶などを吞する也右に而氣つかれすと云也われ仙石一件などの節無理に六七日目にはやすみて鍵を遣ひ又其出勤中もうたなとよみたるといふもこゝを不及ながら稽古するつもり也このこと母上并新右衛門も見聞されたる事今の脇坂にもしりたる人あるへし夫故に御奉公を苦にして煩ひしとおもふことなしさて今一ツはたとへは江戸の火事のことし火所多き故失火もある也これは江戸の火早きにあらず火所多きによる也○一枚に一字の書損をするものは人拙といはす五十枚に三十ヶ所の書損は人そしる也一枚の人よりは至而少き也御用多なるも又かくのことし其上に御用多の人の悪事を穿鑿すること甚しき故に別而間違多しと世にいふ也御用多の時は二度のものは四度ツ、入念へきこと也これはゝきく御役人のくるしきわけ也それはいにしへの賢人の悪事は

千載の末より穿鑿してまでもいひたかり惡黨愚人の聞へある人の善事を大造にいふにて御役人のつらきをしるへしこれを孔夫子は丘やさひはひあり過あれば人必これをしると仰られたり孔夫子にてもかくのことしわか過の少からむことをつとめて人のあしくいふにつゆこゝろをかくへからす○塩路新次郎はよほと嚴敷されたる躰也七日のしたくにて御國へ行たると也大坂よりことつてをなしよこしたり今は新次郎一万二三千兩の身上になりしといふ也この節奈良へ参り居る紀州の三山の役人は新次郎などの類にあらず公事出入之取次をなし古き證文を買歩行あしきことはいたらぬことなし元來は出奔もの也との風聞也これらか惡事を穿鑿せは夥敷ことなるへし夫かために民の難義甚敷こと也われよつて一向よせつけす近頃は絶而逢もせずむかふよりも來らす御用途金三山之御貸附正敷相成ならば万民の助かりかゝる陰徳御仁政はあらし宋の青苗法を王安石の用ひしかことし以之外之事也され共いつ方も下役へよく附届をする故

に行はるといふ也可恐少も油斷はならぬ也○貞五郎時太之事御世話忝候其内貞五郎は此度御取箇方へ不存寄行たるといふにて竹之内又は岡田の格別の申立ありしを察せらるゝ也兩所にはよろしく御傳言可被下候都筑佐々木は書狀差出申候○霞舟先生之病死歎息此事也當時聖堂にては佐藤捨藏につゝきたる人也其上に出役之若人などみな友野之弟子なれば聖堂にては用らるゝ人も可惜のかきり也○新右衛門之身上追々大造に相成に付段々之心附夫々よろし少も御油斷あるへからす至あくるしく貧人の御心得已前の御心得第一たるへし夫等之事追々しるし可申候衰の來るとき奢のきさし起るといふ教をよく守へき事也○鐘三郎養子至極可然候二百俵位のつまらぬ御勘定は三百石の兩番よりは樂なるもの也さて又三四百石の所へ可遣と之義御尤也

○十三日 曇 昨日一乘院宮坊官二條宰相來るこの男御殿へ参れはわか世話をよくする人も御門主之御用果て酒など差出す儒員二條宰相と懇意

に付呼に遣し順作席書をいたす宰相も夫へ讚の詩なれり儒員も同断也わ  
れも詩を一首うたを一首いたしたり墨梅へは

黄昏斜月後醉後歩江湄。馥郁春宵興。何言氷雪肌。

としるしまつに月のあるかたへは

万世の松にちきはくもりなき月のひかりもかけすくすれし

と記したり

○十四日 晴 なら人は三月より八月迄上下みなひる寐をする也右に付  
大笑ありなら人わか家來に御奉行様御氣根よしと承り候御ひるねは長く  
被成候哉短哉と聞たるよし家來のはなしに不快之外ひる寐いたしたるこ  
とは一度も見不申と答たるに再ひまで不審して問ひ返してさてく御ひ  
る寐を不被成一事などは別而及ひかたしとて驚歎せりと也大和一國みな  
しかり市中まで同じこと也孔夫子曾而宰我の晝寐を御叱り被成候て朽木  
糞牆の御沙汰ありしか大和にいらせられたらはいかにやなし給ふらむ聖

人は人情に随ひ給ふ御事なれば必御ひるねなさるもしるへからさる也  
○十五日 晴 この頃酒肉其外共に絶て飯のみ給居たりしにけふは中元  
也とておさと等かすむるによりて酒肉を用ゆひる後官邸のあつけれは  
一酔の後唐詩をよまむとして与風おもひ附て庭の山へ登りたり庭の山は  
家をさること百二十歩はかりあるへし高サは三間にはたらし上に貳間四  
方三間はかりなる平地ありて腰かくる料の板式ありそこへ唐詩貳冊頼方に來  
山陽か集をもち行たるに幸に風東北なるに東は三笠山北はさほ山をみは  
らす山なれば風の來ること船中のことし大なる松いくらもありて大なる  
は數抱數十尋なれば更に日かけを遮りとめてたまくとあたるもこかね  
を散したるはかりなれば更にあつからす山は辨天池と庭中の池との中に  
ありて池上より吹風いふへくもあらずすし扇をも忘れて頻に唐詩をよ  
み居たるに父上よりにはな賜りたりしはしありておさと市三郎來りて少  
は早けれどもこのすしさに夕飯たうへよとてもらひしさかなとり添

て下女はめしひつおさとは膳なととりくにもち來りたりしはし書見をやめて飯をたうへたり其涼しさいふへからすこゝよりは三笠山よりさしのほる月手にとることくみゆる所也夕かたまた書をよみて居たり夕日は辨天の藤かつらからみたる森にさへられて少もあたらす其上に風つよければ蚊も蠅も來らすよきすゝみ所なり其けしきをしるす

陰、綠庭中數歩、山古松錯落翠屏環、清風陸續先忘汗、恍訝身遊泉石間。

三笠山頭積翠風卷來、倒洒小庭中、坐間頻覺絺衣冷、拍手招來淡事ノ功

庭裡、綠池庭外、池假山中、立兩無遺殊、尤涼色來相映、鏡面ノ有聲荷蓋ハ、ハソノ

歌

斜陽午日隔遮全、別設九秋甕、大天黛色連山如呈媚、入看時立聳吟肩、詩をつくなど例の出まかせをいひし也この山にて母上も新右衛門其外も參候團樂にて酒のみたらはことたることなるへきに可惜こと也○元來ならの庭の松は古木多くして或は十間よりはるかに高さもあり又は六尺はかりて芝

法隆寺に  
聖德太子  
御手具不  
殘ア類は  
御茵疑は  
弓も疑は  
すも子の  
に太子の  
あひして  
り法華經

原にはひたるかときもあり或は池の上にかたふきて半は水にのそみて屈曲したるもあり其上にまつのみとりことによし江戸などにはめつらし赤松といふものは綠シヨウをもてぬりたるかとしこれは人々みな賞すこと也

○十六日 くもり ならの般若寺并法隆寺にいにしへの梓弓あり法隆寺の品はたしかにて徴とするに足れり聖德太子の御弓也といふ也左もあるへし曲尺六尺六分ありソリは五寸貳分上ハツ六分下ハツ六分五リ内九分五リ内の厚サにて巾は壹寸也遣ひしものとみえて弓弦のすれたるあとあり勿論白木也もと末に壹寸はかり塗たる所あり握邊には、六分壹尺九寸壹分とくへぎたるかことき所あり過ちにてへケタルにはあらずかくつくりたるもの也弓つるのあとにてみれば今の弓と同しくソリを道に遣ひしもの也弓力はしらねとも今弓よりも壹尺以上短かくて九分余あれは随分強きものなるへし和學者のいふかことくに今のことくにはひかす半弓の遣ひ

さまなるへしうたに起き臥しの縁語其故也といふ左もあるへし

○十七日 晴 八十九度の暑也此ほと所々の溜池などみなひあかりて大和は諺にいふ大和豊年米不食にて水少き所なれば用水出入之類多し○盆おとりのこと今は少し昨日大乘院殿より御附弟宮九御童形故大和ははしめてのこと故に盆おとりといふことありと聞召て近邊の町屋の子供等かおとるを御すき見被成度尤一乘院宮御幼年之節なと被召たる例多しとの事也其事與力へ内々御問合也とてわれにいふ故にいかにも小事也され共表向よしとはいはれす一乘院宮の御例は御改革已前の事也さて町觸之趣にては男女うちまじり大人の異行にいたしおとる事なれとも少年は不苦とはなしと申遣したりならはいにしへよりかゝることすき也古事紀記にも歌垣のことみゆ今の大和の榴市にておとりへ 天子の御子さまいらせられて女のたて引なとありし也其後 天子御覽のこと書紀にみゆ盆おとりの躰也

○十八日 晴 上かたのかこかき俄雨に逢て下駄をはきさしかさにてかこをかくもありといふ也夫にて關東のよしはらかこ並三枚といふか冬もはたかにてあたらしき雪をあさむくふんとしにて衆人の中を縫かことくに行をおもふへし風俗のことなること如斯其かはり門番か茶の湯をするなとつけあかりしたること也十人よりては四五人はうたをよむ也江戸の百分一もよくよむ人はなし大和中に直心影の免許と七三の勝負するものはあらしとおもふ也武のことはなきかことし關東の百姓とは大なる相違也武家の都とならぬところこゝにあり

○十九日 晴 一兩夜々涼しくして蚊大に減し月いはむかたなくよし五ツ頃より庭へ出て泉水のふちに所々に石あり其上へ座ふとん銘々もち出しにて月をみたりみかさの山に出し月かもといにしへの人のいひし山にて十七日ころの月松の間より昇るけしき絶妙いふへからすやかて泉水へうつりて銀のときさゝなみ立ていふへからさるけしき也泉水の中にも石

ありこれも上に居らるゝ也其けしきいふへからすよる用なき故に女も來りて月みるによりてはたけのものとれとて唐もろこしをとり來り芝原へ火をおこして茶を煮てもろこしのつけやきなどをしたりこの興何分酒なくしては佛つくりて魂をいれさるやうなれはとて我はとくりをもち來りて酒をのみたり北條かみその咄におとらす生か二本はかりの奢也され共われ月を愛することはなに過たれは酒も別段に味あるかことく月をさかつきにうつして呑はおのつから腸に風流しみわたるかことくにておもはずも九ツ頃になりたりおさときのおはけろくけふはこゝに來りて夜も人くとはなしなとしてうち興したりおさときのおふのひる頃は死人のこくとく人事なしけふはかくのことし眞の奇疾也

○廿日 くもり 久しくよきしめりなし南都は旱魃也泉水の水壹尺七八寸も二尺もへりたるへし大成緋鯉金魚之類行かたによりてみな尾を水上へ出す也水湯のことくになりて魚死するかとおもひて試みるに水はかな

りにつめたしこれは菱蓮河骨の類あり四方に大樹多く松かけ深き故なるへし芝地にある小池はみな水かれて魚死したり雨乞にて大さわき也  
○廿一日 くもり とにかく雨なしいかなることや○きのふ芝原の池の干あかりたるをみて一工夫を出し市三郎に堀らせみるにうなき土しやう出る死したるもあり死せざるもあり土中數尺の下にかくれて全にみゝすの如し○夏かけ所より書狀來る其内に母上の 一乘院宮より御盃被下蛸たるよしのうたのはし書を殊に賞し母上の御運のこと別段なるよしなど申來れり母上六人の御兄弟兩人の御父母御壹人の夫の御福をみな御ひとりにて御とり被成たることゝみゆこのころも小池の御叔母の御事をいろくくと申出て女ながら豪傑にはあらせられたれ共さても御運は悪かりし也われ廿五歳の時にて氣もつかす勿論人に貧を深く御隠しなされて御大病になりてわかりしことなといひて落涙する也われこの上の望少もなし只願はくは御養父母様并母上のことくにして三年隠居したしとおもへと



もとてもなるへしとはおもはず新右衛門といへ共同しこと也よつておもへはわれも新右衛門も母上等の御ために生れたることなるへしされは新右衛門われともによく養生をして長くいきて長く母上の御孝養を申上ること天意に叶ふへし

○廿二日 晴 一昨日道中並たよりの書狀とく備中守殿より御自書賜り不相替御懇の事に在在所出來の鐔二くみ被賜たり石河土佐の狀筒其外をくれて小かねの御狩のときの歌はし書など多くあるをみつからしめて越したり○土岐より書狀にては江川は西洋人にスコトロをなしてみせしよし也めつらしきこと也御旗奉行御鍵奉行に大病人あるよし也岡本なとにはなきやといたく案する也梅堂を先便申越候躰にては十一年前にたのみ置しおさとの楷書の手本を此節認居によく出來て不相替健といひしか其後いかにや八十五歳の極老故に案事申候

○廿三日 晴 此ほとこの早に米壹石に付九十四匁に成○七月十日曉御

認之六日切昨夜相届先以母上様少々を御中暑其外御一同を御無事目出度候○助藏罷出候由呈上之墨は百疋より十七八匁位を品也ちみ一反にてはちみ上り可申候○いろく御深切を御取計忝候右に付山家の題にて友かきを雲にむすひて花もみち散をもよその谷かけの庵といふこゝろをいろく修行するといへ共いろくのことを聞は心動きかちに

よの風のさそへる雲の絶間より忘れてはみる麓路のさとかくいひて歎したり乍去兒孫愚女其外を弟へ託し家はから明きにて母上の日々に思召すをも平氣にてこゝろの底より山家の躰ならは不孝か氣遣ひなるへしいかく新右衛門を了簡承り度候只天を畏れてつゝしむのみ也○御用多公事數多之次第相分り候○組頭格を通可相心得旨之被仰渡有之候由左もあるへし別御苦勞也○勘定帳を事御尤也○御用多之節こゝろを閑暇にいたし候義第一也其事別に記す謙信鍵前になり一寐入被致

謝安か符堅之百萬之軍を引受賭碁を打冠萊公か契丹と對陣宋朝之六合戰  
 之時に賭博大酒にて宵より熟睡されたるを神宗皇帝の喜はれしなとにて  
 知るへし子反か軍より歸りみたりに大酒して不忠になりたるなと、は似  
 て大に非なるもの也得と心にて御穿鑿之上御自得あるへし○御用多にて  
 時に寄歎息などは少も有之間敷候歎息すれば貧着する也貧着すれば暗く  
 なる也くらくなれば百事出来ぬ也つとめて不怠して少もいそがす樂みて  
 心を遊しめて御奉公を樂たのしなから細大共につゝしむへきこと也これ妙  
 所にて我いまた少も出来すされ共的はそこ也上手の的下手の的二品を以  
 人を教ふる弓なし躬を正して多く修行するものは多く中ことのみ○冑御  
 取入之由に而圖一覽いたし申候小生も此圖所持也作明珍これはいにしへ軍  
 記に慶長頃の人のいひし唐人笠之冑といふもの歎詭なりの類にて甚實用  
 也しころの類くさすりの類すね當鏡は御無用牛皮よろし明珍はくさすり  
 しころも革を不用鏡也今大に後悔すはいたても革よろし冑は決る鏡なる

へし且革葛籠など或は不鍛一枚革にてつくられて大こと也圖によりてみ  
 れは鳥居家所藏元祖彦右衛門冑之圖かと承り候明珍に御尋あるへし○御  
 用多之處日記忝候○われこゝへ來りしはしめは新右衛門幸三郎彌吉おけ  
 いおのふ新家よりも折々來りしに四年之内彌吉は死しおけいはわか勘氣  
 を蒙り幸三郎は例の等閑にて月に一度書狀を越し候へと申遣し候得共夫  
 さへに不來新家は御用多且不快之由にて暑中之呈書さへにせず今日記來  
 るものは新右衛門おのふはかり也始あらさることなしよく終あること少  
 しとはよくいひし教也歎息々々○廿二日の雷可恐ならば當年雷少し中よ  
 り輕きか一度かありし也暑八十九度のよしならば九十三度よる八十八度  
 朝八十二度位六月頃也此ほとは朝七十九度前後ひる八十八度前後夜八十  
 五度前後也江戸に見合て三度か四度ほと暑つよし大弱り也しかし當年は  
 輕きかたにて且大になれたり○廿二日之大雷驚歎々々途中之躰等何人か  
 驚かさらむ雷之事大評判雷に被打たる風説ありて治部など見兼來りたる

よし右に付世之評判等御心附御慎之由尤可然雷なればこそよけれいかゝの浮説常に多し御慎御尤也いにしへの人の有名の人の室は鬼神來りてこれをつかふといふことあり則前のこと也室は居間則奥のこと也奥の人の知るましとおもふ所を鬼神常に來りてみると也これ名のうれたる人にあること也とはいかにもおもしろし室の字下し得て妙也秘密のことほとしれ高名の人程人いろくいふ可恐のかきり也御心附御尤にて殊更に感服也故人の聖賢の論と同じ○雷之屢あるいかなることや○淺草邊四歳の小兒廿五兩之金を集ひたる一奇談母は感心也この類みな物の妖也妖怪とは化物にはあらずこの類也小兒の能書少年之よき官になりしなとみなしかり物の妖之内に御威光のある役玩器の高きものを買ふ人みな妖に化さるゝ也との論小學にあけたり茂兵衛か力なとも妖なるへし

○廿四日 はれ 昨夜より八十七度之暑也朝は少々ゆるやか也夜ねられす少々雨ふる忽にはれたりあつさいふへからす○此節穢多之甲冑大に行

はる京師かももとめに來るくらも同じ○別當之小兒二歳也大からにて大丈夫なる兒もおさと慰に呼て庭へつれ行たるに泉水の渚に大なる石あり其中に瓜位なるもあり其石を兩手にてもちあけてかた手にさしあけて壹間位ツ、投る也女共大に驚我も行みるにけしからぬ力也竹をもち騒歩行家來共之小兒みな大に恐れて逃るよしさもあるへしわれ棒を出せは聲をあけてたゝく也この兒よきものならばよしよからぬものならば大變也○われこのほと盜賊をみるにとしを聞其人となりをみれば半分はわかる也よき男にて十八九前後にて至而利口にみえ中間か士にして遣ひたしとおもふは十人之内に九人迄大賊也愚にして三十以上なるは小賊也このこと先ツは相違なしこのほと長吏か手先之ものを追々に六人迄切りて逃たる賊あり十九歳はかり也大坂にて被捕力三四人力ありといふかるき人の惡黨にて力ある役人の奸智ある才氣あるみな身を亡すの種也勇氣ありて上へつよき上の御ためをおもふなと危し可歎

○廿五日 晴又雨 御用日○前をつきていふ役人の鈍にみえてきれぬものよし臆したるかこときあまり實意ならぬあまり人の世話をやかぬ御奉公に深切ならぬよし小人にてあまり利欲のなきものに不溺人など別わわろしかゝる人御代官などにとすると大變を生ずる也以上こと意外のこと也され共皆から人のことにて日本にはなし御代官はからにては縣令といふもの也耳近くかきたる也

○廿六日 晴 蒸かこときあつさいふへからす遠雷あり雨かと待居たり少々つよくなるかとおもひ居たり近邊には雲なくて日はやくかことくに照せりしかるに竹を千本はかり櫟かことき音したりはしめは雷ともおもはず然るにけしからす鳴はためきて父上などは庭にいらせられたるかおもはず地に坐し給ひしといふ位也少しのひかりもなしされ共地響し障子などヒリ／＼といひし躰いづれへか落たるへし天のことははかられぬもの也大坂境など近頃の大雷にて十八ヶ所落しなと風聞する也ならは雷ら

しき雷一度もなし今日のおとはしめて也いかなる出し抜にや七八日已前はよる／＼す／＼しく晨は稽古着にてはひや／＼するかことくなりしか昨夜なとあつくて寐られすかゝること四五日也大雷か大風雨かするかとおそれおもふ也いかにや有らむ○昨日之公事五ツ之内即日濟口三ツ也奉行なりて利害のきゝめをしる也

○廿七日 晴 凡そ人よりものくるゝときたとへはわか方に用ありてくるゝはよく其心わかる也返しさへすればすむ也さては左もなくものをくるゝによつて來ることのしれぬは可恐こと也勢ひある人の勢なきもの存外のものなとくるゝといふは尤可恐事也され共大きくいふときは後醍醐帝崩御の後足利か大になけきで高野山へ寺をたてたる類に似たることありこれは其人を密に害して其跡をかくす也さもあらされは夫にて人氣をとるためにすること也又は釣魚に餌するかこときもある也され共人を害してあとを覆はむとするに氣をとくにおもひてするあり又再ひ欺か

むとするありよくこゝろすへきこと也餌する類用ある類はとらずし  
てすむなれとも害したるあとを覆ふためにするを人憤ることあり是小人  
に害せらるゝ也彼かたにて夫を以われを欺とするを其心實にあさむくか  
いかにと其證もあらずして憤るこれわか方にあしき也先キ方にて親切躰  
なるを忝く思ひて夫相應に取扱ひあるへき也人のこゝろのうちを察して  
することあるへからすこの方よりは先のするに應して隨へは敵をみかた  
にすることも品に寄出来る也夫に反するときは彼方にて害することます  
／＼甚し可恐事也それにのりて害せらるゝは愚也のることのらぬとの間  
にうま味ある也恐多も 東照宮を大閣殿下御馳走の時葵 御紋ちらしの  
かけ盤に御料理出たりとて深く御心配ありしと也 神慮は別段のもの  
也

○廿八日 晴 ある人のかたりしはいつれのさにか有けむ似合しき息  
子と娘のありしを媒人ありて縁談整たり夫を妬むものありて男子の方へ

は其親しき友たちを以そこの友たちの縁女は奇疾ありて陰門に夜叉に似  
たる齒おそろし氣に生居ると也夫を媒人のくち車にのせられて婚姻の整  
ひしとはいと／＼氣のとくのことになむとさもよしあり氣にほのめかし  
たり夫をきく男は正直物故にまこととおもひてみそかにむこにしらせた  
りむこはあの男のいふならはいつはりは露あらしとおもひてかにかくに  
考居たり前の妬む人娘の姥の親しきものに向ひてこのたひのむこは陰莖  
やゝ膝ほとあるよしを聞たりあの娘はいたはしきことゝいひたり姥大に  
驚てけふかく／＼のはなしを聞たりこゝろし給へといひしよし娘はいた  
く驚きたゝなきに泣て父母へも告す愁ひ迷ひ居て扱婚姻の夜一奇計を考  
出して同しとこにうち臥たるときに兩手をはまくりの口を開たるさまし  
てまち居たるをむこの方にては夜叉のことき齒をおそれてそつと膝をあ  
てかひみしに娘は果テと手にテくひ附たるかことく押たるにむこも聞し  
にたかはす奇疾ありとて終に不縁となり姥も親敷友もよくしりかたきこ

とを聞出してそれかためにいのちを拾ひたりとて多く賞せられたりと也  
このこと戯にまきれなけれとも不明なる人の奸邪にあさむかるゝ躰をい  
ひしものなるへし友たちの突合其外にこゝろ得となる也新右衛門など風  
聞きゝなるとに似たることありこゝろすへし

○廿九日 晴 先達而六日限と引分に相成候十日限之狀廿六日之夜相届  
く母上様倍御機嫌克恐悦之御事也其外之無事目出度候暑邪之御當り御當  
分にも御全快恐悦之御事扱わたくし有卦に來月八日には入候由にて段々  
之拜戴もの七富の御品々難有ことに御ふくさは 上之御きれの由御ふろ  
しきとも母上の御手つから御縫之由別而難有木性のもの受に入候由は陰  
陽師共々書付差出し候ひしか忘れ居候位之處母上の厚き思召さてく難  
有奉存候私も受に入候勢ひにて罷歸り目出度拜顔仕度御事也八日迄には  
其うたか詩にてもつくり申度と奉存候先ツ出まかせに  
ふた親とふたゝひふしのふもとちをふみこえて今かへるふるさと

といひたりおさとか聞てこのうた一ツふの字かたりませぬといはれて一  
向明からぬ良ヲットみなまてのたまうな五臟六腑といふからは七ふは一  
ツ過たるかいやくまたあるまたあるそふぬけやろうのうたじやものと  
のり地になつていひかへせはさても御舌の柔かさとおさとはあきれて引  
こむたり

福ふくといふふの字含ふふみて七くさのふかきもふかきふみの賜もの  
含万葉にふゝむとありコジツケにあらずといひて大に笑ひたりこのうた  
共追而改作之積

○晦日 晴 輿力のかたにて當才子二軒に死したり一人か方にていちこ  
を呼てくちよせをせしに藥違ひにてくるしかりしといひ一人か方にては  
祖父父母に先たつ不幸はかなしけれ共元來當年は父に大厄難ありて必死  
にいたるへしされ共わか死するによりて其難をのかれ氣遣ひなしといひ  
しよし夫によりて一人之方にては夫妻も祖母も日々に彌なき一人のかた

にては泣をとめてかゝる難をのかれし上はとて涙を忘れしと也梓女いろくの偽をいふ也生て居るうちよりこゝろに黑白をしらぬもの死してかゝることをいふへきの理なしされ共一人のかたにて患ひを轉したるは大わらひ也これにておもへは佛も愚を遣ふの一助なり大將の神を尊ふことなど捨られぬこと也

直に大坂へ  
暑をも不厭  
暑刻歸るな  
ありと烈士の風

○八月朔日 晴 八朔の禮受ること例のことし○去ル廿八日朝團野源太郎弟子壹人をつれて大坂迄來りたりとて安否をとひとして來るならにて劍術遣ふものあらは遣ふへし槍遣ふものあらは遣ふへしと也われ源太郎は度々酒井先生之方にて逢知ル人也世話してやりしこともある也わか等之藝にあらず當時之上手なるへしされ共われと今遣ふときは彼必四六七三の勝負をおもしろく拵てする也おもしろからぬ事也さて與力并寶藏院をはしめとしていひやりたれ共壹人も遣ふものなしこよひは泊れ久々に

て酒くまむといひたれと遣ふ人なければとて直に大坂へ歸りたり目錄をも遣しひるの食事なとさせて歸したり源太郎は藤川にて長崎の人試合に來りし時病氣なりしか來り遣ひて大出來をしたり夫は三十年はかりにもなるかとおもふ也よつて聞たるに其時十八歳也といひき間谷精一郎と源太郎と似たる直神影の遣ひ手なれ共源太郎の方さえてするとし酒井先生のさかりの頃岡本冲之助十六歳之時精一郎と源太郎を見事に遣ひて七三の理運也遣ひ直しに來りて又しかりよつて免許を十七歳のものになしたる例はなけれ共別段のわけにて十七歳の時免許の格になり十八歳にて免許になりたりされ共冲之介は二十六七之時發狂して全快はしたれ共其後は冲之助と源太郎の遣ふを二度みたるに七三位にて源太郎いつもよし冲之介病氣なくはよき遣ひ人なるへし夫故か三十にたらずして死したり冲之介發病前はわれ遣ひみるに袋のものをとるよりもやすくわれをうちたり病後は十本なからうたるれとされといたく骨を折たり夫たけに冲之助

下りし也

○二日 雨 ならの寺院の禮受ること例の如しきのふは出入町人其外貸附支配之町人ならの重立町人也○きのふは八朔故に御兩親様へ酒奉るわれば例之通書をかく故に中坐也一乘院宮へ奉るうた其外數十枚を記したりくれ頃奥へ行みれば父上は例の御機嫌にて女共惣かゝりにていろく御取はやし申上る也われも又酒二ツ三ツのみたるうちに与風 行道院様の御不運のことをおもひ出てなみた頻に落て禁すること不能夫故に無余義庭のうちに薙をしかせてそこにてひとりすゝみ居たりかゝることあることに酒席なから必なみたの出て常也あゝ行道院様はおもふ也此こと遠國へ來りてますく甚し母上も同じ御苦勞なれとわか結構を御覽被成今はなれてはいらすれと新右衛門又さかりにて所謂日の出の勢にて夫と御同居なれば案事なし夫故かかゝるとき行道院様をおもひ出すにはこまる也行道院様其外之御様子をするものは母上新右衛門の夫婦幸三

郎も少々は知居るなるなるへしおさと其外にいたりて其ことを聞わか躰をみて辨さるにはあらねとも百聞は一見に不及といふ論にて其むかしのことを見たることなければわか落涙なるとすると只々氣之毒にのみおもふさま也今兄弟三人御取立になりしはみな行道院様の御かけ也實は川路も井上も中興の柱礎とならせられたるは行道院様なれとはやわれら兄弟の外おちへなどの外は其味をしるものなし大に歎息すること也

○三日 晴 昨日之雨にて少々冷氣也○けふは遠方之寺社并奈良廻り之名主共等禮に出る居間之禮は興福院其外也多武峯初瀬等には相應之僧出るなれ共有名之天のかく山或は三輪等之てらくの僧は所謂いも堀にて般若寺などは十八九歳之住職也僧侶もいたく衰たることをしるへし神主共は彌甚し全百姓のことしふるの社みわのやしろなどはふるきうたなどにて見れば大造なることにてふるは日本神社のはしまりにて神劔等も御納になりし所なりといふに神主共白木綿のさし貫淨衣などにて烏帽子は



かふり中啓かもてとも中啓のとり扱さま閻魔の笏下女のすりこ子のこと  
くにて尤笑ふへし神主共足袋もはかすして手足はインベやきのことし農  
業出精とみゆれとみな無筆かとおもふはかり也いにしへの人佛は儒の精  
をぬすみ神道は儒の疎なる所をぬすみしといふ左もあるか也神代卷と法  
華經にても其ことをおもふへき也○けふより興福寺にて相撲あり江戸よ  
り鏡岩其外御用木等來る大ににきやか也金主は勝南院に在り内實は奉納也  
といふ也

○四日 雨 御用日興福寺にて相撲之日々々稽古所に一乘院宮の宸殿と  
いふところの御庭を御かし被成たるよし也そこは上野ならは大廣間とい  
ふへきところにて御庭に梅と橘の木とあり夫へ相撲共參り日々稽古す  
る也内實は宮御透見のためなるへしかゝること關東了簡にては驚歎する  
也上野の大廣間などいふ所は小普請方などの外雜人はみることもならぬ  
所也それにて其余しるへし○八朔に宮春日へ御參詣ありて御歸り懸相撲

場御覽ありしに相撲共不敬ありて大に御怒也といふ也

○五日 雨

大日をおかむて酒屋なきつける

といふ川柳あり是はならの菊屋とか大佛願かけしたることにてもあり  
しかさても川柳はわからぬもの也人のはなしを榮吉か聞しとて以前いひ  
し也其時書物よりもわからぬとて笑ひし也

神よりもとも佛の願かき

これも其時のはなし也され共これは日蓮一向の人のことなるへし日のも  
とは神國也神より佛のかたきくといふことやあるもしさもあらは可歎事  
也とて大に論したり大神宮と大日は一躰なりとは 欽明天皇已來佛法わ  
たりてのことなるへし學者風にいへは右々如くなれ共乍去後世本地佛と  
いふもの出來ては必一躰ならては俗人を取り廻せぬこともあるへし日光  
其外にも御本地堂あり

○六日 くもり 七十一度之冷氣に成○われけふ市三郎へいろくのはなしにわれはしめ友野先生に隨ひて石河土佐守方へ行しときは同人は十四われは十三かと覺たりそのとき土佐守は金之助といひて七言絶句などならへたりわれも同じ刀術としても中野樂山先生に隨ひて石河へ行たり其時に土佐守をみてさても伶俐の人もありけるよなかゝる人御目付などにならわれも隨ひて身を建むなどおもひて戯に夫らのことを小兒同士にいひしこともありしかわれ大幸を得て同席とはなれり夫を以汝をみるにいま十八歳にして志の立ところ更になし人のいふにまかせて馬士に隨ふ馬牧童にひかるゝ牛のことし人は志の立といふことなくてはならず嗚呼汝かことき終にいかにやなるらむといひてことまことになりて不思涙數行くたりたり行道院様の御骨折にゐわれら兄弟迄は御大恩を荷ひてかくなりたれ共はや御孫の代にならほみなしらみを拾ふへしこれみなわれらか不徳のつむところ也といふて大に歎したり新右衛門いかにやおもふ

いかにやいかに

○七日 くもり又ははれ 昨夜風雨泉水二寸ほとますされ共大鯉の尾なを少々みゆ○おさと又けろく也此節の時候左もあるへし○此ほと江戸相撲來る故に近國のもの迄も見物にくる也故に日々に百兩余之動き也といふ木辻町なども又にきやか也といふ也この位のことにて増減あり○八日 晴 昨夜の暑再ひ暑し今日八十八度也驚たり○けふはうけにいるといふことにて母上よりの御沙汰に付大黒天へ被下之七富のものを奉り家來其外までへ酒など爲給たり勿論兩御隠居様へも奉ること節句などのことし七フの詩

父母窮勞苦敷陳教誨遍武傳三略牘文受四書編服職今榮祿撫民也施錢  
富餘皆惠澤祝壽万斯年

右にてなふとなれりうたは却あ六ヶ敷候

富士のフもといもとせフたりふた親とふみてやすけく歸るふるさと

ふるさとへかへらむフミのフデとれとこゝろフ、めるフはこフミつゝ  
とよみたりおさとは

ふる雪にふりすふりせすふかみとりふかき松かなふしのふもとに

とよめり龍介は

冬深くふるしら雪にとしふりし古る枝の梅のはなを布ゝめる

又よみ人しらす

ふるくさきふるやくしるへふる陰門をふりはへよはふふりまらふりゝ  
とあり龍介かうたおもしろしふの字をことさらしに加へさるかことしさ  
れとよみ人しらすの万葉躰のふりまらふりゝとあるは實情ふかし歌合  
ならばこれや勝なるへししるへといふにやみのこゝろみえふりゝに其  
姿をこめたりおもしろきうた也こは誰にやあるらむうた主きかまほし或  
人の語りしはならわたりに行かよひする旅僧也といふ故にそは疑はし僧  
侶のうたとはみえすといひしにそは日のもと學ひの廣からぬ故に其うた

かひあり既にいにしへの東うたに坊さむ夜はひはやみかよひとある本文  
のあかしいとゝいちゝしるしといひきしからは旅僧かよみしといふ説  
まことなるへし

○九日 晴またくもり むかし李義山といふ人殺風景なるものをいろいろ  
ろあけて彼琴を焼て鶴を煮るなどいふことをあけたるうちに松下喝道と  
いふことあり喝道は聲をあけて往來人を叱りとめ或はいらつていふと  
きなどに遣ふ所謂大喝一聲などいふ類也夫に大笑あり春日祭の時なら奉  
行のかため居る所を松の下といひて並松のある土手の上也そこへ武器を  
ならへつめ居て前に金棒を同心共持居也なかゝ喝道とこのさたにはあ  
らす也今いふはなより團子月よりさけなといふも殺風景の後篇なるへし  
十五夜の月はいかにといへは酒の肴の相談とおもひ其けしきはいかにと  
いへは坊主あたまのはけたるよりも光りありといひ廿六夜はいかにとい  
へはたち賣の西瓜よりもあかしといふ類實に世にはあること也月はいつ

地へいりけむみる人もなく中空にすみわたりたる頃は踊りくたひれていひきの聲のみなる類なと世に多し已前其ことを對句にして

四合紅塵多狎客。一輪明月少幽人。

といひしに友野先生より江戸もまたしかりとて嗟嘆の評ありきなら人は江戸人より風流の氣はあるかことくなれとやはり同じことゝみゆ

○十日 くもり 供頭柳助狂狷の遺風ありいろゝおもしろきことありきのふの古今集のことをいふ故に今世にある古今集のうちによき本といふものは北村の八代集抄契沖か余材真淵か打聽本居か遠かゝみなど板本の類にてはよかるへしされ共諸説まちゝにて夫はまたよきなれと本文に互に少々宛誤字あり打聽などにはてにはに拘るところに誤字らしきものみゆ右等々集注をつくらはよかるへしなといひしに例の流義故に真淵か説等を打合みれば紀貫之はうたにはおもしろきことあれと古今の序のさま貫通せすいやはやつまらぬ筆なりなどいふ也夫にてはなしはやみし

也よつて市三郎等にも相構へてつまらぬこと賢くいふへからすと申聞たるかよくおもへは誰も聞てつまらぬことゝおもふことは身に害なき也つまらぬことをいひて害あるは少しつまらぬことにあらすとおもふ十人か六七人尤とおもふこといふと拾にして七ツ八ツ害あり先ん見の明なることなといひて國を患ふるの類尤害ありつまらぬことのかきりなれと今日はやき天氣さようゝなるほとゝといひてはてはわらひてしまひ或は害にならぬ女のはなしなとする實のなきことに少も害なしよく世をわたるつもりならはつまらぬはなしのみする方なるへし天地ひらけそめてよりつまりたるはなしをされたるかきりは孔孟なるへけれと世の人まことゝせぬ也孔孟さへにかくのことしつまらぬはなしこそよにめてたきはなし天氣のはなしと御尤さやうと云ほとつまらぬはあらねと遂にそれにて害あることなし多くは徳ある也

○十一日 曇 前にいふことにて詩あり望迷官海濤千丈これは御役人の

つとめの大なること海のことく可恐こと浪の千丈なるかことをいふ歩  
困世途險万端よのなかのつき合はおそろふこと險岨のみちのことしそれ  
はいかにといへば腹裏、金湯潜蓄愠これは人によりてムツとしてはら立こ  
とをばらのうちにいろく六ヶ敷ことある人はよくひそめ置也愠の追込  
たるは發するとき甚し金湯は金城湯池のこと也李林甫といふ奸人腹中に  
城廓ありて何事もよくかくしたるといふことあり笑中刀劔暗磨寒これは  
人のしる笑なからいつか刀をときて居るおそろしき事也瓦雞不患燔烹苦  
世に陶犬瓦雞とて其役にありなから役にたぬ譬にひかるものなれ共  
瓦雞をもてくらしたる人に烹らるゝ害なし芻狗多看屏黜歎芻狗はわらに  
てつくりたる狗也一旦貴人の前へ出て直にすてらるゝ也精靈の馬の佛旦  
まであかりて直にすてらるゝかことしからの故事也かくあるよのなかな  
れと百鍊經來精粹、能居ヨキアシキ、臧否事彫鑽よき鏡を鍛たるかことき人はよきも  
あしきも平氣になりて夫にはかゝはらす身を治めみかきて居る也あしき

時によく動かすして居る人は大事か出来る也

○十三日 雨 七月廿六日附之書狀昨夜相届先以母上様倍御機嫌克其外  
一同之御無事目出度候○神代徳次郎出奔いたし手當之義十日はかり以前  
京都之目あかし之頭々當地之長吏へたのみ來りて驚歎いたし申候而殿敷  
手當之義尙又申渡置候義に有之候其節申候は御預もの出奔いたし候義有  
之間敷には無之候得共第一に衣類と金子にこまり且は足もねあしに相成  
居候間逃去候も三日に不過して不被召捕候これは金子等之くり廻し出  
來候義何歎子細可有之候さて異國之義御世話も有之候砌これらのもの出  
奔いたし候而不被召捕候は御取締筋に拘り候義と大に歎息いたし且は  
疑敷おもひ候而別而入念穿鑿之義申聞置候○加賀に異國船渡來之事風聞  
之如くならむには勇壯に候得共乍去可恐之至其上に加賀之武威近頃かゝ  
る程之義如何あるへくや十にして九はいつはりなるへしかゝる事に美事  
に似て可患事あり○搯新之一條詳に承候然ルに内實は山中筑後病氣大切

之風聞有之此男壹人に取廻し居候間跡必もめ可申候且風聞にては新次郎事何之科にてかく被仰付候哉罪之次第不分明に付冤罪をすゝきたきよし彼等か輩千余人申合候其内十人はかり兩三日已前紀州出立江戸へ罷出候由可疑のかきり也右之はなしは當地貸附所を出しことのことく聞ゆる也○森田岡太郎之申聞候趣尤に有之候右は書面爲取替候相定可申候委細は民藏より跡書入可申遣候先生之御かけにて心を養御奉公をもいたし候恩人之跡故いつれにても宜候

○十四日 曇 昨日紀州より奈良表御貸附之取調として御家來御差向有之候由に右之序時候御尋として銀壹枚被下之拜受いたす右之御使は當所熊野三山之義取扱御家來並之如きもの森下孫兵衛也同人御用濟之上に話に大坂に塩路新次郎に逢候處宜申上吳候様申聞ならへ見物として罷出候義可有之左候は御目通いたし可申上旨申聞前にも記す通之義に付不審に付夫はいかにと承たるに元來新次郎は御領分之百姓に弱

年之節江戸表の出候もの之處与風内御用向之御使に被召れ同人取計に熊野三山御用途金等之義も出來候義にて右之御用向三十九年相勤候由御用途三山共に紀州御手元よりは内々は一金も出不申候處新次郎取計に紀州御領分之もの出稼之面々可申談八千五百兩之講金をこしらへ右を元手に當時右之金十三万兩余出來夫に付年々紀州之御金藏納貳千五百兩宛献上金二万三千兩とか有之候由右は新次郎之くり廻しに有之候處右に付不正之筋は無之候處今般江戸表におゐて与風新次郎宅宅番附夫七日之したくに御國被遣大御番組入二百五十石被下候由然ル處新次郎申分には何之科に被仰付候哉同人は百姓之義に付一字も不存候間其譯承り候様御書取被下度右に付は二百五十俵之祿は難有候得共無筆同前に弓馬はさら也刀拔さへもしらすかゝる士を被召抱候は御不益に付元之百姓に被成下扱又罪之次第を承候而安心いたし度と之事に不正如正はこれにて御糺相受度由之旨申立帳面其外共ことく差出

し候處有金證文金二万三千兩余其内六千兩余は金子に而持越候由諸道具  
江戸表へ差置候分三十長持を省紀州の船廻しに分九十五さほはかり之由  
右之金子其外いつ方を到來いつ方を利分利益と申義悉しるし有之一位殿  
一位に御昇進之節内御用相勤候御褒美として御手元より金三百兩被下候  
をはしめにて夥到來もの之由この度大番入いたし候ひろめとして相番之  
もの之遺ひ物もらひもの故御心置なくといひて三十長持四百五十人之  
相番に遣したりよつて相番之ものにはかに徳つきてあきれきりたるよし  
其余之義も右に准したるよしさて一位殿は新次郎はさらにもいはす家内  
迄御目見被仰付候處御直に新次郎は何故に歸りしやと御尋に付思召に付  
御國勝手被仰付候に而罪之次第身に取覺無之由等申上候處一位殿深く不  
便に被思召一向に御承知も不被成位之義に付新次郎さそ難義いたし可申  
候間早々しらへ遣し可申旨之御意有之前之大番之面々は新相番之新次郎  
不届之始末承り度旨四百五十人連名之願書差出候由右に付和歌山と江戸

大もめ出來候由に而江戸に而いろ／＼申來候得共筑後守は持病不出來に  
付右之廉を以取敢不申彼は大混雜之由扱新次郎は屋敷をも被下候處元來  
百姓之望に付屋敷は御斷申上候而しはらく休足之義相願候處一位殿御直  
に御聞濟に而久々江戸詰之義に付所々遊覽いたし候様と之御意に而六十  
日之御暇被下候由其外品々相咄候得共覺不申大意前のごとく其様子を察  
する所江戸御家老と御國之御家老居合方なとよりかくさしもつれ候哉若  
山を江戸に而かろしめ候間六ヶ敷なと、もいひし也右之咄いたし候孫兵  
衛は伶俐才辨あるものに而新次郎之類之下等なるものに付咄之趣夫々實  
事とおもはれ不申候得共新次郎跡役之ものなと新右衛門方には參り候  
間御用心之ため記之御油斷被成間敷候おそるへき事也よき序に付孫兵衛  
は爲申聞候は右之新次郎と拙者十年余も突合いたし候得共つゆほとも味  
ある御はなしなと決而無之右は新次郎に御聞被成候得はよく分る也さて  
新次郎も並ならぬ男故歟御用途其外之御用は持參御使相勤候得共夫に付

公事吟味物外之たのみなと一度も被申たることはなしさて其義は感心いたし居候由等申聞遣し候

○十五日 晴し月よ 市三郎太平記をよみてアへの宗任かわか國の梅のはなのうたをみてあまりの公家衆也といふ也われいふ太平記に劔の巻といふものあれと参考太平記には省きてなしこれ劔のまきは保元物語に添ふへきものなれ也脱アルカさて梅のはなのこといかにも今の世よりはをろかに聞ゆれとももと梅はからよりはしめて筑紫へわたりたるものにて烏梅ウメといふ薬品をはなのよきものなれはめてられたる也今も蝦夷には梅なし夫故に奥の蝦夷のことく公家衆のおもはれて宗任にとはれたるなるへしこのうたにてもいにしへ東北に梅なきをしるへしされ共劔の巻はもとよりとるにたらすこのうたを用ゆるならばよく糾下し用ゆへしといひ聞せたり大なる竹梅菊など人の植さる所にはなしこれ元來日のもとに元來なきものなれば也竹のなき所は今もある也越後出羽などにはなしときく也

○十六日 くもり ならば魚類高くして夏はウジなければあたらしと人おもふ位の土地也よつて玉子やきをする也玉子やきなへ一ツへ玉子七ツいれて夫を厚焼にしていまた中は水氣あるかといふ位の時食れば味よし一なへの入用百十六七文はかりかゝるへし夫に付おもふはわか幼なかりし時に病することあれは母上のおりく玉子やきをして給はりき夫はなへは別になければあかなへにて玉子一ツを昏のことくにやきて菜きり庖丁にゐはしより起してまき玉子とすること也き御徒之御身上といふものはかくならてはならずしかるに今は百文はかりの奢かといひて女へ申付れば直に出来る也され共御辛苦之内に被成たる母上の玉子やきのありかたきこといまおもへは筆にもつくされすされ共母上の御健にてこれらのこと御聞にいれらるゝは難有こと也とおさと市三郎等へ申聞せたり

○十七日 晴 けふいろくのはなしに今の柳生伊勢守之實家安藤家は有徳院様の御子也寶曆の頃彈正少弼とて御勘定奉行也今の柳生は 有徳



院様の御ひこにあたるへし御母は紀州にて至る輕きものなれはとて天下をしろしめしたれとはつか千石余に被成たるはかり也御嫡子様は 惇信院様其御兄弟は御三卿かたの御元祖也大と小との相違こそあれ市三郎なと庶子のことなれば二百俵の十分一二十俵はかりの 御目見以下へ参り十二分なるへししかるにならへつれ來りたれば與力はしめわかさまといひて殊々外にもち長する也其上に食物などおさとあまりに愛してわれと同じくらいひてもきかす己か可食ものを病にかこつけて不食して市三郎へやる也市三郎はらはひ出しなれば平氣也以々外なること也おさとはいかにするとも市三郎心あるべきことなれば夫らのことを教諭したり常にいふ親は無理なる方よし堯の御政事の御行届にてありながら替腹かおのれの子彘を非道にするに父を御叱り被成たることなし二十四孝を親多く無理也され共親の不慈をいひたることなしされはわれも無理なることあるとも少も口返しは勿論心より尤とおもひていか様とも取廻すへ

しこれ市三郎をみかきでやるの道理也親のかたにて彘の親につかへ給ふことくに子をするは小人にも多けれと其子みな惡黨となる也可恐事也このことを常に市三郎に申聞する也子へ對して少々無理にひど過るといふかた不便かるのかきり也○けふは父上法隆寺其外立田の邊へ御出也御供は用人俊藏給人貞助侍内藏之介其外足輕中等也勿論陸尺四人にて御駕也御辨當所は松尾山之毘さ門也法華勸請也といふ

○十八日 くもり きのふ父上は松尾山より法隆寺へ御まうてにて立田川のもみちまた早けれと御覽の積なりしか夕くれになりたりとて立田川のもみちの御覽はあらず御歸り也六半ころ書をよみ居たるに押の足輕歸り來りて御歸り之由をふるゝによりておさと其外女共みな奥の茶之間まで御出迎に出る當番の用人給人共は内玄關へ御出迎に出るほとなく御歸り也勿論われも茶之間まで罷出るみちすからのたけなと御慰にとらせられて御土産に給はりたり松尾山といふは郡山より二里ならより三里也人

烟をはなれて山上十八町の上にあるてら也いはゆるくもより奥の山てらにて清僧修験の住持すると也定めて猿のとき僧侶等とおもひて父上に伺奉りしに住持は留守にて弟子の出ているく物語せしと也かゝる山てらに何歟樂しみあるかと御尋ありしに浮世はなれてとひくる人も候はねは六時の拜讀經のひまには住持ともに笙をふきてたのしむといひしよしそれによりてみれば樂器のとり散して座敷にありしよし大江戸よりいらせ給へる御方く御慰に御覽にいるものとはこの山寺には候はず雨の夕くれの雲のたすまひ雪のあしたの銀世界貪らすして白かねの山の上に住ぬるかとおもふことなどは又都にはあらし庭の觀月臺よりいつるよりいるまでの月をなかめてあくまでにみ候は高き所に居てみはらしのよき故に候かいたまた午過るこの御入にて一として御慰にみせ奉るものなしなかくにとりのかしましく啼候もさひしく御き給ふらむなどいひて園圃の芋などみつから堀て御辨當の菜を助け參らせよし也我其こと

を聞いていふことの葉のさまみなよしありけ也山の奥の猿のことくなる法師ならむとおもひかすめてをこなることいはむには大にはつることあるへし人はあさむかれぬものよとて大に感したり

○十九日 くもり かゝや助藏江戸へ行てのことを聞に江戸の町を歩行に空腹ならぬ様にする也少にても足をやすめるときはいくたひもそばやゆよりて一盃ツ、そはをくふ也又ひるの内に湯屋へ行てやすむ也決水茶や茶つけやへよらぬこと也水茶やへよると三十二文はらふ也其三十二文にてそばを食あしをやすめると空腹にならぬ故にめつらしきものをみても食たくなしよつて少々はらはりたることくにして歩行也湯に入八文にてひるま汗を拭ひすゝみて歸る夕かたは湯にゆかす衣類の紛失喧嘩の患なし水茶屋より二十四文やすくしてくたひれを去こと大也これとしく江戸へくたるなら商人の傳授也と家來へかたりしと也なるほと尤なること也われこの工夫は江戸ものなからしらすりし也助藏は宮方の貸

附をなして墨の職人三十人もうちには置なからかくの如し上かたの人儉なることおもふへし

○廿日 くもり 西國の高橋翁へ唐筆の唐番半切位にかくよき筆あらはほしきよし申上たるに今日書狀到來して五本被下たり至よし左助殿御不快もよほと御快よきとみえて御文通近頃になく御ふるへとなし右に而少々安心せり筆筥を出しみるに大小合而二百本はかりありわか一生涯はあるへしとておさと笑ふ也われ云刀劔を好めはかなりに骨きる、刀もありかれこれにてこの地へもち來れるはかりもよほとあり甲冑も四五領もわか着料のみもち來れりさて又文藻のことをなさりしかは印章などいふものは絶而なく以前はみな彌吉に遣したるに近頃書をかくとて新右衛門又は佐久間修理其外の人々より印をくれていまは十はかりありかく好めるもの出來といふも君と親との御恩也報恩のこと忘るへからすと自ら誠たりと咄なり

○廿一日 雨 惣年寄今日歸京之旨届出る女共まで其たよりをたのしむ也この情遠國は別段なるもの也○けふ太平記をよみて楠が討死するにいかにもすらくとしたるさま實に天下一人なりいかなれはかくとて頻に感歎せしにおさといふ女の申は恐入たることなからこゝろの底西行か世を捨しともしさまなるへければかくあらむといひきおもしろき説也役人の手本として可學は孔明楠也此二人は書契已來の人にて其智謀雄略は學ひて可至にあらず學ひて誰もいたらるゝ所あり孔明は卒して後桑八百株をうゝる田地の外家に子孫にのこすものなかりしと也八百株をうゝる田地二分分に過へからず子孫にもものをのこすは當今の役人は居屋敷一ツ大小二通り馬具一通り甲冑一通り雜兵具足侍二人中間三人分夫にかきるへしこれは我二百俵の兩御番筋の家となりたる故也其外をのこす心あるへからす以上のものは高作ならぬ實用をのこすへし孔明はからの人也日本人は今慶安の御軍役御用ひにて其末文に武器用意のことあれば也鍵二本

番刀など二三本もあるへし以上の品實に御軍役に用ゆる積にて奢をなさねは少々の入用にて出来ること也さて楠の可學所は天下を足利之奪として西國よりせめのほりし時實をさけ虚をうつ妙計を申上たるに朝廷にて御用ひなかりしかは世の中をおもひ切て子に忠義の遺言し新田義貞に軍の心得を申のこして打死したるに露うらみなし臣として可言はいひきかれねは夫迄也とおもひ切て己か一分をつくして少も不爭愚なるかことしされは役人も可言ことは己か一分をいひてきかれぬときは少もいからす少もうらますして忠義のこゝろをみかくことなるへし夫さへ出来れば楠孔明か業はならずとも心は得たるなるへし夫は相手のいらぬわれ壹人にてすること故にこゝろあらは出来るなるへし楠孔明におとらぬ人は後世にては 東照宮の御老中大久保忠隣也

○廿二日 晴 惣年寄へ御渡の荷物来るひらきみるに八疊敷へ一はいありおさとのよろこひ大かたならず下女共まで己か宅のことを一年に只二

度きくことなればよろこひとかなしみと一度にて半時はかりはいつ方も無言同前おさとの居る所はふみと封しかみにてかみくすやのことし先いつれ封をきりて夫より一わたり大意をよみ又一段とよむこと也當分は書見となし先以 母上様被爲初其外之御無事目出度候母上様も御機嫌よろしきことは御書躰にて相分り安心仕候いつもく御實情なることにて落涙仕候この時は不思歸と詩などにはつくりていましめ候得共忽に歸り度相成候何卒一刻も早く歸り候而母上の御顔奉拜たく候○新右衛門書狀之内市尹井戸大内藏相成候由左もあるへし御尤之御事也牧志摩の轉役は間違之由は家來之追書に相分り申候さて筆夥被下置候即遣ひ試候處よろしく候此ほと前に記す通り筆夥出来候間先ツ一兩年はふては無之候而よろしく候これも御恩に御座候中字かきも三十本も可有之候其外いろく御贈物かたしけなく候新論と申候書御惠かししけなく候昨夜一讀いたし申候よく出来候而其人をもおもひやり候事に御座候一躰の學派かの 皇

朝學と申候ものにて水府流に御座候右之書は可取ところと取らねぬとこ  
ろ多く候其内取られぬかた多く候此書をみても經濟の書は第一に文章め  
きて記し候ことよからず候第一に役人によめ不申候徂徠か政談をひらか  
なにて記し少々の字へもかなをつけられたる自書をみてよく世の中を  
みられ候事と其頃感心いたし候事に御座候右の書に句を切置申候入用に  
候は、御申越候へ返上いたし可申候都而儒者の書の經濟をかくに役に立  
候ものは無之候其譯は祖宗の國を御建被成たるはかやうに付根本はかく  
く、也さて今のすかたはかやう上下の様子はかやう也年は亂より何年經  
たり此位の時はかくいたすへしとの論はなし第一に後世よりわるくいは  
るましと理兵法をきはめたるもの也夫故に事實はなしこの書の意先ッ人  
を死地に置いて必死の場より軍をするつもり也夫故に杜世忠とかいひし元  
の使を北條時宗か切たりし例による積也これ孫子より出たる論にておも  
しろき也され共其時の大將はたれにてといふ人の論はもとより出來ぬ也

さて大名を御遣ひなさるゝ世になりては少もいにしへの風は今出來ぬ事  
也たとへはいろく、のことをいひて其末に形勢をいろく、と論して結び  
を將相と撰ふにあるのみといひたりこの將相を撰といふことさへ成れば  
謀はいらぬ也今の世にて攻戰大亂に及ひたらは格別別に將相を撰といふ  
こと決あなし其上に相にても將にても一ツの内相あれば將は出來る也こ  
れ根本也其根本といふものは御老中の任にて別に撰ふことはならぬ也夫  
故に今のことを書なからみな畫かける虎豹の類にて少も用なしつまりは  
しらぬからのほなし同前也其上に却而實用の害はのこる也かゝるもの江  
戸に多く出來たるなるへし御老中の腸を無益にわらくして馬鹿の事をこ  
のむ書生風のものに口をきかせる道具也さてく、可歎事也われ今は其事  
に不拘され共御老中かた世のためにかゝることをみると胸いたくなる也  
今の江戸のさま恐悦に言路を御開きことを御求なさるゝこと故にたとへ  
は道具やへ刀の注文ありしことくさまく、のものあるへし御老中は買人

也よく心を定よく御鑒定をなされたとへ本阿彌はいかにともいへ此一刀に命をかくへしと御定め被遊て心を平にして治亂のことを御察し御定メなされぬといふ人多きたけに御心配もの也趙翼か宋の世のこと書生に多くあやまれたるら脱カといふことをいひしと覺へし趙翼ヲ北といひて大儒なれ共大に奇論のある人なればかゝるあやまりありしかとおもひしかいま是らの書をもても學者の益少く文の質に及はぬことをしる也たとへは貴人の病人あらむに衆醫よりて其病人の治と不治に不拘醫書の上にて尤ときこゆる薬をもりて變化自在の活用なし夫故に貴人の病氣は六ヶ敷と中島三卿かいひて竊にある人の病の時に薬をもりたけれと口か利かれぬとて涙を流して末はかく此病人はなるとてかなしみしことありき果して其通り也き病人は一人のことなれ共外寇へかゝりしことなどは天下万世へひゝく事也契丹に大切なる地を遣して五代の大患終に宋朝までおよひしことあり可恐々々

○廿三日 くもり きのふ多羅尾久右衛門來るこの人は智チ人に付したくなどさし出して久しく物語したり其取廻し至至よし江戸へたゞ一度家督の時出て年始に出京する位のこと也住居は信樂の多羅尾谷といふ深山に住居の人なれとも人は生れつきによるものとみゆる也 東照宮を御やと申上候而御案内を申上たる説を聞しか書物たしかならず書上之趣可疑ことあるなといひし也○けふ新右衛門の日記みるに懸川ハ被參御對話のよし御様子よきよし感心也瀧野龍カの御様子よし前代の風自然と存すること、みえし也○三齋かたの甲冑御出來のよし三齋の傳へ惣筆といふことを不聞既に世に聞えたる 台徳院様へ三齋献上の甲冑革製にはあらず以前其通の品を所持いたし居候か今いふ數くクとといふものと同じものにて則世にいふ近習具足の躰にてがらすね頭なり三枚の甲冑にてうりかひにして十兩はかりのもの也さて革のこと周禮工考記みゆと覺たり綿甲は十年革甲は廿年とありしと覺たり革といふものはあぶら氣拔ては少も役に

にたす夫は城せめの龜甲車を生牛の革にてはるといふにてもしるへし夫故に周禮にも年數をかきたるなるへししかるに江戸の革具足といふものはみな革つゝらなとを買て夫をつくる也革つゝらのふるきはみな百年にちかきもの也革といふはかりのもの也され共治部右衛門は案内なれば左はなさしとおもふ也しかし革つゝらを買ふことはなきや幸三郎に内々御尋あるへし古き革を買ふ躰ならばよく御勘辨あるへし右に付はなしあり金錢の手廻るとき買ふものに役人の家の品によきもの少しわれ以前夫にこりてつらく考るに貧なるときはくるしき金より買ふ故によく穿鑿する也金手元にあらは其氣少故にあまりに穿鑿をせずして買ふ故也これやはり氣のおこり也われ刀などを買ふには必三十日ほとつゝ吟味して買たり夫はよからぬものを買ふと武用に第一不相濟さて又五兩のものを六七兩にて買ことあり夫を五兩にて買て二兩を貧なるものに施せは陰徳となる也不目利にて買ときは只の損也乍去新右衛門も手廻ることなれば武

器など買ふはよしよけれ共一兩以上のものを買ふならば必幸三郎へ申付候よよく穿鑿して手をかへ候所々を糾し候上にて御買可被成候われ武器好にて御存之通刀劔甲冑彫物師など二十年三十年におよひ日々宅のよひていろくこゝろみて遣ひ多く後悔すること甚しければしるす也高きものを買し損金にて陰徳をせはよからむと今は至極の後悔也はしめ伊能一雲齋先生又は戸田勘介等か世話にて甲冑をつくり夫を紀宗保か上手にていつはりなきをきゝて手をかへて風聞糾しまてなして其上に面會して試たる上に甲冑を申付たりされ共はしめの甲冑はとしを経てみれば宗保も耻多くわれにもいやになりて宗保か世話にて五十兩にうり夫へ十兩たして宗保死前迄に今の甲冑出來たり与風大金のものを買ふは奢のうち也御用心あるへし武器のこと故に百金も出すへしされ共此金みな民の膏血也われ壹貳兩のかねにもこまりしとおもへは高きものはおのつから不买さてよく吟味も出來る也われ大晦日に金壹万にてとしをとり母上の御小

遣ひを貳朱拜借を申上たれば氣のとくに思召て百疋被下たり此時も刀好故に少々はやはり買たり新右衛門も亦一旦貧窮にして今結構なれと常に敬の一字を不忘よしを御申越奢の氣少も起らすと御申越なから尙もつゝしみ深くして日記を記して平日のことをいふ故に少もよからぬとおもふことは必いひ少も奢の氣みえたらはいたく糾せといふ故にいにしへの人備はることを君子にもとむと申せははつかなることを大造に申成してしるす也常にもいふ此節は我死してもさしてこまりはせず新右衛門にことあれは母上もわか子供等も忽に難義すること故に百里之外にて新右衛門を思ふこと玉のことし時々は心をわけてやりてはなしたしとおもふこと迄ある故に幸のことゝ此ク條をかくは申す也○治部右衛門は以前は新右衛門方へ來らさりしか雷の時も參り候由みえ不審におもひ居たり近頃は母上の御機嫌伺として參ることか治部右衛門はわかいろゝ世話をしたる男也夫故か年始暑寒には代筆なから書狀をこす也われはひま故に自筆

に追啓をも詳にしるしやる也○淺野梅堂いつもなから實意なること也禮を申し遣すへし○三齋かた革つゝみ故に革製と申たるか夫ならばよし冑はいかに塗たるものか治世製作の甲冑は必銷をこのめり塗は不宜候其譯は塗はいにしへにて利かた多けれ共塗と申せはいかにいひても函人共鍛をわるくして且きすみえすさひにするとよききたえにあらされはサビ不附其上に磨にする故にきすの思なしぬりたるにてはやけものなと曾あしれす夫故に入念にはさひの積にて申付仕立之節塗にする也され共よき鍛さひの味よき故に函人共塗をいやかる也手際のかくるゝををしめは也さひなれはなまかねと鍛たるよくわかる也刀のよき中心のこときはよしあしきは鍔きうのことくになる也夫をかくす法あれ共目きゝにて直にわかる也いにしへより甲冑に冑を第一にすること也其余評ありしこと少し冑ほど大切なることはなし心をいれて冑はつくり可置といひしこといにしへのふみにもみゆ夫故か繼信の冑又は左馬之介か一の谷蒲生か鯨尾等い



ろくの名いにしへよりみゆる也畢竟は屍の上の耻を深くおもひしことのよし也

○廿四日 くもり 御用日白洲に出る○片桐助作をませ肴來る中小姓以下之もの共いめしをたうへさするかれらはもらひものなければさかなの高直のところにて常にたうへるといふなければ多く遣すみなよろこひたり酒のむものには一とくりツ、遣す大にきやか也

○廿六日 雨 (原本ニ廿五日ノ條ヲ欠ク) ある人の奉行所にて失て其家内の江戸へ歸る路用のなき

にこまりて長吏等申付て大寺の女犯を穿鑿して所々より五百兩はかりゆすり同前のことにて金をかり夫を取繼ものもみな大にうるほひ扱奉行所之金も百兩もち行て今に沙汰なし此人の氣受至よしいつくの社々か市中御武運長久といふ大成石の燈籠あけありある御目付寺筋ものも其狸に化されて感服して人にかたりき其ころは給人と用人と申談して所々の出入を買歩行與力同心も上を學ぶ下なれば大變をつくしたるよし也奉

行々次男遊女屋へ行て居つゝけをして歸らす夫故に其次男を外出のならぬ様にいと鬢をすり下ケたるよし夫にても父の死するときも遊所へ行居たるよし也夫か氣うけかよければ我などの氣うけのわるきはしるへしかゝることにて難義するものは良民と貧人なれと夫等はをとなしきものなれば出訴などはせず風俗のやふるゝことは目に見えす只無症に子供に菓子をくれ頭へのせて子供と一諸に遊ぶ故に追々大變の出來て不埒の子供の多くなるはいはす一同に遊ぶ故に子供かみなうれしかる也其うれしかることを風聞にきくとみえたり諸葛亮か蜀を治めしに嚴なる故に人不服といふこと三國志にみえ鄭の子産か嚴なるを鄭人うらみて子産を殺さむとまで歌にうたひしこと左傳にみゆ前の人のすることはいつれ孔明と子産のうらはらにて卷頭卷軸の相違なれば人のよく心服せしとみえたり世の中のことにかゝること多し夫を上たる人しらすして只々氣うけをいふはいかなることにかゝるや孔明子産にても正法にては治世の其時はしめより賞

せらるゝことはなき也只世かはりて後眼ある人はしる也

○廿七日 くもり 御用日也○水野の若狭より小金御狩の長うた短歌ともに来る此人わか方の歌などみする人のうちにて諸太夫以上にては上手のよみて也うたはよほとさえありおもしろきうた共往々ある也このほと京地邊には痲病多くいつれにや一村のうち八分通り死せしところありといふ也まことゝはおもはれず乍去大和には疫病痲病等々大に行るゝことはなしといふ也大和の大和たる故なるへし○貞助に兄ありて行衛不知になりしか大坂邊に居るよしを聞出して穢多共に聞出しもらひたるに道頓堀にて鮭屋をなし子供もあるよし右に付面會願にて出立したりはつかに八里なれば日歸にもなるへけれと往復二日對話三日の暇を願ひて行たり○廿八日 くもり わかならへ來りし時しらへみたるになら中に長壽のものなかりし也此ほとは九十以上のもの四人出來たり例を百兩之利其外之上ケ金に而九十以上之ものは年々五貫文ツ、被下たる也八十以上之

ものをしらへみたるに夥ありて夫々年々三貫文ツ、もやりては貧人の救ひ不出來と之事に而八十以上はやめになしたり手當あれは長壽のものおのつから出來るも不思議也病人等町役人共不訴出におゐては答申付とまてに觸あれともおもひの外に不申出是は町役人共のめむどうかる故もあるへし乍去永久の救出來て難有こと也

○廿九日 くもり 此ころの風聞には西國の夷船みえ候而西國の諸侯之内急に歸國のものありといふまことにや江戸にては異國船の御懸り之御老中之御名等番屋々に張出しありといふまことにや町人らかいふことを御聞なさるゝ程ならば御目付より御旗本にも達しあるへし偽なるへし山家故にこのいつはりの風聞常に多き也○新右衛門のくれたる新論といふ書昨夜までに再ひみてみな句讀をしたりこの人の論は 東照宮御在世之積にて百年も二百年も永續してなすへしといふ意也堯舜の治五十年にて黎民みな二心ありといふこと五子之歌にみゆ慶長元和のころのことき

は日本にも曾あなきこと也千載一時といふはまだくも也此世はしまり只一時也しかるに夫にて割出しては世の盛衰の論はなし金をかり質を置は損のかきり也乍去夫にて融通をするときもある也儒者の論は後世にてよくいはれむといふより筆をたつる故に知ら迂になる也乍去此人軍機もあり才もあり眼もありから日本外國のことまでしりたる人也よほと人物なるへし水府御前代の人にて名ある人はよくわか方々來りたるかこの位のこととは藤田虎之介ならてはいふものあらしたれにや筆者ききたきこと也七篇の策之内に虜情といふところ第一の大出來也つゝきて守禦のうちかならむか其外は更に今の用なし虜情といふ所は新右衛門などよくよみ置可被申候大に御用辨になる也○内藤安房守御用召之書狀來る長崎奉行なるへし

○九月朔日 くもり 月並之禮をうくること例の如し○此ほとは松たけ

出て至るよしとりたての小成ものをきらずに土ひむへいれて蒸すと露多くいつる也夫へさけ醫油をさして又一むしくて取出して青柚をかけて給ふる也よき松たけは純白にて味絶妙也○此ほと家來の小兒共へ龜菓子をくれは遣す也順右衛門倅貞助倅四郎娘いつれも三才也正月生故かよく歩行していろくのことはいふ也敬次郎などかゝるへしやと常におもふこと也俊藏娘不相替才女也きのふ菓子やるに虫はのいたむとてくはぬ也汝かくはのいたむならはわかかゝなるへしぢぢには齒のいたむばゝか相應也といへはこれはくまことのはゝなるへしとて笑ふ六才の兒のと齒り廻しにあらず○出奔の通詞に似たるものあらは召捕へよと嚴敷申遣したるに桃溪といふ長崎の醫者にて無宿跡のものを召捕來りたり人相等町奉行より申越たるに符合す紀州の生にて七歳之節を長崎へ參り居近頃又紀州に歸りたるといふまことかしらねと万一のことありてはならぬ故に紀州之家來へ急懸合を遣したり

○二日 雨 きのふは按摩を呼てもませたりわれ近頃は考にて按摩に月に一度ツ、は必もませる也腹をよくもませると病のあり所且持病の進退わかる也大に功あり按摩いふ近頃はらの拘摯大に減したりといふ也左もあるへきかもまれてもさしていたくなし乍去腰の筋をもめは必いたむ也新右衛門など必月々にもませてためすへし灸位には向ふ也ためしてしるへし夜六半時頃に按摩果て夜食をせむとするときはや膳をもち來りたりいまた帶もべあへぬ位のこと也よくみれば父上也驚て蒲團の上より飛下りたり仰には按摩のあとには必酒よしよつてみつからもち來りたるとの御事也夜食に奉りしさしみ又は御養物などことくく膳にのせてあり大に恐入て奉謝一ツ給そにて父上也被召上たり父上か我へ酒をすゝめていろくくと御心をつくさるゝほとには却あわか事奉ることは及はぬ也酒にては屢かゝる恐入こと多き也養子か酒のみ過たることにて親へ恐入ことは世に多かるへし養父より酒すゝめ給ひて却あ恐入ことは世にあ

らし難有こと也新右衛門肩はることのあるときなと却あ大カイコ湯なるへしためして其功をしるへし醫者よりもみつからいろくくためして其功をしるかたしか也

○三日 晴さむし きのふ桃溪を吟味してみるに三十九歳也といふかふけてみゆ人相書は七歳之節父母にはなれ其時を長崎の高臺寺暗カの僧の熊野詣として紀州に参りたるものに被養て十三歳まで同寺にありて夫を長崎の官醫の學僕になり十七歳まで隨身夫を江戸に出て多喜に隨ひ京都にては所々の醫に隨ひ一所不住のもの也といふ也單物三ツ所持之内に一ツは人相書にある紺の立しま也たゝほくろ相違せりされ共ほくろは抜るゝ物故に夫をもては定かたし近頃大坂にて醫業にて知ル人あり京都にもありといふ故に夫等を呼出に遣したりきのふの吟味之躰にては似て非なるものなるへし乍去容易に門前拂にはならぬ也こまりもの也さて又遊歴して歩行は金銀山のしきうちにて死するものを助くる大願ありて薩州より奥

通詞は京都  
にて被擧候  
由に付及懸  
合候處無相  
違由相分り  
依之六日に  
門前拂に成

羽中國筋の金銀山をみな歩行たるといふ也言語さはやかにして容貌よりして志のあるものとみゆ人違とおもへは不便なるもの也

○四日 くもり 昨日夕かた通詞之出奔もの被召捕たる風聞申來る昨日の男は彌災難なるへし○貞助大坂より一昨日歸る大坂を五ツに出立して七半時過に歸りたり馬にては日歸至るよろし大坂にてゆるりとさるゝなるへしといふ○四五日以前に水野若狹守か博奕にて過料をとりたる一件落着與力は二人御暇になりしといふ也同心其外も御咎に成遠國の奉行の威權與力同心の手におちて奉行はある甲斐もなきもの也與力同心を江戸より嚴敷なされすは往々京攝の奉行はしめ與力同心の方々登 城前をつとむへし寺社奉行調役の代々役にて遠國に居るとみて新右衛門などよく考みらるへし○貞助は兄と十六のときわかれたりとしかるにこの度与風行衛分りて尋行たるに兄もまちて十町はかり出迎したりと也兄は大にわつらひて衰て道に往逢たるに貞助一向にしらす乍去兄の方にて見覺あり

て貞助をよひかけられたるにてこれはくゝとて互に先涙落たるといふ也左もあるへし大坂にてかなりなる料理茶や也といふ也このはなしを聞ておさとなどは勿論人々みな泪を催したり遠國の情は別段なるもの也其地を踏ねは一向にわからぬ也

○五日 晴 市三郎太平記をよみていろくゝのことをきかるゝにさてわからぬこと多し其内に足輕の兵を撰ひて馬よりおろしかち立にして弓を射させたるといふことみゆ足輕の字は三略之内かと覺ゆ足輕子奔馬とかいふことの意所々にみゆ夫をもて名つけしもの也今は歩兵の名となりたるにいにしへは太平記のことくにいひしものとみえたりある人の常にいふは與力といふものは騎馬足輕の類也といひき不審なることゝおもひ居しに右にてわかるかことし○昨夜八月十五日附之書狀相届母上少々の御風邪なれ共いかにもはつかなること其外御無事之由安心也○玄關帳之内我ならにて病氣之由荒井精兵衛承候而見舞に參るよしみゆいかなる傳聞

の誤ならむ可怪事也當年一度もねたることなし此ほと未明より例の鐘居合等其跡にて市三郎の槍いり身一度突身一度劔術の試合一度也病氣の間違ならはよし其外のことかく間違てはいやなること也

○六日 晴 日記之内に英夷其外西洋各國之兵集りて滿清を攻北京へも切て入るへき風聞あるよし其事まことならむには兼而きく魯西亞と英夷滿清を窺ふ事久かりしかともひまなかりしといふかまことなるへし其ひまといふはいかになれは清起りて順治より二百年に及びて雍正帝殊之外なる奢にて近頃は武備はあれともなきかことくになりしより屢反賊起りて民もつかれ居るなるへしかれば役人もみな諂諛と疊さはりよき人々なるへければ官其人を得す武官は文官のことくなり居るなるへしからの流義なれば外寇あれば夫につれて内賊甚しく起居る也夫は明の倭寇にて知るへしかくなれば元來清は北戎にて土地のもの多くは胡元をおもふかことくなるへければ國力全におとろへきらぬうちに國亡ふへし其時は

獲野流鑄十貫文に銀五  
十文に銀五  
貫文に銀五  
法あり其外  
かふれき外  
鏡古錢又は  
入る錢なも  
とふことへし  
と疑はし銀  
を金刀銀  
へてとてい  
法有とてい  
偽也といふ  
と同しとい  
様なること  
無事なるこ  
きに大に好  
に置ぬとて  
に大に好

西洋各國の利にあらずしてからの豪傑の幸となることあるへしこの度の風聞のことまことにて夫を不取計にする位ならば清は三十年前後に必亡ふへしとおもふ也可恐こと也西洋の亂媒をして眞の亂を引出す也これ治世のつゝきたる故也可恐々々○此ほと對州を境へ大筒百挺の注文あり一代に一挺大筒をうつことはまれなることによしよつてめつらしかる也對州も風聞に恐しなるへし○穢多來りていふ薩州牛の革至而よしされ共近來更に大坂へ廻らすこれはかの國にて專武器を造る故也と申しきいやなるはなし也○大筒製作のことに付はなしあり大筒をつくるとき多く受負にする也これによりて銅を買ては間に合ぬ故に手水鉢其外のかかぬを買てつくる也以之外の事也其譯はよせあつめものなれば鉛の過たるもたらさるもあり強きめしと至而柔なるめしを集て粥につくるかことし強き銅はよく湯にならぬ也それをもて鑄かたへつぎこむときは必不同あり其不同之處弱みとなる也かゝる道具をもち出して火をさしさけたら味か

たの道具敵のふせ勢となる也可恐ことならずやさて又大なる器故に湯の廻りかたよからす刀のふくれのときものゝ大なるか火門近邊にあると大變也いつれにありてもそこより破るゝなるへし夫をためすには大成刀はこのこときものゝ水をいれてみるへしたとへは六分ンメはかり入て上に二寸のあきありさて夫へ大筒をいれて水をつぐと上のあき壹寸となるさすれば其一寸だけか大筒の惣坪となる也さて此大筒厚サ何寸なれば惣寸坪何ほどあり壹寸四方の銅のめかた何ほどあり夫をかけ合てみればはかりにかけざる大筒の目かた分るへし夫より目かた輕ければ是非いつかたにか湯の不廻して穴になりたる所あるへし夫は火門近邊を第一にて大成つちにてつよくたゝきてためしみるへし穴ある所はへこむかもしるへからすさて又銅を湯になして竹ほうきの如きものを水上に置夫のそゝきかくれば銅みな赤小豆位になるへし夫をよく調合してとかしたらは過不及なく目かた通に剛柔同じことくに出来るなるへしとおもふ也以上のこ

とみなわか考附にてためしたることなければ疊水練なれとためしたしとおもふ故にしるす也大筒の出来たるとき入札に成可恐ことをする風聞を聞て金をかけて敵の伏勢をわか方へつくるやうなるにおとろきたる故にしるす也○われまなかつほをいまた不食うたにも京の生たらならの生まなかつほといふにと按摩にはなしたるに其按摩魚肆行てあつらへてもち來れり小鯛ほとにて直段壹分五百也驚歎して返さむといへ共魚やうけとらす壹分五百を戯につひやすこと尤いや也され共仕かたなし如血涙數行下りて長大息すること虹のとし生爪をはくきになりて買たるも大笑也この錢眞のむたのこと也君子決してかゝることなし右々魚家來下女迄へ一はさみつゝ遣したり

○七日 晴さむし 去る五日一乘院宮御このみにて郷射禮を講せらる大乗院殿にも御參殿之義被仰遣たれば我にも參殿して拜見せよとの事被仰下之然ル處五日は目安糾之日なれば延引いたすへきよし申上る八ツ時頃

參殿いたす一乘院宮の宸殿シシといふ所のみすを鈎にかけて高くまきかけはらひにて宮は上段に御座被成半廊をあげさせてそれより御覽也御次御からかみをたてきりて其次に養拵の金屏風にて圍ひわか一覽所を點せらる其次についたてをもて仕きりて院下共罷出其次に衆徒寺僧共罷出そこに召連候家來共も拜見也御くるまよせには興福寺之役人其外罷出居る御椽の下には御出入之町人共上下にて拜見也この宸殿と申は二之間五十疊はかりにてふるびたれ共金はり附にて御庭には右近の橋左近のさくらなといふに擬せられたるか御階前に橋と梅をうゑられたり上野の大廣間も同じ其外はとしふりたる松のみ也その御庭の西之方に大まとをかけ東之方に弓矢のかみをまつり二三間はかりまより隔て二間四方はかりのすゝみ臺のこときものあり夫へ土階二等をまうけられたり宮の御前にはかり衣たる人布衣の人士を少しく高くして圓坐をしき着坐布衣着用之人の前には白木の机有て弓のあたりを記す也南之方にもすゝみ臺ほとものものありて樂

人共みな裝束して着坐したり射人はみな布衣にて弓をとりて圓坐之上に坐せり夫を差引する人は是もかり衣にて三人圓坐の上に坐せり射手は八人也としふりたる松のある七八十間もあるへき御庭へいろ／＼の御まくをかけられて裝束の人士間に圓坐して坐したるさまいかにもいにしへふり也射手は弓小手ありてトモをかけた庭上になみ居る射手二人ツ、至而靜に樂の聲につれてねり出し土階をのほるに足をあつめて登る也夫々は並々かち弓の射禮也射畢進みて前の階を下りて階前シシにあるもりすなのこときものへあたりたる矢のしるしをする白木の六寸はかりなる串あり其くしを砂へさして左右へ引わかれてもとの圓坐へ行て坐する也射手階へ上りて樂をやめ階を下ると又樂を奏する也かくすること四度にして太鼓を二ツ打とみな段々に宮の方を向ひて平伏して引也射手のひき畢るまで樂あり其内に宮御逢可被成と之事に御上段に被召御茶御くわしなと被下候いろ／＼御はなしの内に並ひ又はしまるに付もとの所へ參り



着坐弓の式前のことし畢る先生出る狂言師のかふる帽子のときものをかふり紫の水干にて沓をはきて一人出て射たり壹本はつしたり十二間はか也い先生射畢るまとの前へ行て何か唱ことをする躰にて弓にてくじをきる様なることをなしたり先生引退と射手すゝみてまとの所へ行也其時幕はり白張を着たるもの出て的をくひとゝもに倒したり何か式やありけむ見損したり射手もとの所へ引と神主躰ものかり衣にて出て神拜あり畢るこの神主も圓坐の上へ着坐する也其時にまくはり内々樂人出て前の射手の臺へのほりて納ソリ陵王二曲を舞たり舞樂ははしめてみたりさる樂の類にあらず雅致あり舞畢るもとのことく引て夫にて日くれにと果たりけふの躰郷射禮といふものとはみえす全に武家の射場はしめの式などのこときものに樂を添たるものなるへしされ共先生の服等異躰也先生は沓ツにてともをかけ弓小手にて弓かけなしに射たりこれはいにしへの書まきものなどにもありしと覺たり其ともをとよりよせてみたるに至る

古きさまにつくりたるかけしからすひも長し東大寺の什物などに夥あれ共一寸革にて弓手へ結附るまでの事也このどもの製中絶したれと近來は至るくはしくなりし也弓返りをさせすいる故に手をつるにてはしかれぬ爲のもの也故につる音と同しくまよけになる也まといにしへは今のまこのことくなるものに書きしか今の全の大まとにて可然かさて又かたほうしのゆかけにて指五本へかゝるものにはあらずこれもいにしへはあらぬこと也何かさまゝにもてつけしことゝみゆ其こと畢る鴈之間の次に御目通被仰付席にて御酒を被下たりけふは與力共二人被召たれば夫をもつれたり御酒中に御樂あり宮はひは東大寺之龍松院は琴八幡の神主神司出羽守は笛其外笙鞆鼓等夫々樂人共つとめたりわれ宮と御同間にて御膳出たれはおそれ入たる故に末坐に居たるにけふは酒の相手に樂人共もいまに出る故に汝さして常のことくにかしこみては席せまし故にわかするにまかせよとて宮みつから立たせられてわか膳をとりて御對坐にさし

置れたりいかむともすへき様なく只恐におそれ入て居たりいろく御物語あり追々樂人共も出御酒被下召れ候與力をも入かはさて被召て御酒被下たりわれ御手つから御しやくにて其御序に與力等も御酌給たり恐入たることいふはかりなし汝にかけ物を見せむとて御所持之宋書なるへし一幅拜見被仰付たり手かゝみを一冊拜見したりこれはいにしへ當時之うたよみ共に被仰付たるものとみえて法華二十八品之内を題にて一首述懐を一首壹人ツ、よみたるもの也僧寂蓮などもみえたり皆經文にてうらうちしたる反古のうらのこときものへししたるもの也庭訓に白昏拂底之間反古を用ゆる所也とある其外紙屋川の繪旨の御番などにていにしへのかみ少をしるへし此手かゝみ立派なるものにて前にさくら末にもみちを土佐守某かしたるしたり驚入たる結構なるもの也此宮には書畫其外御道具などは結構なるか多き也御重箱などみな目を驚す也御酒はみな銀の瓶子也いくらもあり千五百石にて御勝手至るよしからす且御無住のこと多

き宮なるにももの紛失せぬこと密に御家來共を感ずる也○この頃太平記をよみて高階の師直か奢のつみをしるしたるうちに攝家の御娘へかよひたることをいひて武家の夷の身としてかゝる無勿躰ことありとていたくにくみたりそれらをよみても宮へ被召たひことにあまりの御取扱に甚以恐入て身のばちとなることを恐るゝ也以前民藏を召連て出よと内々御意のありて召連出たるに御酒宴の御席の御入かはへ被召にて御意など被下御酌を賜はりし時は恐入て其席にておもはず涙を落たりき太平記の作者などにみせたらはいかにいふらむ時世と君恩の余りとはいひなから恐入たるのかきり也實に罰のあたるを恐るゝ事也

○八日 くもり 新右衛門日記之内に八月十五日夜は快晴之由しるしありならも同じ五雜俎に八月十五夜は千里同晴雨といふ説を疑たるにとるにたらぬ事也去年八月十五夜に友野先生は江戸淺野中書はうら賀われは南都にて一月三所之吟を友野先生の催にて詩成り其和韻をもしたりな

今日けむらう来る  
不相替の才也  
中より少くも  
たりかや五十  
ては根木二兩  
から大木二兩  
り出たは四ツ  
こは本に於て  
あきかたに  
ねまをちか  
かへしむら  
かたを思ふ  
さよふか  
たよはし  
夜半は  
聲は

らは終夜雨うら賀と江戸は快晴也き山一ツを隔つるとかはることあるへし漢ふみの説もとよりとるにたらず○ことしは先生は御病死淺野は江戸われはやはりなら也よつて月夜思友といふ宿題ならの僧也來りて其ことを專にいひて世の轉變のかなしきことを長篇につくりて友野先生を悼奉りたりき八月十五日にまきはら百本といふことみゆ至るよし歡ひ此こと也かくならては士にはあらず酒も少しとみえて大に悦ひたり一乘院に被召て歸りしは九ツ時や八ツにちかく覺し也乍去其翌朝にわれも五日に鎗劔術常々通也御安心被下へし○明末に史可法といふ名將あり文天祥の生れかはり也といふ説のある位の人にて日本の武士のかみとも必なるへき書也この人八月の十五夜に月のいとあかりければこよひは酒を用ひむ肴はありやと妻にきかれしに肉の類はみな軍卒のふる舞にて遣ひてなし塩にていりたる豆ありといひしに夫にてよしとて夫をさかなにして月を賞せられしことみゆ此人百戦の苦をつみてのち揚州の落城のときに清朝人にこ

ろされたり太平の世は難有こと也

○九日 晴 重陽之禮受ること例のことし○このほど庭の木いたく生しけりたればかりこみをさせて松木などは伐らせたるに大成白三ツはかりとれる松なとをきり其外の木の枝ともに真木二十駄はかり出來たりけしからぬこと也其内につゝじのうち大成青石のこけむして其内に小松の所々に生たるを見出したるこれにくさむらのうちに捨置は可愛こと也とて植木やともはいふなりよほと高價のものなるへしこれも慶長以前のものなるへし江戸ならば諸侯の庭のはれになる所なるへし○此ほど法華寺に御所へ近衛殿より御入室あるへしとて御普請也その上段の間并御次之繪を順作へ被仰付たきよし内々御たのみに付順作したゝめる也きのふ御席の様子拜見として行みたるにこゝは尼宮故に用人のこときものを老尼といふ二人あり其外下さまのことする尼共あるよし内々被仰付たる御用向にてまいられたるになにも差向たるに參らするものなしとてひるめし



贈物有之其かとに銀二枚被下孫兵衛よりかまほこ三本くれ申候右は別段之義に候得共御役に拘り候義に付相記申候并御領分産之ことのうらの硯石被下候義に有之候夫迄之義に外に子細は毛頭無之候間其御合にて御承知可被下候○愚考に外は紀州之義孫兵衛咄之趣に外は前文之御達は寺社方にても不存御勘定所にて不存候なと申聞候右之一條寺社奉行所に御取扱物に可有之哉之處孫兵衛申聞候通少も寺社奉行所之手を經不申候と申位に候は、新右衛門義取扱方勘辨も無之候は不相成御用たのみなどは奉行衆の御内談之上か何とかいたし候は其筋之聞濟を經候別段にたしかにいたし置不申候は必存外之義可有之候間其義は厚御勘辨之上風聞を受不申候様たしかに御取計念に念をいれ候は可然候依之孫兵衛心得迄に拙者義潔白之義は別段に相心得候は取計候義之處新右衛門は別段に嚴重に外既に拙者勤中は寺社奉行所に日々に酒給候は歸り候義之處新右衛門は當時夫等之義も無之様子に付右之御心得に可然と一わ

たりのはなしにいたし置候處孫兵衛答には塩路新次郎此ほとは役はいたし不申候得共今般之義に付申談候義も有之候處新右衛門様は殊之外に御手堅之由は厚心得居候は其旨新次郎なと咄も有之あなたさま御同様之由申聞候義に御座候右に少々安心いたし申候○孫兵衛咄にては和州十津川郷と水野土佐守一件熟談いたし候は内談之上土佐守まけに相成候右に付縫殿の十津川郷の壹ヶ年八朱とり不詳の利にて銀百目貸遣し永年賦にいたし土佐守手もとほも四千兩無利足にて貸穩に相濟候由申聞候右之咄之趣に外は先達之一件十津川郷より越訴いたし候由は内實謀主有之候は土佐守をこまらせ可申哉と取計候には無之候哉其上新次郎なと此節横行にいたし居候由も土佐守一己に取計候故御國之政府方之ものと内實相争候は之義歟と相見申候新次郎に内々公邊向より御沙汰之次第も有之候由之申達に候得其實は土佐守了簡と相聞候哉と疑念いたし居候哉に外至る六ヶ敷相聞候間万々一土佐守なとより申聞候品有之候とも容易に

は御用に不相成候我等も少も油断いたし不申正直に取扱居候

○十日 はれ 八月廿九日附之書狀相届く母上さまよりも御書被成下候  
乍去母上様は少々御風邪之由御持病なるへし日ことにさむさもいやまさ  
り候時に御座候間御いとひ被遊候様奉存候其外之御無事目出度候新右衛  
門より之書狀書添の二ひら日記共相届く○川柳の解しかたわれもかく解  
したり○對州のこと前の大つゝのかとに合みるへし蒙古の亂にも對州の  
先祖はみな最初に被殺たり用心尤也さて又いかなれば對州と朝鮮の境を  
二百二十艘まで乗通候哉可疑こと也この度も大江をのり越南京へ向ひて  
の戦争なるへきに可怪こと也この二百二十艘の引取方勘辨して御國のも  
のはこゝろなくてはならぬ也いつれの地の戦争になりしや地を承り度も  
の也渡邊華山西洋にて戦艦をつくることをしりていつれにも唐と日本と  
の大患なるへしとて甚敷患ひて我浦々懸に相成候事を大に悦ひて色々い  
ひき其頃は華山などは氣違ひのことく世にいひしを華山いたく患ひて患

ひに堪かねて密に書を顯して夫にて大罪人となりわれらも既に危きめに  
逢き先見の明なるものははしめは氣違ひのことくみゆるもの也間宮林藏  
かいひしことなと思ひあたる也其頃林藏華山などは世の人を氣違ひか盲  
目の如におもひ居し也可歎々々われ小學の邊報のことを不云といふ教を  
守りて近來は新右衛門の外少もいはさること追々の日記のことしこのは  
との躰に而は和しても戦ひ不和しても戦ふか也新論のことく先ツ死地に  
置てといふも謂あるかことし宋朝其外のことをみるに和によせてあさむ  
きて地をきりとる也これは和にこゝろゆるめは也和によせて戦ふときは  
さにもあらさらむかこゝのころ此節の躰にては容易に發言なしかたし  
○十九日の釣大によし乍去かゝること花やかならぬかよしこゝろあるへ  
し風邪流行のよしさほとにはならはなし此ほと病人氣なし○宮本周郷の  
ことよし母上の御薬いつれ柴桂湯なるへし其様子に而少々宛の異同ある  
なるへし○出火に付彼是と御世話忝候○屋敷圍ひのこと御尤也少しも存

寄無之候○遠乗のこと馬場はなくさみまきわらの類途中乗は修行也武士の尤以可講ところ也乍去これにていろ／＼のことを仕出せし其ためし至多し人をふみ殺したる類はあくるにいとまあらず彰常などにも困り候而田中市郎右衛門をたのみて遠乗につれもらひたり以後よくのりての心静なる人なくは遠乗は必勘辨もの也可恐のかきり也沼田先生いたくいましめられたりこれらもつゝしみの一ツ也此ケ條末までいたらさるうちは胸ドキ／＼としたり尤以不容易事也廿八日の條段々忝なきこと也みなつまりは天命也むかし孟子の魯の平公の逢を故障せられしを天也と申したるにて萬事心をやすくする事也乍去孔子も天命也とて捨て御構ひなかりしにはあらずことをなすは天なれともことをはかるは人也よつて孔子も天下を周流なし給ひし也われらのこととにかくとおもふも忠と孝との一ツといふうちに專に孝道の一ツ也乍去人事をつくしてならぬ上は一天下につゆうらみとおもふこと徹底なし人事をつくすも人をうらまぬも深切

なる人の恩をかたしけなく忘れしとおもふもみな修行中之一事也こゝのこゝろ大切也こゝにいたりて患少々少しこゝにしるすほとに出来たらはよかるへけれとも内實これほとにはいまた出来あからずこれ修行中のわけ也乍去いさゝか患ふることの少きところは實に得たり難有こと也しはしも不忘してつとめさてならぬは天命に歸すること也人の子をうむと同じこと也これをよく考れば天命のわけはしるゝ也死ぬるかたには非命の死もありて命を全ふすること難きこと亡之命矣哉と孔夫子の仰られたるかことくなれはいまた疑ふこともあるなれと子の出来るにいたりてはよくわかること也こゝの味ひ微妙にしていふへからず○ふの字のうたにて母上の久々にて御笑ひ被成たるよし戯いふも孝の一ツ也嚴格は親につかふまつるわけにあらずとの教おもふへし

○十一日 晴 御用日也きのふは與力共狼烟のならし也とて蓬蓮村といふ所にて小さな狼烟あり又近々に狼烟あるといふ也御門主など御待か

ね也

○十二日 是れ 龍介日々萬葉をよみに出る其序のはなしにならの町人のよし相應に下女下男を召つかふものよし夫婦共に七十はかりにてめてたきものありけり其つまこの重陽の日にとし老たるよめなどにもかくして甘あまりの女のきるともおさ／＼はつかしからぬ中かたとかいふけたしをべたり布といふ也 下男下女にいたるまでみなく驚たること也夫をかれか

七十のと同じもわかせにみせむとてけたしわかやくけはひするかも我背とよみたりといふ故にわれいふトジのこと老女のふるき稱なれと多く母のことにいふか也いとせかなかにいひしかよくみへしといひてさてもいとせか中はかくそあらまほしき事にありける高砂のまつ夫婦などももしらかになりても睦しくかたらひていもかはれ粧ひするときは帯を襟など直してやりたるならしわか共はかりの姓四十以上の夫婦はふ

け筒のことくなりて丸こめは出来ぬものとのみおもひしに今五十に及びて試るにさもなければたかさこも其としになりていかゝあらむといひしに龍助大に笑ひし也

○十三日 快晴 月よし六十五度の過暖にてむしなとよくなきて蚊も出る位なれば月は十分也

来てふとてまつにもあらで月よしよしとしるすことのかなしもかく記し置たるにひる後か過暖殊に甚し女みな單衣にて汗を流すといふ位にて夕かたよりくもり日くれより少々雨ふりたり四ツころにはくもの絶間に少し月をみしかほとなく雨となりたりわれ月をめつること花に過たりされと十一日か十七日までは大潔濟にて酒はさら也例之通何もくはれぬことゝなし置故月見のころはこまる故に八月九月は七日より十二日まで六日の潔濟をなしこの十六日より十七日まで同しかくする故に三五の頃前後に月なきときは大に力をおとす也



○十四日 雨 與力同心共近々に狼烟をあくるによりて幕五張借用之義申出る名前をみるに二十人はかりにて六十本はかり也江戸の與力とは大に違ふもの也與力共七軒にて馬三疋飼置て常にのる也其馬にて薪などをとりよするはるのころは借馬ひきにもかし御祭の頃は借馬に出す也女の四人も遣ひ下男もあり刀さしも有なから御役所其外へ出るに與力共大風呂敷をもち木綿にて無僕にて出勤をして御役所にて髪結に髪を結する也らくなるもの也

○十五日 晴 今朝霜甚し五十二度也寒より三段上り也十三日にはみな單ものに汗したりけしからぬ事也けふはおさと申上る御兩親様をも俱々出入之醫のもち山松茸とりに參るみなく參る良右衛門妻民藏妻なとも參る女共曉より大さわき也留守居はわれと市三郎也

○十六日 晴 きのふおさと松茸とりに行みちすからに法蓮村のいなり石をみたりといふこれは大黒のはらと云所にある也ならぬ四大黒のはらと

御即位のとき  
御人なは  
御座りな  
御すかた  
御云ふこと  
御はなす  
御たれは  
御ちなる  
御なるか  
御へ

いふは誤にて大皇后の原也 聖武天皇の御母の御陵のある所なる故に大皇后の原といふ也このこと好古小録五畿内誌其外いろく説ありきつね石といふはいにしへは四ツありしなるへし今は三ツありきつねのこときもの、杖をもてるか立るすかた也これは隼人ハヤトとて延喜式其外にもみえさつまより出て申サは夷蝦にもや、類するやうなるもの也延喜式に遠きみゆきの時は太刀とりはき槍をもとるよしみえて瑞垣もるものなればみさゝきの四方へたてたるなるへし一ツあさやかなるかあるに北といふ字はたしかにみゆ夫をみて夫より 元明天皇の御陵を拜み奉り御陵の山にも登り拜みしに四方に掘きりありてのほり一丁もあるへしといふ奉行所之記録には宇和那邊山山高廿九間とありそこへ行て拜み奉りたるにいくらかも壺のこときもの、いけたるか土流れて所々にあらはれたりといふこれいにしへの人垣なるへしいにしへは 天子の御葬式には人を垣根のことく立ならへて首のみを出してあとは埋て夫なりに殺すこと也これを廢せ

られて土人形に替て埋しといふ夫等にやあるへきかそこより出入之醫師か持山へ行たりこの邊も陵めきたる所也そこには二階やあり山のうち見はらし宜敷所多くありて彼是三四町もあるへしといふそこにて父上は辨當のひさこなと屢くませられたり茸は大かこに二ツ千を以かそふるはかりとりてそこに養もやきもしてみな給たり女共其外各之山を所々はせめぐりてくれ／＼に歸りたり宅は我と市三郎留守番にて家來に泉水にてあみをうたせたるに大鯉二尾を得たりみなもちにて味よし汁にしたるに大鍋一ツあり夫を用人給人其外へも給させて夕かたより酒のみたりおさとといふ父上へ酒奉るに三丁も四丁もある所をこゝかしこにて女共の奔走することいとあはれ也下女を遣はずして江戸の八百善などにて物かふ様なることはなしといふ故に夫は我隠居のちを待へしわれ七十には必政をいたして遊ふへしとおもふなといひて笑ひし也

○十七日 晴 この頃一乘院宮にて郷射禮を御覽に入たる人のことを聞

せみしに紀州の御家老久野丹波守家來高木作兵衛次男高木直三郎事應心齋正朝と云ものにも當時は紀州御家來にて射術修行のものにて着服は素絹布袴にて帽子は燕尾といひ鎌倉時代武家侍以上之無官剃髪のもの着せしもの故夫を着するよし申たり實にしかるや侍以上なといふこと近頃の唱のことし足輕なといふこと前にもいふことく騎馬のもの也布袴はひた三ツ也といふ

○十八日 晴 きのふは御清もすみたるによる五ツ頃より月至西よろし何分たまらずよつて庭の芝原へ行月をみたるにけしきいふへからす乍去さむければ市三郎に申付てそこにありたるくまてにて木の葉をとりあつめ其外木なときらせて焚火しなから月をみたりしはしありておさと來りて一壺の酒を携へてヒフを着てかしらは手拭をかぶりたりはんしものゝ如しいにしへの人のいふ月花の前に酒なきは清水にて泥足をあらひ花の木にフンドシをかけたると同しといひしもおもひやられて酒來りたらは

月の光を添ふるこゝろして焚火のわきに土瓶を置酒をあたくめて白詩にいふ林間に酒をあたくめて紅葉をたくといひし通のさまにていとおもしろし其内に松たけの土瓶むし出来てそれにて酒を屢のみて四時過になりて歸りて唐番二三枚かきたりそれにて今朝六ツ時より起て例の槍劔を遣ひたり十七日の月は十三夜と同じことなれと光弱し夜ふくる故かとおもふに左にあらず日光に遠くなる故なるへし薛文正か説に廿三日より末の月の光よきは日を負ふて出る故也といへり廿六夜などを賞するこれも同じ意なるへし

○十九日 晴 けふは法蓮村といふ所にて與力同心共狼烟をあくる奉行よりは幕五張に米壹斗の握めしにしめを出す例也四五年に一度の事なれは祭禮のことし方四五里内の人集るといふ也與力らの妻などは帯をこしらへ衣類をつくりて見に行といふ也○西洋のことの論をみるにみな空論也千言万語ありてもつまりは和と戦ふの二字におつる也力敵して戦ひ力

敵せずして和す彼と己とをはかりて此人は年齢何歳位也虚症也實症也といふをみて醫のくすりを與ふると同じこと也其論を外していふはみな不用のこと也いかにおもしろく書ても論策の文章のことし少しも役には立たぬこと也儒者等論は人にかたれましといふを先にしてかく故に醫論は尤にて病の直らぬこと多し孟子か滕公齊楚を恐れて相談されし時に周の大王の狄に土地を與へし例を引たるにておもへはいにしへより同じこと也今の儒をわるくいふへからざる事也この事新右衛門心得のため記す也こゝの根本より論すれば當時の御爲の論立也よく心得らるへし○與力らか狼烟の合圖にほらかひをふく也このほと頻に習ふといへと初學ひ故に其こゑしはかれし老人の風引たるかことし興福寺などには法用の貝ありて日々いたす故によく聲の立也夫をやとひてさするかた早し大筒をつくるは鑄物師よし水もりは大工よし夫を遣ふは矢張遣ひてにあること也世にかゝ類の迂なること至多し

○廿日 くもり きのふは狼烟に而人々行たり歸りてきくに三條通といふは大坂みち也その通りを村々のはたけ中はいくらもかゝりをたきつらねて方壹里はかりに星をつらねたるかごとく又與力らか家内等みなく幕うち廻して所々に見物して居たり御門主は法華寺御所に御成に而そこにて御樂あり笙鼓の聲しきり也例の野原にてめしをくふことを好む土地なれば所々に夥出て酒のみ歌ひ舞ふもありて其さま陣中夜かゝりのことくもみえ畑中にてよる酒のみたる躰は狐にはかされたる躰も有さおもへは松火の星のごとく成は狐火にも似たりなと民藏歸りてかたりし也わか見物所もあれと多く入費かゝり市三郎などは少々風邪故不行與力を殘念かりてせめて民藏になりと終迄見居くれと申故に同人は終りまで居たりと也宅にてはうらへ見物所をこしらへて一同参りたり今日なら中の酒はよほとうれたるへし○不二孝一件を本多侯より書狀來る

○廿一日 晴 昨夜柿獻上を御奉書相届○きのふ忠六一件に付而申渡之趣

等一覽且忠六等之書物をみるにいにしへ日本にては唐より傳はり候事をいふはかりに而夫も明經紀傳道等之博士か或は搢紳の人々の書生となる人々など專にて文學全にひらけず其後武家の世となりては尙更也しかるに御治世三百年文運ひらけて上下ともに文字をしるされ共教導の法なし人々の好に隨ふのみ也よつて學文のこゝろありて出來さるものゝ年をとりて与風文字に携ものいろくのことをする也其流心學のごとく又一轉して不二孝のごとし彼らか書をみるにことくく儒者の悟類語録のごときもの也只異端外道といふ迄の事也所謂花になく鶯水にすむ蛙にて教をうけすしておのつから理をかたはしを言て外道となる也こゝにいたりておもへはいにしへ聖人の郷學を設玉ひて愚夫愚婦迄の耳までもよきことをしらしめ給ひて力あるものは夫よりみちに入しなるへし不二孝などのことくうちにも相應に出來るもの共はみな道理にはさときもの共故に道理の上おもしろくなりて却而異端に墮る也可惜もの也上の御教導によ